





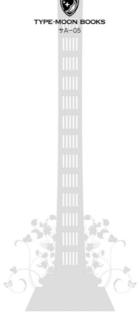




# ロード・エルメロイⅡ世の事件簿



「case.魔眼蒐集列車(下)」



Lord El-Melloi II Case Files

# ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿

+5+「case. 魔眼蒐集列車(下)」

### 目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 011

『第二章』 077

『第三章』 145

『第四章』 193

『第五章』 265

『終章』 363

『解説』 398

『あとがき』 402

#### ロード・エルメロイII世の

#### 事件簿

5「case. 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン(下)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

#### 目次 Contents

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

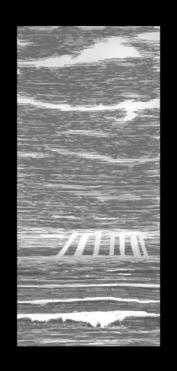
第五章

終章

解説

あとがき

## → 序章 →



現実じゃない、とは認識していた。

こんな光景が現実にありうるはずもない。

おそらくは浜辺なのだろう。しかし、その言葉から感じられる穏やかさはなく、代わりに途方もない量の飛沫が視界のすべてを埋め尽くしている。地平の果てに雪崩落ちていく海水は、もはや莫大という言葉さえ生ぬるい。ごうごうとどよもす水音だけで、鼓膜が破れてしまいそうなほど。

空に雲はなく、地に風はない。ただ流れ落ちる海水こそがすべて。

いかなる人々の営みも遠い、果ての果て。

つまり、

「……最果ての、海」

茫然と、口にしていた。

あの槍が、同じ最果てを冠していたのは、単なる偶然だろうか。

人にとって届き得ない『彼方』という概念こそが、あの槍もこの場所も規定してるのではないか? 愚にもつかない妄想かもしれないが、そんな思考は自分にとってひどく切実に胸をついた。届かないからこそ挑むのだと―『彼方にこそ栄え在りト・フィロティモ』と謳った時代の名残こそが、この場所を形作っているように思えて。

夢の、名残。

いつか、至るべき場所。

「一いいや」

と、誰かが否を唱えた。

息が詰まるほどに、その声は冷たかった。

「誰も、こんなものにはたどり着かなかった」

凍るとは、ただの比喩ではない。言葉の前に、世界はたちまちそ の有り様を失った。

見よ、たちまち波は白く時間を止めた。雪崩落ちる海水はその偉容のままに凍結し、片端から砕け散っていく。視界を埋め尽くしていた飛沫は、代わりにダイヤモンドダストと化して、あっという間に世界を別のカタチに変換していった。

振り向けば、はたして浜辺にはほっそりとした人影がたたずんでいた。うつむいた顔は定かでないが、長い黒髪から粘っこい怨念が滴り、波は濤とうを覆っていくようにも見えた。

海よ、凍えよ。

世界よ、停止せよ。

我が意思の前に、何もかもを陵辱せしめよ。

「王よ」

と、人影は語りかける。

「王よ」

その語りを受ける相手はいない。

しかし、必ずいるはずだという確信とともに、声音は轟いた。

「お前はどうしてこんなものを求めた。どうしてこんなものを手放さなかった。夢だと知っていただろうに、どうして夢だと割り切らなかった」

なんと激しく、なんと痛切な恩讐の念であったろうか。ぐつぐつと煮えたぎるような糾弾の叫びに、傍で聞いている自分さえ目眩を起こした。

立ってもいられず、同時に別のことに思い至る。

- ―これは、誰の夢だ?
- ―夢を見ている自分は、誰だ?

屹立した女を前に、自問が渦を巻く。

そうだ、確か、女の名は......

(.....ヘファイ.....スティオン.....?)

切れ切れに、意識がその名を吐き出したとき。

咆哮が、世界をこだました。

「答えろ、イスカンダル―!」



ふっ、と瞼を開いた。

列車の豪奢な部屋が儚げに揺れて、こちらが現実だと認識するまで少しかかった。

「あ.....」

ほんの数秒か、あるいは数分かほど、意識を失っていたらしい。

何か夢を見ていたような気がするが、どんなものだったかもう思い出せなかった。ただ、ひどく気持ち悪い。故郷ではしばしばあった現象だ。近くの何かに引きずられたのだろう。名にしおう魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンであれば、どのような魔性が存在していても不思議はあるまい。

誤魔化すように毛布を引き寄せて、ぽそりと呟いた。

「……どんどん、寒くなってきますね」

「ああ、暖房も効かなくなってきたみたいだ」

と、同じ部屋で暖炉を見据えながら、カウレスが答える。

吹雪の中に魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが突入して、しばらく経っていた。猛烈な白魔の襲来で、窓の外はモノクロームに描き分けられている。灰色の空とそれ以外の白。単なる自然の猛威でないことは、異界とのあわいを走るこの列車が停止したことからも瞭然であった。

徐々に、徐々に、列車の内側へも寒波が侵食しつつある。

放送で、各自の身は各自で守るようにと告知されたのも、このことだったろうか。

「先生は.....」

「……今は、大丈夫みたいだけど」

カウレスの視線を追って、自分もベッドを見やった。

横たわった師匠の息が、かすかに荒くなっている。あれから包帯を替えたり湯を沸かしたりして、可能な限り手を尽くしてはいるが、こんな状況が傷を負った身体によいとは思えない。忍び寄りつつある冷気は単なる温度の高低にあらず。人の精気を奪い取る悪魔の吐息だと、直感が告げていた。

この一秒ずつにも、削られている。

蠟ろう燭そくの炎みたいに、師匠の命が揺らめいている。

「.....つ」

たまらない気分だった。喉の奥に石がつっかえているかのようだ。ろくに息もできぬまま、腹の底からじわじわと黒い手が胃の腑を摑みあげてくる。こんな気持ちを味わうぐらいなら、自分の心臓を捧げてしまえればいいのに。

オルガマリーは、あれから戻っていない。

一『私は私でやる。ひとりだって十分。ううんひとりがいいんだ。トリシャは私がひとりでできるようにきちんと教えてくれたんだから』

そう言ったように、もう戻るつもりはないのかもしれなかった。

つかの間でも助け合いたいと思った相手に去られて、心細いのは 否めない。もっとも、カウレスの方は気にした様子もなく、ただひ どく真剣な表情で外の吹雪や師匠の様子に注意を払っていた。

(.....やっぱり魔術師らしいのかも)

そんなことを思った。

ある意味では師匠以上に突き詰められた、魔術師としての心性。

フラットやスヴィンとは違い、卓越した魔術を持たぬからこそ、本 来の魔術師の在り方がカウレスからは透けて見えるような気がし た。

(何が、正しいんだろう?)

寒さのせいか、思考ばかりがつれづれと巡る。

才能。血統。家系。技術。属性。心性。はたまた魔術回路に魔術 刻印。

魔術師には、さまざまな要素がある。師匠と出会ってきた一流の 魔術師はそうした要素を携えていた。筆頭は冠位グランドの蒼あお 崎ざき橙とう子ことしても、ロード・バリュエレータや蝶魔術のオ ルロック・シザームンドは間違いなく一流の名にふさわしい。しか し、師匠だとて著しく劣っているわけではないのだ。君主ロードと しては劣悪というだけで、ライネスの評価でも魔術師としては平々 凡々ということだった。

だとすれば、魔術師にとって最も尊ばれる要素とはなんだろう?

最も正しい在り方とはなんだろうか?

やくたいもない思考をぐるぐると渦巻かせる内に、ふと自分は視線をあげた。

部屋の中に、もうひとりの人影が現れていたのだ。

「グレイさん?」

カウレスには見えていないらしい。

しかし、自分には真紅の薔薇を纏う──白い女が見えた。出現というよりも、いままでだってずっとそこにいたのがたまたま露わになっただけというような、あまりにも自然な佇まいであった。

窓の隙間から忍び込んだ風が、薔薇を飾った髪を揺らすのを、茫然と自分は見ていた。

「あな、たは……?」

確か、車掌がこう言っていた。

支配人代行。かつての支配人が立ち去ってから、ずっと魔眼蒐集 列車レール・ツェッペリンを守っているとか、この列車のスタッフ ですら滅多に会えないとか話していた相手。

部屋の入り口を見ている、と思ったとき、すでに女は消えていた。初めて会ったときと同様に、消失は突然であり当然のように思えた。

代わりに、

「いいかなー!」

と、扉が叩かれたのだ。

聞き間違えようもない、勢いに満ちた声音であった。魔的な吹雪やこの列車には似つかわしからざる―あるいは突拍子もなさすぎて、かえって相応しい―そんな相手は、ひとりしかいない。

自分の代わりに、うなずいたカウレスがすっと前に出た。

慎重に薄く扉を開けると、予想通り、ピンク色に染めたツイン テールが立ちはだかっていた。

「んっふふふふ、イヴェットちゃんですよー! 元気してたかな!」

「ごめん、今ちょっと取り込み中なんで」

「おおおっと冷たい! って、いきなり閉じないでよ?!」

すぐさま扉を閉めようとしたが、タイミングよく少女が靴を扉に差し込んだのだ。そのまま眼鏡の少年を見やって、ことりとイヴェットが首を傾げた。

「んんん?! カウレスちゃん何か隠してる?!」

「そんな……」

「んっふふふふ、ばっちりびっくり感情視の魔眼です! 隠し事と か無理ですよ!」

誇らしげに笑い、ぐいとイヴェットが眼帯を上にずらした。

その内側に、加工された宝石──磨き上げられた緑の孔雀石マラカイトが輝いていたのだ。不勉強な自分でさえ、確かに魔的だと唾を飲み込むほどの妖光を湛えたまま、少女はふふんと鼻を鳴らした。

「だいたい魔眼がなくたって、スヴィンとかだったら匂いが四角いとかいがいがしてるとか言うんじゃないですか? 共感覚と獣性魔術の合わせ技だとか、あれはあれで厄介な同級生ですよね!」

「事情があると分かるなら、せめて察して、後にしてくれないか」

冷たくあしらって、カウレスが扉に差し込まれた靴を蹴り剝がそうとすると、慌てて少女は言葉を継いだ。

「ちょちょちょちょちょ! ちょっと待ちなさいってば! 相談があるのよ! ほら、そのためにこちらも来てもらったんで──」

「.....ああ<sub>」</sub>

と、うなずく気配が感じられたのだ。

カラボー・フランプトン。聖堂教会の老人。過去視の魔眼を持つ という相手を、イヴェットは連れてきているらしかった。

「聖堂教会の」

さすがに、カウレスがたじろぐ。

魔術師同士の争いを受け入れている少年も、別の側面から神秘を 刈り尽くさんとするかの組織には苦手意識を持っているらしかっ た。

「それとも、ここで叫び立てた方がいいかしらー?!」

もう叫んでるだろうとつっこみたくなったが、問答が長くなれば なるほど不利になるのは否みがたい。カウレスも渋々といった様子 で、閉じかけた扉を開いた。

「……分かった。入ってくれ」

諦めたように、ふたりを招き入れたのだ。

意気揚々と部屋に入ってすぐ、イヴェットは大きく目を見開い

た。

「わわわ、先生! どうしちゃったんですか!」

ぶんぶんと手を振って、ベッドのすぐそばに駆け寄る。

そのベッドに、師匠が横たわっていたからだ。単に眠っているのではないことは、いまだに荒い呼吸からも明らかだったろう。汗は時々拭っているが、まともな状態に見えるはずもない。

「事故みたいなものです」

と、カウレスは言葉少なに説明した。

「それって……トリシャさんを殺した犯人です?」

「分からない」

正直に言う。イヴェットが感情視の魔眼を持つという以上、偽りに意味がないと判断したのだろう。かといって、サーヴァントに襲われたなど余計な情報を与えるのも躊躇されるわけで、言葉自体を減らすのが一番マシな方法だった。

「そちらは、どういう用件だ」

「んー、ほら、ちょっと列車が止まっちゃってるじゃない?」

カウレスが水を向けると、イヴェットは苦笑して、床を指さし た。

静止しきった列車を改めて意識させてから、少女はこう言葉を継 いだのだ。

「このままだと、魔眼オークションが大幅に遅れる──場合によって は、今年の開催そのものが危ういんじゃないかって、周囲に呼びか けてるの」

「オークションが?」

そういえば、一度オークションが中止になった事例があるのを思 い出した。

あれは、蒼崎橙子と使い魔が関わっていたのだったか。もとの支

配人が姿を消したというのも同じトラブルによってだろう。――度 あったのなら二度あってもおかしくない。少なくとも、そう考える のは自然ではある。

「……俺にとって、ここのオークションは死活問題だ」

乾いた声で、カラボーが口にした。

「先に話したように、俺の魔眼はここで提供するつもりだった。来年まで待つことはできない。無論、オークションがなくとも摘出は行うかもしれないが、不確定要素に過ぎる。到底、このまま座したままではいられん」

「でも、ここのスタッフは魔眼ならとりあえず買い取ってくれるのでは」

自分の言葉に、老人はゆるくかぶりを振る。

「......ここのスタッフのほとんどは、魔眼自体に興味はないだろう」

「え? <sub>1</sub>

きょとん、と思わず声が出てしまった。

「でも、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンですよね。前の支配人がいなくなっても、魔眼のオークションを続けてきたんでしょう?」

それも、自分が聞いてきた限りでは、目的の魔眼が提供されなければ無理矢理に奪うほどの執着ぶりで。それほどのスタッフが魔眼に興味を持っていないなんてことがありえるのだろうか。

「要するにね。今のスタッフは続いてるだけなの」

と、イヴェットが補足する。

「もともとは主所蔵の魔眼を自慢するためのオークションだったわけだけど、主がいなくなった今は意味なんてなくてその行為を継続しているだけ。だったら、ちょっとした不備でやめてしまってもおかしくないでしょう? むしろ、かつての主を偲ばせるような完璧なオークションしかやりたくないと考えても、それはそれで自然だ

Г......

啞然と、自分は聞いていた。目的と手段が完全に逆転している。 主人が魔眼オークションを始めたのが自慢のためだと聞いたときも 驚いたが、スタッフが意味もなく継続してるだけというのは、なお さらこちらを釘付けにした。まるでプログラムを走らせたコン ピュータ。延々と時間を刻みつづける古時計の歯車のよう。魔術師 とは似て非なる、まるでがらんどうな生き方。

いいや。

誤解を受けないように、しなければならない。言葉を失ったのは 信じがたかったからではない。その逆で、身近すぎたからだ。

(......拙せつの、故郷と)

意味を喪失しても、意義を打ち捨てても、それでも現代まで続けてしまった事業──あるいはその結晶としての自分に。

「先にジャンマリオさんとも話してたんですけどねー」

腕組みしたイヴェットが、唇をとがらせる。

遅れるなら遅れるでかまわないと、かの魔術師は動かなかったそうだ。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの状況に応じて、オークションの招待客の思惑や関係も刻々と変化している。もともと社交に疎い自分からすれば、そうした人間関係こそが不可思議な魔術か何かのようだが、時計塔の複雑怪奇な権力構図でスパイを自称するようなイヴェットには慣れたものだろう。

「そちらの事情は分かりました。列車の停止については、俺たちも 弊害を被ってます」

淡々と、カウレスが言う。

「ですが、一体どうやって対処するつもりなんです?」

少年の質問に、神父服の老人がゆっくりとうなずいた。

「この森については、いささかの知識がある。……聖堂教会でも時 折話題にのぼる場所だからな」

「聖堂教会で?」

「ああ。この森の本体──腑海林アインナッシュは、とある死徒が 操っているという」

「.....死徒が」

と、カウレスが繰り返した。

「腑海林アインナッシュ。それ自体が思考し、捕食するひとつの生物であり、同じ名の上級死徒が操る固有結界ではないかとも言われている。おおよそ五十年に一度姿を現しては、集まってくる人間を襲い、膨大な魔力をもってその深奥にとある実を熟するのだとも」

死徒。この列車で何度か耳にした、吸血種のひとつ。

ならば、聖堂教会に知識があるのもうなずける。魔術協会以上に、かの組織は死徒と激しく敵対している。その存在を人類にあだなすものと見ているからだ。

(.....ああ)

それで、もうひとつの事実に、やっと自分も納得した。

この列車にカラボーが乗り込んでいるとわかった際、魔術師たちが異常に緊張したのは――聖堂教会の人間が、死徒の支配人の運営していたオークションにまともに参加するつもりがあるのかと、そういう風に疑われていたのだろう。

「今、魔力をもって熟する実といいましたか?」

「魔術師らしいな。意味が分かるか」

苦笑を滲ませて、カラボーが説明する。

「その実こそが、魔性の森に人の集まる理由だよ。なんでも、食らった者を不老不死にするなんて眉唾な伝説があってな」

カラボーの言葉に、自分とカウレスは息を止めた。

魔術などというよりももっと荒唐無稽な―子供のおとぎ話みたいな事象を語られて、返す言葉を持たなかったのである。

(.....まるで)

とも、思う。

まるで、昨日邂逅したばかりの英霊にも似た幻想。

同時に、死徒なんていう出鱈目な現実とセットに語られては、その荒唐無稽を否定することもできなかった。まして、仮にも聖堂教会の中で語られているからには、何らかの真実が潜んでいるはずだ。

実際、カラボーはこう続けたのだ。

「眉唖と言ったように、この実を食べたものはいない。だが、十分に爛らん熟じゅくした実からはたびたび血の雫が落ちるそうでな。ふん、食ったヤツもいないのに、不老不死の伝説が浸透したのは、むしろこちらが理由だ。これらの雫の一部は種となり、しばらく地中で眠った後、親とはまた違った進化かたちを選ぶ。――腑海林アインナッシュの仔というのは、そのなれのはてだよ。どうやら、この仔は氷雪を選んだらしい」

窓の外を見やり、カラボーが言葉を区切る。

ようやっと話がつながった。つまりは、死徒同士で争っている結果、こうして氷雪林に襲われたということか。

「……本来、死徒同士は縄張りを決めて滅多に干渉しあわないそうだが、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの支配人は姿を消して久しいようだからな。腑海林アインナッシュの仔も、誰かが管理してるわけじゃない。いつ起きても不思議のない鉢合わせだったんだろう」

「なるほど……」

だったら、さっきの支配人代行―白い女は、ひょっとしたらその話を聞かせるために、姿を現したのだろうか。

(.....どうなんだろう)

妄想に近くなってきたので、一旦思考を打ち切る。

いままでの事件で思い知ったのだが、自分なんかが考えすぎて も、かえって状況を悪くする。思考の迷路で動けなくなってしまう よりも、ひとつひとつ、自分のできることを積み重ねていくしかな い。

しばし沈黙してから、カウレスが新たに切り出した。

「じゃあ、結局どうやって、この森から脱出するつもりなんです?」

「車掌いわく、霊脈レイラインのポイントを見つければ、すぐでも 動き出せるそうだ」

前に停まったとき、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは霊脈レイラインを辿って走っているらしいと話していた。列車が止まってしまったのも、ほぼ同じルールだったらしい。

すい、とカラボーの黒い拳から、同じく黒い刃が延びた。

トリシャが殺された際、激昂したオルガマリーを気絶させた黒鍵 だった。

「列車が霊脈レイラインを見失っているのは、この森の魔術的作用 だ。なら、じかに歩いて主要な霊脈レイラインを見つけだし、こち らでいくつか道標を打ち込めば、脱出するのはさほど難しくない」

「道標を打ち込む……」

理屈は、通じているように思えた。

ただ、そのためにはこの吹雪の森に出なければならないということだ。カラボーの話通りなら、土地全体で思考し、人を喰らうような魔性の森に。

「どうする? 協力してくれる?」

隻眼を煌めかせて、イヴェットが問うた。

すぐには返事ができなかった。

Г......

ぶるり、と身体の芯が震える。脳裏にちらついていたのは、オルガマリーの従者──トリシャ・フェローズの死体だった。頭部を奪われた、あまりにも惨い死体。

このふたりだって容疑者には違いないのだ。

なのに、協力して魔性の氷雪林を探索する? それは、もはや正気の沙汰ではない。リスクを背負うどころではなく自殺願望としか思えない。もしも師匠の意識があれば、間違いなくひきこもっているべきだと断言しただろう。

だけど、

「……やります」

と、自分はうなずいていた。

「グレイさん」

「この冷気に晒されたままでは、師匠がもちません」

呼び止めたカウレスに振り向かず、自分は答えていた。正直どんな顔をしていたかは分からない。かちかちと奥歯が震えていることだけは理解していた。

深々とためいきが聞こえた。呆れられただろうか。自分と違って、正しく師匠の生徒であるカウレスからすれば、自分のやろうとしていることはあまりに愚かしかったかもしれない。魔術師ならば、もっと非情に徹するべきだと裁断するかもしれない。

対して、少年はあっけらかんと言ったのだ。

「分かった。なら、俺は先生の治療に専念するよ。グレイさんの手助けになれるものがないか見繕うから、五分待ってくれ」

てきぱき手荷物を開いて、なんやかやと魔術の呪体や触媒らしき 品を見定めはじめる。

茫然としたまま、自分は何度か瞬きしてしまった。

「カウレス、さん?」

「なんだか不思議な顔をしてるけど、身内にやたらと甘いのも魔術師だよ。少なくともギリギリまではね」

ぎこちなく笑いつつ、少年の拳がかすかに震えているのを見つけてしまった。

恐怖に耐えているのも、自分だけじゃないと思い知らされて、なんだかおかしくなってしまった。こわばっていた身体がほどけて、くすりと吐息がこぼれた。

「イッヒヒヒヒ! どうやら、やれることぐらいは見つかったか?!」

自分にだけ聞こえるぐらいの囁きでアッドが吹き込んだが、 ぎゅっと右肩を押さえこみ、力ずくで黙らせておく。見ていてくれ る友人がそばにいることが、ほんの少し嬉しいなんて、悔しいから 口には出してやらない。

「.....そういえば」

と、カウレスが切り出した。

「天体科アニムスフィアの従者──トリシャ・フェローズが殺された 現場では、焦ってる人物とかいなかったのか?」

「ん? んー、あの場ではあたしは見つけられませんでしたねえ」

イヴェットが、小首を傾げる。外見もあいまって、その仕草はふざけてるようにしか見えないが、ひとまず信用するしかあるまい。 どの道、師匠が倒れている今、自分たちに取れる手段はわずかしかない。

「行きましょう。腑海林アインナッシュの仔へ」

と、自分が促したのであった。

結論から言うと、第一次調査は五分で終わった。

道標を打ち込むより早く、列車のすぐそばで倒れている相手を見つけたためだった。

鬱蒼とした森の茂みだった。枯れた羊し歯だの葉の下に、こんもりとした雪だまりができあがっていたのである。不審そうにしたカラボーが触れると、ざざっと白片が滑り落ちて、内側の人物を露わにした。

「.....こちらは?」

と、落ち着いたバリトンで、カラボーが問いかけた。

見覚えのある相手ではなかった。雪にも紛うほどの真っ白な髪に 睫。長身ですらりとした肢体は、おおよそ二十代後半と思しい。 整った横顔は、すれ違った者が十人いればまず九人までを振り返ら せるだろう。

だが、自分たちが目を凝らしたのはそれではない。

細長い指が、バイオリンケースと……しわくちゃの封筒を握りしめていたからだ。

「これって招待状? じゃあ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン の招待客?」

「え、ええと……」

イヴェットが眉をひそめ、自分はおろおろと視線を彷徨さまよわ せたときだった。

「おげろぼおっ!」

雪まみれの青年が、吐血したのだ。

真っ白な雪が血の色に染まり、みるみるうちにその領土を広げていく。目にも鮮やかなそのアカイロに、思わずひっと喉を鳴らしてしまう。師匠と出会ってから、いくつも事件に遭遇してきたが、こんな風にまき散らされる血は初めてだった。

「し、死んじゃうんじゃ」

「……いやいやいや大丈夫。吐血は慣れてるから。ちゃんと増血剤 打ってきてるし」

青白い顔をした青年が、視線を持ち上げて、爽やかに笑ったの だ。

「え、え、え?」

「……いやあ、あはは。どうにも寒いなあと思ってたんだけど、ちょっとこう身体がさっぱり動かなくて。君たちも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの招待客なら、悪いけど列車まで運んでくれないかな?」

あまりにもあっけらかんと、死にかけていたはずの青年が口にする。

ほとんど屍に囁かれるような気分だった。真っ青な顔色も紫に変色した唇も倒れていたときのまま、表情だけは夏のリゾート地のごとき陽気さを備えている。実際イヴェットもカラボーも、こんな相手との遭遇は想像しなかったらしく、硬直したままだ。

どこか夢見心地にふわふわとした口調で、美しい青年は呟く。

「……うんうん。危うく凍え死ぬところだった。早くママに言って、温めてくれる女の人を集めてもらわないと。……ああ、今度はヒスパニックがいいなあ。いや、抱き心地だとロシア系も捨てがたい。いやいやいや温めてもらうなら、情熱的なラテンが一番かも。女性は皆天使だけれど幸せの形はそれぞれだよね」

「あ、クズだ」

「クズですね」

コンマ秒で、イヴェットと自分の意見が一致した。このまま見捨てていこうという結論まで算出しかけたところで、ふと青年の碧眼

がこちらを向いて煌めいたのだ。

「んんん、ひょっとして君、ウェイバーが連れてきたとかいう内弟 子?」

「つ!」

びくん、と肩が震えた。

「……拙を、ご存じですか」

「ははは、知ってるとも。私はウェイバーの親友だからね!」

「ウェイバー?」

それは、確か師匠の本名ではなかったか。ライネスによって、 ロード・エルメロイII世などという名前に封じられる以前の、師匠 の素顔。

「あの、あな、たは?」

「あ、うん。私は―」

次の瞬間、

「メルおぼろおおおおおおおおおっ!」

もう一度、青年は盛大に吐血したのであった。

\*

というわけで、列車に引き返すこととなった。

列車内のロビー車両へと戻り、温かいコーヒーを啜ると、やっと 青年は人心地ついたかのように息をついたのである。

「あははは。やあありがとう。ここまで引きずってもらった上に、コーヒーまで奢ってもらって」

「……師匠の知り合いなら、見過ごせないからです」

念を押しても、聞いてるのやらいないのやら、ふわふわした顔で コーヒーを啜っている。

三流詐欺師でも見るような目つきのまま、イヴェットが問うた。

「メルヴィン・ウェインズ、ですか?」

「おおご存じかな!」

にっこり笑って、青年が指を鳴らす。

ついでに片目を閉じて、人差し指を頰にあてているあたりが、大変にうざったい。

対するイヴェットは極めて胡散臭そうな声音を隠さずに、こう尋ねたのである。

「自分の工房から出てこない調律師って噂だったんですが、どうい う風向きです?」

「いやあ、ははははは。最近は体調よかったし、ウェイバーが魔眼 蒐集列車レール・ツェッペリンに来てるっていうからこれは自分の 目で確かめなきゃと思って。ついでにライネスちゃんも誘ったんだ けど、兄の不在を埋めてるのに行けるか馬鹿って断られちゃって さ。でまあ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの合流地点に向 かってたんだけど、突然地表に森が湧き出たんだよ」

聞き捨てならない言葉であった。

「ライネスさんを誘った? いえ、それより、森が湧き出した?」

「そうそう。ゲームかなんかみたいに、うぞっと荒野が森になって ね。いやあ壮観と言えば壮観だった」

指をうぞうぞと持ち上げて、青年──メルヴィンが表現する。

「あげく、森から触手みたいに枝が飛び出してきて、ヘリを捕まえてきたんだよ。あはは、回転翼ローターもびりびりちぎられるし、外装も紙みたいに破れていくし、だいぶ死ぬかと思ったねえ。でまあ、墜落するより前に脱出して、ほうほうのていで這いずってきた

んだ。途中で見事に意識を失ってたんだけど、君らが見つけてくれてよかったよ」

毛布にくるまりつつ爽やかに笑う青年をよそに、自分は喉のひきつるような気分を味わっていた。つまり、この妖異の森は空中のへりさえも捕獲して、撃墜せしめるだけの戦力を持っているということか。

魔術師にも飛行は難しいゆえ、この列車を追跡してくる者はいないだろう……と師匠は話していた。だが、まさかヘリでやってくる魔術師や、それをさらに撃墜するような森は想像の外だったに違いない。

氷柱でも差し込まれたように、背筋がぞくぞくする。

カラボーからも似たことは聞いていたのに、体感した相手から直接知らされると、別種の恐れが身内をつきあがってくる。

あくまでのほほんとした青年から視線をそらし、イヴェットに耳 打ちした。

「.....この人、どういう人なんです?」

「三大貴族に連なる名家の出よ。ただ、体が弱いとかどうとかで、 祭位フェスの調律師をやってる変わり種。先生と古い友人だとかい うのは聞いてたけど」

ツインテールの少女が面倒くさそうに答えた。

その態度は、メルアステア派のスパイを標榜している彼女にして も、一筋縄ではいかない相手ということなのだろう。

(調律師って確か.....)

魔術刻印を調律する、専門の術者だったはずだ。以前の剝ア離ド城ラで言われてたような魔術刻印の劇的な修復には至らずとも、ごく自然なサイクルで介入し、刻印を植え付けられた者の副作用を抑えたりするのだとか。けして魔術に詳しくない自分だが、時計塔でも珍しい専門職なのだろうというのは、なんとなく理解できた。

「イギリスの調律師としては折り紙付きね。まっとうな方法の範囲内で、魔術刻印を再生する者としてはほぼ右にでる者がいないでしょう」

「残念ながら、ほぼがつくので」

聞き咎めた青年が、苦笑して頰を搔く。

それから、きょろきょろと豪奢なロビー車両を見回して、青年は 首を傾げた。

「で、ウェイバーはどこ?」

「......今、案内します」

立ち上がり、ロビー車両から自分たちの部屋へと連れて行く。

予定よりずっと早く戻ってきたこちらに、最初カウレスは驚いた 表情をしていたが、事情をかいつまんで話すとすぐにうなずいて、 横たわったままの師匠を指し示した。

すると、

「.....馬鹿だねえ」

額に汗を滲ませた師匠を見やり、青年はしみじみと口にした。

「相変わらず、何ひとつ変わらない馬鹿のままだねえ。君にはもっ と楽な生き方がいくつもあるだろうに」

どうしてだろう。

あんなに怪しい相手だと思っていたのに、その声は自分の中にす とんと落ちてしまった。納得ができてしまった、と言ってもいい。 まるで、この若き刻印調律師が同じ思いを分かち合ってるような、 そんな心持ちさえしてしまって。

甘いかもしれないけれど、そんな風に思いたくなってしまって。

こほん、と咳払いする声が聞こえた。

「いいかね?」

後ろで待っていたカラボーが、こちらへ呼びかけたのだった。

「どうやら彼の心配はいらないようだし、最初の目的に戻りたいのだが。幸いといってはなんだが、ヘリから這いずってきた彼がすぐ近くで倒れていたのなら、外部までの距離はさほどじゃない可能性が高い」

「そうですね」

無論、森の深奥まで招き込まれてから撃墜された可能性もあるが、そこまで心配していてはきりがあるまい。

「ふむ。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが止まってしまったから、道標をつくらなきゃいけないんだったね」

と、メルヴィンが振り向いた。

その表情は、相変わらず底の見えない、ふわふわした微笑を湛えていた。

「だったら、私も協力させてくれないかな?」

内側に入ると、氷雪林は想像以上に難関だった。

一歩進むたびに、踝くるぶしまで雪に沈む。真っ白に閉ざされた 視界の隅から、時々思いがけない角度で灌木の枝がつきだして、身 動きがとれなくなる。カウレスが荷物から耐寒の護符を出してくれ たおかげで、寒さはいくらか和らいでいたが、それでも足を止めれ ば凍りついてしまいそうだった。

イヴェットと、カラボーと、メルヴィン。

これに自分を加えた四人で、林の内側を進んでいる。ダウジングの応用ということで、カラボーの手には黒鍵が握られていた。水源や鉱脈を探すのに現代でも使われている手法だが、聖堂教会の代行者となればなおさら精度は高いだろう。

ざくり、ざくり、と埋まった足を雪から抜く。

一歩ごとに、普段の十倍も体力を奪われてる感じだった。それ に、土地の様子も車窓から窺っていた景色と一致しないような気が して、自分は小さく首を傾げた。

「こんな山でしたっけ」

「おそらく、地形も何らかの操作をしてるんだろう」

重く、カラボーが言う。

「最初にも言ったが、本来の腑海林アインナッシュは五十年に一度、数日間だけ現れる、規格外の固有結界みたいなものだと言われている。腑海林の仔も似たようなものだが、こちらは同じ現象が二度現れた例はないというのが定説だ。おそらく一度きりで蓄えた魔力を使い果たすんだろう」

「……仔は、二度現れない」

どこかしら、それは寂しい響きがした。普通に考えれば、子供は 親よりも長生きするものではないだろうか。しかし、腑海林アイン ナッシュの仔はたった一度で消え失せるのだと。

「発生時間も、短い場合が多いらしい。こちらは個体差が大きいようだがね」

「それでも、この吹雪で立ち往生しているわけにはいきません」 自分が言うと、カラボーも小さくうなずく。

少なくとも、そこだけは互いの認識が一致していた。

「君は、ずいぶんウェイバーのことを案じてるらしいね」 すると、横合いからメルヴィンが口を開いたのだ。

「……あれでも、師匠ですから」

「それはそうだろうけど」

苦笑したまま、メルヴィンは足を進めていく。

来る前と違うのは防寒着を羽織ったぐらいなのだが、思いの外体力はあるようで、ここまで雪の中を歩いてきても軽く息を荒らげている程度だった。師匠ならとっくに音を上げているころだろう。 もっとも、吐血は二度ほど繰り返してたが。

「......あなたは、師匠とはずいぶん違うんですね」

「ん? ああ、あいつの『強化』は下手だからね。だいたい、こんなの魔術回路に神経の代わりをさせておけばいいんだから、動かすだけならなんとでもなるさ。残念ながら内臓はそうはいかないけど、まあ心臓さえ止まらなければ歩けるよ」

なんだか物騒な発言に聞こえたが、魔術師なんて大概がそうだろうと思い直す。

対するメルヴィンは、こきこきと手首を回しながら、薄く眉を顰ひそめた。

「ただ、幾分大マ源ナが使いにくいな。この森、空気まで違っ

ちゃってない? 1

「以前の調べではそうだ。ただ、腑海林アインナッシュ本体よりは 幾分マシかもしれん、教会の資料では腑海林アインナッシュの中で は一切の大マ源ナが使用できないというものもあった。およそ大規 模な魔術の行使は困難だろう」

「──魔術師殺しもいいところですね。調査用の魔眼維持するのも結構しんどいんですけどー?」

カラボーの言葉を受けて、くるりん、とイヴェットが目の横に指をかざし、例のポーズをつくってみせる。こんな吹雪でも彼女の信念を折ることはできないらしい。正直その強さは羨ましかった。 少々奇抜だろうが何だろうが、自分にはどうやっても見あたらない 美質だ。

すると、手元のバイオリンケースを持ち上げて、メルヴィンがウィンクしたのだ。

「うん。だったら良かった。私にもできることがありそうだ。──イヴェット・L□レーマン。あなたの魔術刻印を見せてもらえないかな」

青年の申し出に、イヴェットが眉をひそめる。

「それって、ウェインズの正規のお金取るんです?」

「非常事態ですから、ひとまずはロハで」

「だったらどうぞ!」

現金そのものな態度で、イヴェットがピンクのツインテールを持ち上げ、うなじを晒した。自分の目には分からないのだが、どうやらレーマン家の魔術刻印はそこに移植されているらしい。

メルヴィンはバイオリンケースから出した音叉を握り、しばらく 集中する。

その音叉で軽くケースを叩くと、殷いん々いんとした響きが吹雪の中を流れた。ゆっくりとイヴェットのうなじの上を動かしながら、青年は小さく呟いた。

「生体にはそれぞれ固有の波動がある。蟻だろうが鳥だろうが人間だろうが、自分だけの波動を持っている。これは血縁であれば近くはなるが、けして同一になることはない。……で、問題は魔術刻印もある種の生命だから、持ち主とは別の波動を持っているんだ」

言いながら、バイオリンケースからさらに薬品の入った瓶をいく つか取り出す。

「だから、この波動をなるべく近づけてやれば、それだけで刻印の 効率は格段にあがる」

手早くその中身を別のフラスコに混合し、攪拌する。

それから、もう一度音叉を叩き、フラスコの中身を指先につけると一まるで何かの魔法円でも描くみたいに、薬品を少女のうなじへとすりこんだのだ。

「起動せよActivate」

呪文は、短かった。

ぽん、と何かが破裂する音が聞こえた気がした。多分錯覚だ。現 実にはなりきれない神秘の現象を、人間の認識だけが受け止めるの だとか──そんな風に時計塔の講義では聞いたことがあった。

うなじをさすって、イヴェットが軽く目を見開く。

「何これ? 急に身体がぽかぽか温かくなってきたんだけど」

「今言ったように、一時的に刻印を活性化したんだ。魔力の循環効率を二割方向上させた程度だけど、体感的にはずいぶんよくなったんじゃないかな?」

「さすが調律師ね」

まんざらでもなさそうに、イヴェットは肩をすくめた。

「うん。これなら、霊脈レイライン追いかける間ぐらいは持ちそう」

「ははは、それは何より。カラボーさんは魔術師じゃないからいい として、グレイさんもどうです?」 「あ、いえ、拙も魔術師ではありませんから」

「だけどその右手……あ、いや、いいならいいけど」

言いかけて、あっさりと白い髪の青年はかぶりを振った。

「で、さっきの話だけど。ほら、ウェイバーと君のこと」

一度は途切れた話題へ、手前勝手に戻す。

なんともマイペースで面食らうばかりだったが、そんなこちらには一切かまわず、メルヴィンはこう言葉を続けた。

「聞いた話だと、魔術師として君を迎え入れたわけじゃないんだろう? なのに、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンなんてとびきりの危険地帯までついてきて、今また腑海林アインナッシュの仔にまで足を踏み入れている。なまなかな師弟関係だけで説明できるものじゃないと思うよ」

「それは、あなただって、そうでは」

つい、質問を質問で返してしまった。

行儀のいいことではないと思うのだが、青年は気にした風もなく うなずいた。

「そりゃあ私はウェイバーの大親友だからね!」

いつのまにか、大まで付与されている。

「彼の冒険には十年前から出資させてもらってるのだけど、我が身で体験できるのはなかなか機会のないものだからね。せっかくなんだし、毒を食らわば皿までIn for a penny, in for a poundの精神だよ」

「せっかくで、命を懸けるのも辞さないんですか」

「はは、なんせ私には魔術刻印もないから。仕事の引継準備さえできてれば、どこで死んでもさほど嘆く人もいない。おっと、別に先代のロード・エルメロイをくさしているわけじゃないよ」

人によっては、思い切り地雷を踏み抜くだろう発言をぶちかま

す。もちろん、今の師匠やライネスが苦労してるのは、先代のロード・エルメロイがほぼ何ひとつ準備せずに死んだせいなのだが、こう見事に踏み抜かれるといっそ清々しささえあった。

しなやかな指に雪風がまとわりつき、すぐさま視界の彼方に散っていく。真っ白な髪に整った横顔もあいまって、テレビのCMか何かに出てきそうな一幕ではあった。瞳のかすかな青色を除けば、ありとあらゆる色がこの青年からは遠い。

まるで、冬の精にも似て。

「あの、師匠のご友人とは聞きましたが、どういうご関係なんですか」

「うーん。一番適切なのは、借金の借り主と貸し主かな?」

首をひねって、メルヴィンが言う。

「あなたにも、借金してるんですか」

「むしろ、最初の借金相手だよ」

ふふんと鼻を鳴らして、青年は目を細めた。通り過ぎていった遠 い時間を愛おしむかのように、爽やかな声で言葉を続ける。

「初めて会ったときは、ママに用意してもらった呪体の宝石コレクションをメイドに持たせて、クラスでひとしきり自慢してたら、どうもむかついたらしいウェイバーに殴られたんだけどね」

「いい声で、クズなエピソード晒さないでください」

思わず、素で言ってしまった。

なんというか、あのアトラム・ガリアスタより底抜けで嫌みがない分、かえってクズ度が引き立つというか。どうして、そこまでママ推しなのか。ただ、むかついて殴りに来るというのが、今の師匠の印象と一致しなくて困惑してしまった。確かにフラットをとっちめるときは、相性的な問題から体力に訴えることが多いのだが、それだってひどく面倒くさげなのに。

「まあ、当時のウェイバーはだいたい何があっても苛ついてたんだけどね。とりつくしまもなかったし、いつ見ても論文か何か書いて

たし、多分時計塔の全員を馬鹿と思ってたんじゃないかな? まあ、ありていにいって刺々しい人格だったよ」

歩きながら、メルヴィンが言葉を続ける。

「あげく、降霊術だったか変身術だったか、とある授業の後こちらをつかまえて、『愉快な話を聞かせてくれるなら金でも何でも出すって言ったろう。だったらこの時計塔全部をひっくり返してやるから旅行費とチケットを出せ』とか言い出したんだ。いや確かに覚えはあるというか、当時の私の口癖だったんで旅費もチケットも用意したんだけどね」

Г.....

そんな師匠は、まるで想像がつかない。

自分の知らない師匠。自分の知らない時間。しかし、確かに存在 していた過去。

「あ、たいして期待はしてなかったよ。これはいよいよ故郷に逃げ帰るのかな? でも、それならそれで、一年ぐらいしてからメイドに追跡調査させたら面白いものが見られそうだから、約束は果たしてもらえるなとか思ってた。君は知ってるかな? 頑張ってきた人間が折れて、堕落してしまうところってのはなかなか美味しいものなんだよ?」

吹き付ける雪の狭間に、そっとメルヴィンの言葉が雫こぼれてい く。

色の薄い唇に先の台詞が似合いすぎて、悪魔めいて映った。人間が好きだとか嘯うそぶく口で、すぐさま甘い背徳と裏切りとを囁きかけるような、紙一重のイメージ。

「そんな彼が時計塔に帰ってきたら、借りた旅費を返すってしわくちゃの札を渡してくるもんでさ。旅行中で稼いだものか、外貨が結構混じってたな。しかも、『悪いけど約束していた愉快な話は何もできない。この通り謝罪する。ボクは本当に無力で馬鹿だった。だけど、どうしてもやりたいことがあるんでまた金を貸して欲しい。先生を失ったエルメロイ教室を買いたいんだ』とか言い出す始末だ。さすがに面白すぎるだろう。

こっちも興に乗っちゃって、ようしだったら金を貸してやるから

君と私は友達ということでどうだ! 親友なら催促は最大限待って やるともって呼びかけたわけ。まあ、最終的にライネスちゃんのと ころで借金を買われて、一本化されちゃったんだけどさ」

おかしそうに、メルヴィンが笑う。

変化のきっかけになったことなど、考えるまでもない。第四次聖 杯戦争。そして、その後世界を周遊し、何人かの生徒に魔術を教え たとか話していた。

ただ、もうひとつ気になって、尋ねてしまった。

「どうして……そんなに、師匠のことが気に入ったんですか?」

「うん? ああ、そりゃそうさ。人間ってのは案外成長するもんだよ。要するに生命自体がひとつのベクトルなんだから、放っておいても技術や能力は発展する。立ち止まる方が難しいぐらいだ。時計塔なんて場にいれば、そこそこの魔術の才能を開花させる人間なんていくらもいるさ。一だけど、そのベクトル自体が変わるってことは滅多にない。だって、それは真実、魂の根底から生まれ変わるようなものなんだから。とりわけ、自分の駄目さ加減にとことん向かい合うなんてことをした人間を、私はほかに知らない。興味を惹かれるには十分だろ?」

Г......

氷雪林に流れるメルヴィンの言葉は、かつて故郷で聞いた師匠の それと、どこか通じる気がした。

人間が本当に成長なんかするのかと嘆いていた師匠。そして今、 ウェイバーと呼ばれていた人間はその在り方を変えたのだと証言す るメルヴィン。ふたりの言葉は真逆のようでいて、なぜだかひどく 似通って思えた。

どうしてそう思うのか、うまく言えないのだけど。

「まあ、まさか、エルメロイの君主ロードになってあの現ノ代-魔 リ術ッ科ジを引き継ぐなんて思ってもみなかったけどね。前の学部 長が失踪してしばらく空席になってたから、なしくずしという感じ ではあったねえ」

「前の学部長が、ですか?」

「ああ。何かと器用な人だったんだけど、ウェイバーが時計塔に 戻ってきた直後いなくなってね。もともと現ノ代ー魔リ術ッ科ジは 軽んじられていたから、メイン学科なのにどこの君主ロードも引き 受けてなかったんだよ。誰もが持て余していたところに、十二家中 十二位まで格落ちしたエルメロイがぴたりとはまったわけさ」

「……あ、なるほど」

エルメロイ派が転がり込んでくるまでは、十二家のどこが現ノ 代ー魔リ術ッ科ジを取り仕切っていたのだろうと疑問だったのだ が、空白なら辻褄が合う。時計塔に通う者ならば当然知っているべ きことなのかもしれないが、まだ数ヶ月ばかりの自分からすると目 新しいことばかりではあった。

「私からも、ひとついいかな?」

と、メルヴィンが持ちかけた。

「誰が、ウェイバーをあんな風に傷つけたのかな? 私以外の誰が?」

ぞくり、とした。

とぼけた表情なのに、こちらの内側まで切り込まれた感覚。

「.....それ、は.....」

言いかけたときだった。

「一そろそろみたいよ」

と、イヴェットが口にしたのだ。

「ほら」

眼帯を押さえて、少女が人差し指で示す。

ツインテールの片方に指を差し入れ顔の半分を仰々しく覆った ポーズが本当に必要なのか、何かのアピールなのかは分からない が、カラボーは素直に従って、最初の道標──黒鍵を打ち込む。

白い雪の中で、それは小さな墓標に見えて、ひどく儚げに佇んでいた。

「これでよし。最低で後二本打ってほしいと言われてる。──イ ヴェット殿、次の案内を頼めますか?」

「はいはい」

イヴェットが気軽にうなずいて、また先に歩き出す。

思ったよりスムーズにいくかもしれない――そんなムードが漂い始めたときだった。

不意に、横合いでカラボーの足が止まったのだ。

「……どうやら、さっきの道標で侵入者と見なされたらしいな」

睨みつけた視線の延長上。密集した樹木の一端で、枝が、動いた。

雪の重みではなく、ひとりでに。

まるで鞭のごとくしなって、こちらへと鋭く弧を描く。人間の身体程度は紙切れのごとく貫通しそうな魔性の枝は、しかし、刹那閃いたカラボーの黒鍵に断ち切られたのだ。

「ヘリを襲ったという枝か」

地上で身をよじる枝を見つめ、冷ややかにカラボーが唇を動かす。

その視線にも、今の奇襲を跳ね返した一撃にも、一切の動揺は見られなかった。それだけの修羅場を聖堂教会で越えてきたのだろう。

吹雪の向こうから、新たな魔性の枝が伸び出てくるのを見なが ら、自分も身構えた。

「アッド!」

## 「ヒヒヒヒヒ! どうやら出番みたいだな!」

固フ定ッ具クを外されたアッドが、手元で死神の鎌グリム・リーパーと化す。できれば見せたくはない代物だが、そんなことを言ってられる状況でもない。

「おおっとダイナミック」

目を丸くしたメルヴィンの鼻先を吹き抜けて、新たに襲ってきた 魔性の枝を、死神の鎌グリム・リーパーが切断する。

「下がっていてください」

ぐるん、とさらに鎌を回して、自分は口にした。

だが、そのときには別の事態にも気づかされていた。

(.....これ、は)

体が重い。

メルヴィンが言っていたように、この氷雪林の空気は異常だった。いつもなら一気に吸収できるはずの魔力が、半分ほどしか集まってこない。その分意識を研ぎ澄ます。瞬発力に必要な魔力だけを供給し、耐久力や筋力を削いで再調整。

鋭く息を吐き出し、魔力とともに鎌を振るう。

こちらへ殺到した枝が、まとめて断裂する。鎌を構え直し、源の 樹木を睨みつけたところで、自分の瞳は揺れた。

切り落としたはずの枝が、足下でまた動いたのだ。

「――っ!」

硬直した自分の喉に、断ち切られた枝が再び伸びる。

こちらの意表をついたタイミング。防ぎようのない角度。喉元を 貫かれると確信したその瞬間、影が走った。

カラボーの黒鍵が、その枝をもう一度叩き落としたのだ。

「気をつけたまえ。おおよそ死徒と関わった相手を、人間と同じ生 命力基準で考えない方がいい」

聖堂教会の老人は、油断無く視線を配る。

もうひとりの視線が、今は別の意味を持った。

眼帯をもぎとり、イヴェットの瞳が輝いていたのだ。いや、眼帯 の下の瞳は生身にあらず、緋色の光を放つ紅玉ルビーであった。

「じゃじゃーん! イヴェットの加工魔眼・炎焼バージョン!」

ごお、と虚空が燃え上がった。

続けてこちらへ襲撃した枝の群れが、吹き付ける雪片もろともにことごとく身をよじる。イヴェットの視線に合わせて、猛烈な炎の 渦は雪を溶かし、周囲の枝をさらに燃やし尽くしていく。

「……なるほど。宝石を加工した魔眼は、ノウブルカラーすら複製するとは聞いたが」

「そんなに続かないわよ!」

「承知」

イヴェットの叫びと炎に、疾風のごとき黒鍵が応じた。

たてつづけに妖よう枝しを切り落とす手際は、もはやヒトガタの 黒い嵐に紛う。老齢など微塵も感じさせぬばかりか、自在に躍動す る身体は、野生の猛獣さえかなわぬほどの激しさを存分に発露して いた。

白い雪が散り、黒い刃が舞う。

横顔に刻まれた傷にも似て、鮮烈にひた走る。

( ──これが魔眼で、これが聖堂教会 )

ある意味、自分は感動すらしていた。かつて剝ア離ド城ラで出会った魔術師ハイネも所属していた期間があったそうだが、初めて見る生え抜きの実力。神秘を究めようとする魔術師と違って──ほかの神秘を否定することに専念した在り方。



だけど、それもまた美しい。

この極限状況にあって、カラボーという人間の挙動はひたすらに 洗練されていた。おそらくはカラボーひとりではなく、この老人ま で幾百人と伝えられ、磨かれてきた技術体系こそが今結実してるの だろうとも思われた。

### 「ようし交換!」

躊躇なく、自分の眼がん窩かにイヴェットが指を突き入れる。

再び、加工宝石の義眼を入れ替えた。今度は菫青石アイオライト。以前鉱石科キシュアの講師から受けた授業では、霊的感覚を強化する効果を持つとされ、船乗りたちが羅針盤代わりにも利用したとか古いスカンジナビアのサガに語られた霊石であった。

「あっ痛つつつつ.....って、はいこっち!」

イヴェットの案内する道を、一歩も外れずに黒い司祭服が翻る。

自分も枝の襲来に備えつつ、走るカラボーの横合いに並んだとき だった。

「っ<del>ー</del>!」

足下が、突然崩れた。

黒々とした穴の内側に落下すると思われた瞬間、カラボーの手が こちらの二の腕を握り、ぐいと引っ張り上げたのだ。

「あ、ありがとうございます」

「そこは、先刻雪が表面を覆っただけだった」

過去視。

この老人が持つ魔眼には、そんな活用法もあったのか。とはいえ 極度の集中を強いる戦いの最中に、過去の状況まで観察・利用する のは、いかなる修練のなせる業か。早くも数百メートルほどを踏破 しているが、カラボーの動きは衰えない。こちらの動きをカバーし つつ、魔性の枝を的確に封じ込めていく手際は、長年チームとして の戦いをしてきた者こそが蓄えた智恵だった。

「こ、これはさすがに……」

懸命にその後を追いかけながら、メルヴィンが目を回す。

もう数分ほど走ったところで、吹雪に覆われた視界から、険しい 下り坂が姿を現した。

「あちゃあ」

「止まるな!」

老人が叫ぶ。

その意味は明らかだった。自分たちの背後から、さらに死の枝の 群れが追撃してきたのである。幾重にも複雑に絡み合い、怒濤のご とく雪を蹴散らす枝の群れは、まるで巨大な蛇のように映った。

「滑るぞ!」

老人は険しい坂の手前で、地面を蹴った。険しい坂に身を躍らせるのを確認すると、イヴェットが何度も瞬きして、信じられないといった感じでかぶりを振る。

「ああもう! これだから聖堂教会は野蛮だっての!」

ツインテールの少女も、スカートをつまんで坂を滑った。

対して、自分はくるりと振り向いてから、息を切らせていた青年 を突き落とした。

「メルヴィンさん! すいません!」

「うわあああああ、これはジェットコースター気分だね! るぼお おおおっ!」

坂を滑りながら、速度も落とさず、器用にメルヴィンが吐血する。

魔術回路を神経代わりに使ってるというのは本当らしい。おおよそまともな人間であれば不可能な所業には違いあるまい。褒めるべきかどうかは別だけれど。

こちらも凄まじい勢いで滑り落ちながら、坂の下を見つめた。

すぐ下で、イヴェットが指を伸ばす。

「そこ!」

「おお!」

イヴェットの指示に、カラボーが黒鍵を投げ放った。

なにがしかの『力』が大地を走るのを、自分も感じた。

ふたつ目。

「後、ひとつ!」

滑走を続けながら、カラボーが視線を移す。

坂の下─切り立った崖のすぐそばからも、新たな死の枝の群れが 湧き出していた。自分たちを迎撃すべく、森が先回りしたのだ。ふ たつめの道標を打つに至って、彼らの敵意は倍増しにもなったよう に思えた。

彼らは、守ろうとしている。

最初の黒鍵を打った自分たちを、これ以上進ませまいと阻んでいる。

いいや、ひょっとして、

(......捕らえた魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを、逃がすまいとしてる?)

そんな想像が、頭をよぎった。

滑りながら、とりわけ大きな枝を断って、老人が叫ぶ。

「グレイさん!」

「はい!」

言わんとすることは、分かった。

滑走を阻むように、死神の鎌グリム・リーパーを突き立てる。棒 高跳びの要領で、ぐいんと反動も使って跳躍。鎌の重みで捻ね子じ みたいに回転すると、白い世界の中で大鎌は黒い半月を描いた。

自分を襲った枝がまとめて断ち切られるのを感じながら、空中でその内の一本を握りしめる。引き戻ろうとする枝を利用して、強引に空中でベクトルを転換。枝の源となった樹木へ突進する。

永い年月を湛えた氷河が、そのまま樹のカタチになったかのようだった。

崖のすぐそばで、その氷樹は次々に死の枝の数を増やした。

「あああああああっ!」

蜘蛛の巣を思わせて、無数の枝が全方位を蹂躙。さらにすべての 枝が氷の棘を何重にも生やして、一斉に中空を覆った。おそらくそ の棘に一本でも刺されれば、身体の内側をあまねく氷に犯されるの だろう。

かといって、このまま全力で突撃すれば、もはやブレーキなどかけられず崖の向こう側に落ちていくしかあるまい。

# (一かまう、か!)

意識から、恐れを排除する。

空中での位置とバランスだけを認識しつつ、ただひたすら身体ごとぶつけるようにして、鎌を斜めに振り落とす。たてつづけにちぎれた枝や氷柱の破片との、激突の痛みは無視。昔から自分の痛みを無視することだけは得意だった。身体でも、心でも。

ほんの一瞬、風が凪いだ。

氷樹が斜めに裂けたのを、落下とともに自分は見た。死神の鎌グ リム・リーパーが成し得た結果とともに、向こう側の崖へと落ちて いく浮遊感に捕らえられて、凄まじい勢いで崖の壁面が上に流れて いった。

「イッヒヒヒヒ! さすがにぺちゃんこは困るわなあ!」

アッドの軽口を無視しつつ、崖へ落下しながら、鎌の刃を限界ま

で伸ばす。

かろうじて、その先端が崖の壁面につきたった。何メートルも下にずりさがりながら必死にブレーキをかけて、半ばほどでようやく落下が停止した。

同時、上空で動きがあった。

遅れて滑ってきたイヴェットが、声をあげたのだ。

「あっち!」

「一、三つ!」

カラボーの投げはなった黒鍵が、イヴェットの指し示した地点を 穿った気配があった。

さきほどに数倍する『力』の奔流が、大地を迸っていく。地中を 巨大な生物がうねるかのごとき錯覚。ある土地では竜と呼び、ある 土地では神と呼んだかもしれない。霊脈レイラインと呼ばれるその 歪みに従って、時計塔の教室も建てられたのだと。

(うまく、いった.....?)

少なくとも、後続のメンバーは自分みたいに落下することはなかった。崖の上での戦いは、一旦幕を閉じたらしい。さきほどまで 雲霞のごとく押し寄せていた魔性の枝は、一本残らず消え失せていた。こちらを刺し貫いていた無形の敵意も。

改めて崖の下を見やり、まだ数十メートルほど残った高度に、ひんやりと恐怖が胃の底を撫でるのを感じた。

「グレイさーん!」

吹雪でろくに見えなかったが、メルヴィンの叫びがかろうじて届いた。

「大丈夫です! 後から合流します!」

それだけ応えて、このまま崖の上に戻るのは難しそうだと思い、 ひとまず下を目指す。 壁面の凹凸をホールドしてから、アッドを右肩の固フ定ッ具クに 戻す。フリークライミングの経験など当然ないのだが、不完全とは いえ『強化』した身体が補ってくれた。

(浮遊の魔術ぐらい、使えたら.....)

昨夜の、師匠の飛行魔術についての話を思い出しながら、ひとつずつ確実に。

それでも、さほどは時間をかけずに降りることはできた。一番下まで降り立ってから、ふと地面の一点に視線をやった。

「これ、は?」

雪に埋まっていたそれは、銀色の種に見えた。

すでに干からびて抜け殻か何かのように見えたが、その残り香でさえ鮮烈な魔力を発散させていた。一体、本来はどれほどの魔力を持っていたかと戦慄するほどの結晶。

ふと、カラボーの言葉を思い出した。

- ─ 『十分に爛熟した実からはたびたび血の雫が落ちるそうでな』
- ─ 『これらの雫の一部は種となり、しばらく地中で眠った後、親とはまた違った進化かたちを選ぶ』

(.....これが、その種?)

そんなものが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの行く先に偶然 埋まっていて、たまたまこんなタイミングで発芽したのだと?

本当に一?

「一面白いものを見つけたな」

と、声がかかった。

それだけで、思考も何もかもが凍りついた。

指一本に至るまで完全に硬直したのを、自分は感じていた。いっ そ寒さのせいだと思えたなら、どれだけいいだろう。そんな風に自 分を騙すことも許さぬほどに、佇んだ影はどうしようもなく苛烈 だった。たった一度の交戦は、自分の魂までも呪縛していた。

ぎこちなく、顔をあげる。

「な、んで―」

「おそらく、ここに来るだろうと思っていた。だが、あてがはずれたらしい。こちらの目的はあのしかめ面だったんだが。しばらく戦場を離れて、私の勘も衰えたか」

静まりかえった空気の中で、その落ち着いた声は厳かに響いた。彼女の言葉だけはこの魔性の森でさえ阻めないというかのように。

## (.....ああ)

死の枝が消え失せたのは、きっと彼女を怖れたのだ。

たとえ死徒に由来する存在だろうと。いや、だからこそ、かの英霊には近づけないのではないかと、自分はそんな風に連想していた。

「残念だが、あの偏屈男はいないようだ」

赤い鎧の女英霊──ヘファイスティオンが、つまらなそうに口にしたのだった。

崖下に近寄って、メルヴィンは大きな声で叫んだ。

## 「グレイさーん!」

暗さもあいまって、『強化』された目にもはっきりと様子は見て 取れない。誰かと対峙しているようにも思えたが、異様に濃い魔力 がこちらの認識能力を曖昧にしていた。

「これはどうも、何か下で起こってるみたいですが──カラボーさん?」

顔を上げたのは、かの神父が強ばる気配を感じたからだ。

## 「.....まずい」

はたして、カラボーの声は硬かった。

振り返ったまま、黒い肌の神父はこう呟いたのである。

「もう、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが走り出した。こちら に向かって」

\*

全神経が張りつめるのを、感じていた。

膝が震え、呼吸が浅くなる。それと対峙するだけで、魂が拉ひし げる。

敵は、境界記録帯ゴーストライナー。人類史に名を刻んだ、英霊の写し身たるサーヴァント。いかに魔術師が超人であろうと、その身に秘めた神秘は比較にもならない。

歩み寄ってくるその影が、自分には死神にしか見えなかった。

「さて」

と、くっきりした声音で、女戦士は告げる。

「どうやら、戦意はなくしてないらしい。君にどうこうしたいわけ じゃなかったんだが」

息を止め、固フ定ッ具クに戻したばかりのアッドを取り出す。

死神の鎌グリム・リーパーへと変形させつつ、必死に脳を駆動させる。一瞬でも気をゆるめれば、意識が途絶しそうだった。そうしてしまえればどれだけ楽だろうと思った。それでもやるべきことがある以上、こんなところで倒れられなかった。

「どうして、師匠を襲ったんですか」

「気にくわなかったからだって言ったぞ」

「だとしても、あのとき呼び出した理由は別にあるはずです。初めて出会ったとき、師匠の聖遺物を盗んだ輩の郎党だ、とあなたは言いました。それに、あなたがサーヴァントである以上マスターがいるはずです」

「サーヴァントの基礎知識ぐらいはあるのか」

くすり、と女戦士─へファイスティオンは微笑する。

その笑みに、心臓が凍りつくかと思った。恐るべき相手には何度 も対峙した。魔術刻印を狙う獣も、怪物の眠る匣はこを持つ冠位魔 術師も。だが、このようなプレッシャーは彼女が初めてだった。英 霊というよりも、純粋に戦闘に特化したヒトガタならではの、研ぎ 澄まされた闘志のなせる業。

「だったら、その刃で聞き出せばいい。かつての私は──私たちはそうしてきた」

「……拙せつの、流儀じゃありません」

震える切っ先を押しとどめる。

胃の底で蛇でもうねくるみたいで、今にも吐き出しそう。

膝を折ってしまいたいのを堪えながら、自分の耳は別の音を捉え ていた。

蒸気機関の猛る音。無論、ほとんどのエネルギーは魔力によるものなのだろうが、古色蒼然としたその響きは、かの列車にふさわしかった。

(……魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン……が?)

考えてみれば、不思議はない。

列車が止まったのは、腑海林アインナッシュの仔に囲まれて行き 先を見失ったからということなのだから、自分たちが道標を打ち込 んだ以上、すぐさま運行を再開してもなんら矛盾はなかった。おそ らくこの近くへ走ってくるはずだ。しかも、速度から考えれば数分 足らずで。

ばかりか、思いも寄らぬ現象はさらに続いた。

大地に亀裂が入り、たちまち自分たちの足場も含めて広がっていったのだ。

「地面が……! 」

「は、所詮は怪物の分体のごときもの。霊脈レイラインの支配権を 奪われて、早々に耐えられなくなったか」

ヘファイスティオンが、唇の端を歪める。己はどうとでもなるという自信ゆえか。実際、あの神威の車輪ゴルディアス・ホイールを もってすれば、砕けゆく森からの脱出など造作もあるまい。

自分には、そんな手段はない。

つまり―

(――撃で決めなきゃいけないって、だけ)

自分に言い聞かせる。どの道これほどの戦士に同じ手は二度と通

じまい。できることは変わらない。ただ刹那にすべてを込めるだ け。

つかのま、音も破壊も止まったように思えた。

限りなく時間は引き延ばされ、自分と女戦士との間で、凝固した。遠く崖の上で積雪が崩れ出す音も聞こえたが、なんら動揺はもたらさなかった。

## (雪崩.....)

おそらく、地形が崩れたせいだろう。

戦闘環境の変化としてのみ意識はしているが、もはや関係ない。 ここにいるのは自分とへファイスティオンを名乗る女戦士だけ。

― 『お前がその身に写すべき英雄は』

故郷での声が聞こえた。それさえも忘れた。初めてのことかもしれなかった。

命には、今しかない。過去も未来も命にとっては付属物でしかないのだと、追い込まれたこのときになって、はっきり自分は悟っていた。この女がマケドニアの戦士だというならば、当然そのように生きてきたのだろうとも。『彼方にこそ栄えありト・フィロティモ』とかいう見果てぬ土地へ希望をつなげた思想も、やはり命のうつろいやすい時代ゆえ生まれたものだったろうか。

「......ああ、悪くない」

と、女が唇を歪めた。

「この時代、もはや戦士など息絶えたかと思っていたが、お前には いい資質がある。生と死のあわいで、なお生にしがみつかんとする 煌めきがある」

「拙も、分かります」

と、自分は応じた。

「……こんなものより、師匠の苦しさの方が、ずっと価値があります」

「よく吼えた」

笑う、女戦士へファイスティオン。

雪が爆発した。地面を蹴った自分の足が、余波で周囲の雪塊を吹き飛ばしたのだ。

走る。

ただ全力で加速する。

風景が色を失うほどに集中を高め、一切合切の力をこの数秒に圧縮する。

決着までに放てるのは、ただ一撃。

ならば、選ぶべきは一

「アッド、第一段階応用限定解除!」

「ヒヒヒヒヒ! こりゃ仕方ないなイッヒヒヒヒ!」

手元で、死神の鎌グリム・リーパーが分解し、ルービックキューブを思わせて表面を回転・展開。内側で暴れる魔力を、新たなるカタチに誘導する。

破城槌。

最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド本体を除けば、アッドの中で 最大の破壊力を持つ形態。

ぐうんと振り上げた破城槌が、魔力の炎を吐き出す。サーヴァントのスキルに換算しても、Dランクの魔力放出に匹敵すると師匠に太鼓判を押された猛威が、一気にヘファイスティオンへと叩きつけられる。

受け止めたヘファイスティオンの剣が、軋んだ。

#### 「これ、は―!」

眼が見開かれる。さしものへファイスティオンも、破城槌の魔力 放出ならば一蹴できない。さもあらん。この魔力放出を支えている のは真正の宝具なのだから。

魔力を、さらに駆動させる。

体中の魔術回路が悲鳴をあげても、なお一心不乱に回転させる。 この身はそのための歯車システムと化す。ヘファイスティオンとの 間でつかのま拮抗した威力が、破城槌の背部から噴射する魔力に よって相乗され、そのまま女戦士の身体へ打ち込まれた。

反動で、大きく自分の身体が吹き上った。

「やった―!」

狙っていたのは、この反動だった。

崩壊していく崖の直上で、すれすれを走って、漆黒の列車が姿を 現したのだ。

(──魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン──!)

「グレイさん!」

遠く、声が聞こえた。メルヴィンのそれだったかどうか。

「グレイさん!」

さらに、少年の声が響いた。

カウレス・フォルヴェッジ。自分などより師匠を見ているべきなのに。

大きく開いた扉の向こうから、眼鏡をかけた少年カウレスが手を伸ばしている。列車とともに、彼方から押し寄せてくる大質量も、 自分は認識していた。

先ほど感知した雪崩だった。

列車を追うようにして、大質量の雪崩がこちらへ襲いかかってき たのである。 それでも、自分は止まらなかった。逃げる場所など存在しない以上、雪崩より早く魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗り込んでしまうしかない。目算なら、列車はギリギリで雪崩の範囲から脱出できるはずだった。

砕けていく崖を蹴り、最後の一歩に思い切り力を込める。

## (届け一)

手を、伸ばす。

必死に、手を伸ばす。

こちらに乗り出したカウレスの身体が近づく。その背後にカラボーとイヴェットの気配もあった。どうやら、無事に全員乗り込めたらしい。停車などした気配はなかったが、全員魔術師や聖堂教会の人間となれば、その程度は障害にならなかったろう。

### (一届け一!)

カウレスのそれと、指先が触れた。

刹那、風が巻き起こったのだ。あるいは腑海林アインナッシュの 仔の、最後の意地であったろうか。びしりと巻き付いた死の枝に身 体が引きずられる。けして鋭い動きではなかったが、極限まで集中 していた自分にはあまりに致命的な接触でもあった。

## 「――っ?!」

死神の鎌グリム・リーパーで切り払っても、すでに遅かった。

瞬く間に魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは通り過ぎ、墜落を始めた自分の身体に、雪崩が覆い被さってきた。純白の質量は、あらゆるものを押し流すだけの圧倒的な勢いで、自分もその一塊になりはてるだろうと嫌でも想起させられた。

# 「.....グレイさん.....!」

カウレスの叫びが、遠く、ひどく遠くこだました。

―ぷつり、と意識が途切れた。



―ほんのわずか、時間は遡る。

じわじわと、空気が動いている。

ひどく緩慢に、冷気が忍び込んでいるせいだ。暖房が動いてはいるが、やはり氷雪林から押し寄せる絶大な寒気には及ばない。一室のことだけではなく、徐々に魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンそのものが凍りつこうとしているようでさえあった。

そして、その部屋には、銀色の髪の少女が座り込んでいた。

オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア。天体科の君主ロードの娘。

周囲は、惨いほどに整っていた。ここが殺人現場であったなど、 もはや余人には判別できまい。絨毯やベッドはもちろんのこと、ス ペアのあった調度はすべて置き換えられている。殺されたトリ シャ・フェローズの首なし死体も、魔術刻印が腐敗せぬように保存 の魔術だけをかけられて、貨車へと片付けられていた。

そして、

「.....やっぱり、おかしい。おかしいのよ」

と、少女は低く呟いた。

ずっと、彼女はこの部屋で調査を続けていたのだ。

無論、これだけ清掃が終わった後だ。よく片付いた間取りには物を隠すような場所もほとんど存在しない。現代科学をもって調査したところで、有益な手がかりが見つかるとは思えぬ。なのに、少女はどうしようもなく丹念に、客車の半分ほどの空間を何度も何度も確認し続けているのだった。

理由は、さしたるものではない。

ごくごく些細な、ただの直感だ。エルメロイII世たちと別れた後、ほかに行く場所もなく自分の部屋に戻ってきたとき、ほんのわずか──あるかなしかの羽毛のごとき違和感を感じたためだった。

だが、何も隠しようがなく、血痕ひとつ残さず清められた部屋であるだけに、こんなことを続ける所業は強迫観念じみている。執念というよりも執着。実際、精神的な疲労のためか、少女の目の下に淡くくまが浮き上がっていた。もっとも、だから麗しい横顔が台無しになっているかというと、かすかにやつれた頰は少女にえもいわれぬ魅力を与えてもいるのだが。稀に、不運によってこそその美質を磨かれる人物がいるが、この少女も似た性質かもしれなかった。

あるいは、魔術師としては傑出した才能と言えたかもしれない。 他人からはいかに狂気に映ろうとも、自らの信じたことだけを追求 するのが、何千年と凡俗から目を背け続けてきた正しい魔術師ひと でなしの在り方である。

君主ロードの一族として、彼女はただただ自分だけの違和感を探し続けて—

「きゃっ!」

突然、列車が動き出したのだ。

慣性に耐えられずよろけたとき、オルガマリーはきゅっと柳眉をひそめた。

「一痛っ」

と、手をひっこめる。

「列車が動いた? 何があったの? いえ、それより.....」

少女の視線が、虚空へと向けられる。

そこには何もない。ただ薄く冷気が流れているだけだ。それで も、おそるおそる手を伸ばすと奇妙な疼きが感じられて、少女はこ ねるように指を少しずつ動かした。

「この座標に術式? 床でも天井でもなくて、列車との相対座標に

埋め込んでたの? でも、そんなのだったら、あのいけすかない君 主ロードあたりがとっくに見つけて......

そこまで言って、オルガマリーはもうひとつの事実に直面した。

「……私の、魔術刻印に反応してる?」

よろけた一瞬、無意識に魔術刻印を駆動させて『強化』を働かせていたらしい。アニムスフィアの魔術刻印は、まだ一部ではあるが彼女に移植されているのだ。その魔術刻印の駆動に反応して、隠蔽されていた術式が浮かび上がっていたのである。

でなければ、彼女にも発見できなかったろう。

(......ここは、多分)

死んだトリシャが直前まで椅子に座っていたなら、ちょうど彼女 の胸元あたりになっただろう位置だった。

虚空の見えざる魔法円に指をあてたまま、オルガマリーは目を細めた。

「この術式、見覚えがあるわ。確か……」

何度も、中空を白い指がなぞる。頭ではなくその指先が覚えた何かを、思い出そうとするかのようにも見えた。

(トリシャのフェローズ家は……アニムスフィアから株分けされた家だったわね……)

魔術刻印のことだ。

時計塔の重鎮たる家は、自らの勢力を増すため、魔術刻印を株分けすることがある。この株分け自体にもいくつかのパターンがあるが、フェローズ家は最上級──つまりアニムスフィアの源流刻印のごく一部を、直接植え込まれた家であった。

だからこそ、アニムスフィアはフェローズ家に絶大な信頼をおいてきたし、それにならって現当主たるオルガマリーの父も、トリシャ・フェローズを重用してきた。家庭教師としてのトリシャとオルガマリーはけして仲睦まじいとは言えず、予定通りの進度を達成し得ない場合はしょっちゅう手の平に鞭を食らっていたものだった

が、それはそれとしてトリシャのアニムスフィアへの忠誠度は疑うべくもなかったのである。

指先は、中空に固定したまま。

トリシャの魔術属性は、希少な虚数属性だったことを思いだす。 無いがあるとされる虚数空間は、ある種の次元ポケットのようなも ので、中に落ちたものは空間にも時間にもとらわれないモノにな る。

この次元ポケットに干渉できる相手は、最初の術式次第だ。基本的には同じ虚数属性ならということになるが、場合によってはもっと別の方法にも変更可能だとか、トリシャから聞いた事があった。

「……もしも魔術刻印によって限定をかけていたなら、同系統の魔術刻印であるアニムスフィアに同調してもおかしくない……?」

それは鍵のようなものだ。

もちろん、鍵なのだから普通は他人に開けられないように設定するのだが、わざと限定をゆるくすれば、他人との受け渡しにも使えるだろう。もしもトリシャが何らかの意図をもって虚数空間を設定したのだとしたら、それは......?

慎重に、オルガマリーが指を動かしていく。

おおよそ半回転したところで、その動きが止まった。

「ひっかかる。多分、この先に必要なのはパスワードよね。……トリシャが選びそうで、私なら見抜くだろう言葉……」

彼女から自分に、一番多くかけられただろう言葉を思い出し、少 しだけオルガマリーは泣きそうな顔になった。

やがて、その唇が短く呪文パスワードを唱える。

「.....お馬鹿なマリー。しゃんとなさい」

曲げた指先に魔力がこもり、鍵のように半回転する。途端、虚空で何かが反転して、内側に吞み込んでいた物体を吐き出した。

ごとん、と重い音とともにそれは落下した。

大きく、オルガマリーは目を剝いた。

「つ、何.....」

悲鳴をこらえるので精一杯だった。

時計塔は君主ロードの一族に生まれ、この列車でも従者の殺人などという事件に遭ったばかりの彼女にしてからが、それは想像もしなかった光景だったからだ。

「なんなのよこれ……! おかしい、おかしいわよ! どうなってるのよ! どういうことなのよトリシャ!」

ついに耐えきれず、叫んだときだった。

かさ、と音がした。

振り返った部屋の隅で、黒いものが動いた。かさかさかさと蠢う ごめくそれらが蜘蛛の群れだと、オルガマリーは気づいた。無論、 単なる蜘蛛ではなく、ある種の魔術師によって操られる使い魔の類 であると、ほぼ同時に認識していた。

# (一覗かれて、いた?!)

衝撃とともに、部屋の扉がきいと開く音がした。

鍵はかけていたはずなのだけど、蜘蛛が這いずっていたことから すれば、それも解除されていたのか。客車それぞれの鍵は単純な物 理錠だった。一定以上の魔術師であれば、開錠自体はさして難しく あるまい。

「やあ、すまないな」

と、入ってきた伊達男が帽子をとって、言葉だけ謝罪する。

ジャンマリオ・スピネッラであった。確かジャンマリオのゾンビ

クッキングだとか、ふざけた冠番組を持ってると言っていた男。蜘蛛たちは、この魔術師の使い魔か。

「もう分かってると思うが、ちょっと前からあちこち監視させてもらっててな。いやはや、俺にはまるで見つからなかったが、おたくの従者、とんでもない置きみやげを残していったもんだ」

呆れたような声とともに、男が白いスーツの肩をすくめる。

その背後で、もうひとり一

「ああ、よかった」

と、うなずく気配があったのだ。

そちらの方が、オルガマリーにはずっと恐ろしかった。

「見つけてくれたのですね。さすがは天体科アニムスフィアの名を 継ぐ方」

法政科の魔術師・化あだし野の菱ひし理りが、嬉しそうに微笑したのであった。

気がつくと、自分は横たわらせられていた。

背中がごつごつした岩場に触れている。

ぴちょん、と水滴の落ちる音がした。その水滴が石の表面で弾けて、響き渡るその感覚を、自分はぼんやりと追っていた。

(......洞窟......?)

呟いた視界の端に朧おぼろな人影を捉え、自分の全神経が沸騰した。

立ち上がろうとしたのに、膝に力が入らなかった。さきほどの魔力放出のためだろう。ただでさえ魔力を集めにくかったあの氷雪林で、金輪際の精才気ドを注ぎ込んだ当然の報いが、今身体を蝕んでいる。

それでも、喉だけは相手の名を叫んでいた。

「ヘファイスティオン―!」

マケドニアの女戦士が、洞窟の中で小さな焚き火の前にしゃがみ こんでいたのである。

こちらの叫びに気を取られることもなく、女戦士は炎に枝をくべていた。

「目が覚めたか」

と、視線もくれず、口にする。

はっと身体を触ると、ほとんど濡れてはいなかった。溶けた雪が 身体に貼り付く前に、払ってくれた誰かがいたらしい。

それがどういうことかは、さすがの自分にも分かった。

「なんで、助けたんですか」

「君は戦士だった」

炎を見据えたまま、女戦士の唇が動いた。

短く、鋭く。こちらの疑問を、最初から見据えた言葉でもあった。

「だったら、君を事故で死なせるわけにはいくまい。戦士は可能な 限り戦場で死ぬべきだ。ここで手を出すつもりはないから安心した まえ」

当然とばかりに、ヘファイスティオンは言ったのだ。

簡単な足し算でも問われたかのような返し。戦場では一瞬の逡巡が死を招くことを考えれば、彼女が生きた場所ではそういうシンプルな思考こそが尊ばれたのかもしれない。

しばし神経を張りつめさせていたが、彼女が襲ってくるような様子はなかった。

Г......

ゆっくりと、自分も腰を下ろす。

気息を整え、思考を巡らせる。精才気ドの消耗具合からすれば、 倒れている時間はさほど長くないものと思われた。まず数十分かそ こら。列車がどこまで行ってしまったかは分からない。合流が可能 なのか不可能なのか。仮に不可能だとしたら、どうやって無事を伝 えればいいのか。

ただ、焦りだけが強かった。

ぐるぐると思考が空転する。血がひどく冷たくて、嫌な汗が止まらなかった。

(師匠がいたら.....)

あるいはフラットでもスヴィンでも、ずっと気が楽だったろう。

列車のカウレスはどうしているだろう。最後にメルヴィンは列車

に乗っていたが、無事だろうか。あれから師匠の容態はどうなって いるだろう。

## (.....駄目だ)

こんなことを考えていても、意味はない。

今やるべきことは、もっと別だ。ほかの誰かじゃなくて、自分だけにできることを突き詰めなければならない。ここにいあわせてしまったのが自分なのだから、自分にとってのベストを考えられなければ意味がない。

(拙に、できることは.....)

ちら、と女戦士を見やる。

ただ炎の前に座り込んでいるだけで、その存在感はこちらを押しつぶしそうなぐらいだった。英霊は誰もがそうなのか。それともこの女が特殊なのか。いずれにせよ、自分が何かひとつでも持ち帰れるものは……

ひたすら考えた末、言葉はこんなカタチを選んでいた。

「……あなたは、師匠が呼んだ英霊と、どんな関係だったんですか?」

イスカンダルと、とは言えなかった。それを口にするのはひどくはばかられた。

いまだ緊張漲る洞窟に、しばし声音は反響した。殷々としたそれが途絶えきってから、ようやっと女は口を開いたのである。

「突然何を訊いてくるかと思えば」

くっ、と女英霊は喉を鳴らした。

「どんな関係? どんな関係か? ああ、昔はよく訊かれたものだ。いまさらこんな身体になって、また訊かれるとはな」

肩をすくめ、ヘファイスティオンが唇の端を歪める。

それでいて、火影の揺れる彼女の横顔は、どこか愉快そうだっ

た。ろくに友達もいない自分の鑑定眼があてになればだけど。

目を細め、洞窟の闇に聞かせるように、彼女の言葉が雫れた。

「もともとは、あれの母にお目付役でつけられたんだ」

「母、ですか」

突然出てきた登場人物に、瞬きしてしまう。

いや生前のことを尋ねれば、知らない人が出てくるのは当然なのだけど、それが母親だとは思いも寄らなかったのだ。これまで聞かされてきたイスカンダル──史上最も世界制覇に近づいたひとりから、母親につながるのは盲点だった。

「ふん。戦場から戦場へひたすら振り回されたおかげで、あれの愛人と勘違いする輩もいたがね。おかげでずいぶんと迷惑したさ。だいたい、ゼウスの加護だかなんだか吼える内にみるみる毛むくじゃらになって、可愛かった頃の面影なんてあったものじゃない」

「……そう、ですか」

なぜだろう。

その言葉に、妙に安心してしまった。転がる石がすとんとあるべき場所にはまったかのような、理由のない感情。

その安堵に切り込むように、女英霊は続けた。

「だが、あれほどの王はいない」

と、熱っぽく口にしたのだ。

炎に浮かされるように、ヘファイスティオンの言葉は激しかった。目の前の相手が突然その炎に化けたかとさえ思えた。二千年も昔から燃え上がり、けして絶えることのないヒトガタの炎。焰の意志。

「遥か大遠征も、エジプトの侵略も、ダレイオス三世との決着も、インドの密林での闘争も、そのすべてが心躍った。ついにガンジス川で引き返したときでさえ、昂ぶりが衰えることはなかった。たとえ病に倒れても、もっと先に行くのだと、最果ての海を見るのだ

と、偉大なる王は私たちを駆り立てた。言葉のどれほど熱かったことか。どれほど輝いていたことか。どれほど苛まれたことか。太陽の熱などあれに比べれば何ほどのこともない。細胞のひとつずつを煮えたぎらせ、たまらずに私たちは駆けていった。たまらずに叫んで、万里を超えていった。あたうかぎり生命の火を燃やし、ついに誰かの火が尽きて倒れても、振り向きもせずに歩いていった」

ヘファイスティオンの炎は、なおも熱を増すようだった。

小さな洞窟など燃やし尽くすほどに。この狭苦しい場に往年の万軍を想像させるほどに。そして、それほどの熱のさらに数倍も狂おしく、断言したのである。

「私は、あれの第一の腹心だ。それだけは誰にも否定させない」

Г......

違う、と思った。

師匠がかの英雄について語るのを──直接的であれ間接的であれ ──何度も聞いた。優しくも遠く、彼方に呼びかけるような言葉のひ とつひとつが、自分の胸の内で宝物になっている。

だが、それらとこの女では、こもった感情が違いすぎる。

今の彼女は、そう、昨夜初めて師匠と会ったときと同じだ。口論の余地もなく師匠を否定し、蹂躙した際の彼女。ああ、その言葉は誰かにあてたものなどではない。断じてない。それは、言うなれば絶対的な概念だ。たとえば、自らの神について語る信者の──

Г 🗆 🗆 🗎 ј

あるいは、それが本質なのか? 民の象徴としてあらゆる羨望を 束ね、その道標として立つ王ならば、部下がこのように讃えるのは 当然のことなのだろうか?

多分、近い。

同じだと言い切っても、ほとんどの者はうなずくだろう。

だけど、自分には何か……ほんの少しだけ、棘に似た違和感があった。ちくりと胸の中心を刺す、けして無視できない感覚。

「ですけど、あなたは」

その感覚が、自分の口をひとりでに開いた。

夢で見た光景。現実でさえなく、自分の妄想にも至らない歪な欠片。何ひとつ残らぬ最果ての海で叫んでいた女の姿が、自分の喉を 震わせた。

─ 『答えろ、イスカンダル……!』

「 どうして、たったひとりで、イスカンダルを責めていたんです か?」

Г......

沈黙が響きわたるように錯覚した。

それほどに重い圧が、洞窟を覆ったのだ。彼女の内側から発散される膨大な何かが、こちらの芯を挫いた。万力に締め付けられるごとき恐怖が、自分の肺も心臓も圧搾した。

「.....ヘファイスティオン......さん?」

「何を、見た?」

蛇を思った。

ぞろりと唇を抜け出たのは、先とうってかわった冷たい声音だった。金銀妖瞳へテロクロミアの両眼がこちらを見据え、一切の言い逃れを許さぬ光を放っている。その正体に気づき、視線をもぎ離そうとした直前、魔眼とともに彼女は命じた。

「答える。何を見た」

強制の、ノウブルカラー。

「……夢で……あなたが……」

その魔力が自分の喉を操り、言葉を紡がせたのだ。

「……遠い……海にひとりきりで……こんなものが……お前が望んだものかって……どうして……手放さなかったのかって……」

自分の意識を離れて、無理やりに答えが絞り出される。列車の屋上のときのように、魔術回路を洗浄しようにも、アッドは手から離れた状態だった。

「答えろ、イスカンダル……と」

そこまで答えて、やっと呪縛から解放された。

彼女の命令が、終了したのだ。

「ああ、気づくべきだった。お前は巫女の一種か。とりわけ憑依に 長けているようだ」

氷と鉄が擦れ合わさるような声音で、ヘファイスティオンは口に した。気の弱いものならば、それだけで自ら命を放棄するかもしれ ない。声音の奥底から滲み出す敵意は、それだけの毒を滴らせてい た。

「だが、ここで手を出すつもりはないと言った。マケドニアの戦士 が約束を違えるなどあってはならない」

そう言って、彼女はゆっくり立ち上がった。

踵を返す。

革と岩場の擦れる音さえも、刃のようだった。鼻腔を火打ち石み たいな臭いがついた。

「動けるようになれば、出て行くがいい。あの列車に追いつけるかは知らんが」

足音とともに、洞窟からその影が消えた。

威圧感が身体から溶けていくのには、もう数十秒ほどかかった。 ぶるぶると今にも震え出しそうな身体をこらえ、さらに数分ほどし て強引に立ち上がる。いくらでも寝ていたかったが、そうすれば師 匠と合流することは不可能になってしまうだろう。

はたして洞窟を出ると、地形はすっかり変わってしまっていた。

氷雪に満たされていた魔性の土地は嘘のように消えて、代わりに 鬱蒼と茂るいつもの林が自分を迎えたのである。まだ日は高いもの の、林の中は薄暗く、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの行く先 など分かるはずもなかった。

「どう、すれば......」

ぎゅっ、と胸元を握りしめる。

その拍子に、指先がフードの内側のとある品に触れたのだった。

\*

「通過できた、か……」

運転席に座り込んだまま、車掌がゆるく息をついた。

彼を知る者ならば、それが安堵の吐息だった事実に眼を剝くかも しれない。歯車などよりもよほど正しく、列車を運行するためにす べてを捧げた存在こそが彼だったのだから。

「万が一、腑海林アインナッシュの本体が現れたらと思ったが…… そちらは杞憂だったようだ……」

「よろしゅうございました」

オークショナーも、小さくうなずいた。

仔ならともかく、腑海林アインナッシュの本体が現れた場合、その格は姿を消した自分たちの主人に匹敵する。この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンだけは命にかえても守らねばならなかった。 残された者に、それ以外の使命などありはしないのだから。

しばしの間をおいて、まるで木の根を引き抜くように、車掌は立

ち上がった。

「予定外の時間を食ったが、しばらくは追加の客が来るのを待つ」

いつもなら、常連の客が使い魔などを送って来る頃だった。たとえ自分が落札しないとしても、どのような魔眼をどのような者が手に入れたか知ることは、魔術師の世界を生きていく上で重要な情報だからだ。

しかし、現状はようやっと腑海林アインナッシュの仔を脱出した ところだ。仕掛けはあるが、常連の魔術師たちといえど半分ほども 集まれるかどうか。

事情を察したのか、オークショナーも小さくうなずいた。

「腑海林アインナッシュの仔からも、ひとり戻ってないようですが」

「ひとりで済んだなら、ご加護があったと感謝すべきだろう。それが彼女らの信奉するなにがしかか、もっと別のものかは知らんが」

厳かな声で、車掌は告げた。

それが、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを運行する者の 結論ではあった。 「……さすがに、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン。霊脈レイラインさえ見つけられれば、腑海林アインナッシュの仔ごときは障害にならないか。いやあ面白い! これだけ心躍るものをこの目にできるなんて!」

心底の感動を漲らせて、メルヴィン・ウェインズは空を仰いだ。

草原である。

冬にも青々と翻るさまざまな草の葉に混じって、ぽつぽつと枯れ 残った赤紫色のヒースの花が咲いている。最近人の手が入った場所 らしく、斜面などには開発された跡もあったが、あくまで初期の措 置なのか、ほかの人の気配や建物は見られなかった。

そんな草原に停まった貨車の最後部で、真っ白な髪の青年はバイオリンケースを掲げ、ふるふると打ち震えているのであった。

あれから、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは十分ほど走った ところで停車していた。どうやらメルヴィンが言っていた通り、も はや腑海林アインナッシュの仔は脅威にならないという判断らし い。

対して、同じく貨車の最後部で座り込んだカウレスは、そわそわ と何度も列車の来た線路を見つめていた。

その様子でようやく気づいたのか、メルヴィンも慌てて振り向いた。

「あ、いや、グレイさんについてはもちろん残念に思ってるよ!でもほら、彼女打たれ強そうだし、雪崩のひとつやふたつぐらいなら生き延びてるんじゃないかな?! さすがに合流は難しいかもだけどさ!」

「言い訳はいいですよ。メルヴィンさんが魔術師らしいだけなのは 分かりますから」 カウレスが、ひとつため息をつく。

この青年が、他人の失墜に喜悦するタイプなのは、なんとなくここまでの交流で分かっていた。エルメロイII世の義妹ライネス―この義妹というのもさまざまな派閥闘争の果てにできあがったようなのだが―と同じような性質だ。ただ、彼の場合はどこか違っている気もする。

たとえば、それは目的と手段。あのライネスが他人の葛藤や苦悩を嗜好して、その手段として他人と接触していることと逆に、この青年は人間の観察そのものが目的で、結果として悲劇も愛しているかのような。

そんな想像を、カウレスは数秒ほどで振り払った。

なお、青年の胸元に差したハンケチーフが薔薇のごとく赤く染まっているのは、また吐血した証である。腑海林アインナッシュの仔を脱出した後、しばらく増血剤を飲んでうずくまっていたのだが、わずか数分の間に再び凜々と立ち上がってきたのだった。

「しかし、ずっと昔からあったようにしか思えない線路だが、列車が霊脈レイラインを見失って走れなかったということは、この線路もさっきまでなかったことになる。たった今形成されたのか。それとも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが霊脈レイラインを辿ってるときだけ世界の裏から浮かび上がったりするのか。うむ、大変に興味深いな! これは論文のひとつでも上梓すればママに褒めてもらえそうだ!」

線路を見下ろし、しみじみと青年が述懐する。

ほかに、いくつか使い魔らしき影が出入りしていたが、おそらく 先にイヴェットなどが話していた追加の招待客というやつだろう。 最初から参加しない魔術師はたいして魔眼オークションに本気じゃ ないと言われていたように、メルヴィン以外の者はあくまで使い魔 のみの参加らしい。

そのほとんどは、カウレスの入ったことのない魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの第三車両へと吸い込まれていった。そこが使い魔たちの待機場所ということのようだ。

「……魔眼のオークションは夜か」

呟いたメルヴィンとともに、汽笛が鳴った。

「お待たせしました皆様。規定の時間となりましたので、出発します」

放送と同時、煙突が黒々とした煙を吐き出したのだ。

ゆっくりと列車が走り出し、速度をあげていく。実際のところ、 けして純粋な蒸気機関ではなく、多分に魔術や神秘を利用した動力 ではあろうが、次第に遠くなっていく風景にカウレスはたまらなく 表情を歪めていた。

「グレイさん……」

その声すら流れ、千々に砕けていく。

あらゆる想いも祈りも打ち捨てて、列車はただ加速していく。

次の、瞬間だった。

「来た!」

と、その顔が輝いたのだ。

坂の上だった。そこから駆けてきた少女が、地面を滑り、走り出 した魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを追ってきたのだ。

\*

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが走り出すのを、自分も認識 していた。

ぎりぎりまで『強化』した身体で、風の抵抗を避けるため、姿勢

を低くする。氷雪林が消えたせいか、『強化』はさきほどよりもずっとうまく機能していたが、このままでは間に合うまいとも計算できた。

だから。

(......今度、こそ!)

「アッド! 第一段階応用限定解除!」

駆けながら、アッドを解放する。

新たな限定形態は『大盾』。橇そりのごとくその上に乗って、大 盾の前面から一気に炎を解き放つ。魔力の炎で焼き払われた草原に 内心で謝りつつ、猛烈な加速にぎゅっと身体を丸めた。

空を、飛んだ。

放物線を描き、貨車の横合いから列車に突撃する。

「グレイさん!」

と、カウレスが何かの呪文を詠唱した。

激突の寸前、ごおっと吹きつけた横風が捉えた次の瞬間、激しく 列車にぶつかった。それでも意識は失わずに済んだ。咄嗟にカウレ スの行使した風の魔術が、衝撃をいくらか弱めてくれたらしい。

貨車の壁に引っかかるようにしてぶらさがりながら、自分は弱々 しく頭を下げた。

「あ、ありがとうございます」

「はは、よかった……」

と、カウレスも鉄柵によりかかったままで、白い歯を煌めかせた。

「良かった……間に合ってくれた……」

「.....はい。間に合いました」

大盾になったアッドをもとの封印形態で固フ定ッ具クに戻し、慎

重に壁を伝って、カウレスたちが待つ最後部のデッキ部へと移動する。それから、もうひとりの相手がぱくぱくと口を開いているのに、淡く微笑みかけた。

「メルヴィンさん」

「......あ、ああ。グレイさん。よくご無事で。というか、よくこの 列車の位置が」

茫然とした青年を前に、自分は懐へ手を入れた。

そこから抜き出されたしわくちゃの紙切れに、ふたりが目を見 張ったのだ。

「これ……メルヴィンさんの招待状です。すいません。返すの忘れ てて」

ぼんやりと、招待状は光を放っていた。

その光が列車の位置を示してくれたのである。おそらく中途乗車 する招待客を案内するための機能だろう。倒れたメルヴィンからた またま見つけたこの招待状が、自分をあの洞窟からずっと導いてく れたのだった。

「はは、なら幸い」

と、メルヴィンはこめかみのあたりを搔く。

そこで、ついに自分もたまらずに口を開いた。

「あの、師匠は!」

あわてて詰め寄った自分を、カウレスがとりなした。

「大丈夫だよ。さっきの氷雪林を出てすぐ、容態が安定したから。 まだ意識こそ回復してないけど、あの分ならすぐによくなる」

「そう、ですか」

途端、力が抜けて、そのままへたりこんでしまった。あの洞窟からここまで、ずっと『強化』状態で走り続けていたので、緊張の糸が切れると同時に限界を迎えたらしい。単なる疲労というよりも、

もっと芯の部分で、まるで骨でも抜かれた気分だった。

「イヒヒヒ!」どうした腰が抜けたか! つか酷使はともかく盾に乗るとかないだろいい加減もう少しは匣扱いってものをわきまえて―」

「ん、何の声です?」

「.....な、なんでもないです」

小首を傾げたメルヴィンにかぶりを振って、ひそやかに右手を打ち振る。くぐもった悲鳴はこの際無視だ。ただ、身体中から抜けた力はそのままで、立ち上がるのにはもう少し時間が必要そうだった。

そんな自分の手に、温かな指先が触れた。

「おかえり」

カウレスが、こちらを引っ張り上げてくれたのだ。

「.....はい。ただいま」

「先生の様子、見に行こうか」

「はい」

素直に、少年の肩を借りた。

ゆっくり貨車の方へ歩き出していくと、新たな気配が闇から現れ たのである。

「ああ、誰かまた乗ってきたようだと感じて、念のため見に来てよ かったですわ」

口にしたのは、目にも鮮やかな民族衣装の女だった。

夜の色を梳くしけずったごとき艶やかな黒髪に、淡く朱をひかれた唇。楚々と品よく、しかし物音ひとつ立てぬ足運び。凜としたた

たずまいこそが、今は神秘や魔術より恐ろしかった。

化野菱理が、ただ美しく微笑していた。

「どういう御用ですか」

「皆様に、ロビー車両へ集まってもらってますの」

まるでお茶でも誘うかのように、女は口にした。

しかし、この相手がそんな話を持ちかけるはずもない。

「……どういう、ことです? どういうつもりなんです?」

「だって仕方ないでしょう。私の柄ではないのですが、いつもの方がだらしなく眠っているようですから、私が探偵の真似事をするしかありません」

法政科の魔術師・化野菱理は、嫣えん然ぜんと唇を歪めて、宣言したのであった。

「皆様揃っていなければ、犯人を突き止めるわけにいきませんも の」 自分たちの到着が、どうやら最後になったらしかった。

イヴェット・L□レーマン──魔眼の少女。

カラボー・フランプトン一聖堂教会の神父。

オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア──天体科アニムスフィアの後継者。

メルヴィン・ウェインズ──調律師。

ジャンマリオ・スピネッラ─元テレビ局の魔術師。

化野菱理──法政科の魔術師。

続いて、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのメインスタッフ。

車掌のロダン。

オークショナーのレアンドラ。

自分も含めれば、合計九名となる。ここからメルヴィンを外し、 亡くなったトリシャと、師匠とカウレスの三人を加えれば、最初に 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗り込んだときのメンバー だった。

(.....)

敷かれた絨毯は柔らかすぎて、くるぶしまで沈み込むようだ。並べられたテーブルには上品な焼き菓子や紅茶も用意されていて、まだ昼下がりなんだと今更に気づいた。短時間とはいえ気絶していたこともあって、完全に感覚が狂ってしまっている。今朝からたった半日の出来事は、あまりにも圧縮された時間だった。

そのテーブルのひとつで、ぶんぶんと白い手が振られた。

「おっかえりなさいグレイちゃん!」

イヴェットが、眼に痛いぐらいピンクのツインテールまで左右に 揺らして、こちらに声をかけてきたのである。

「あたしは絶対帰ってくると思ってたわよ!」

「……ほう。先生の内弟子って、欠員で枠が空いたりするのかなと か言ってたがな」

「い、言ってない.....って、神父さん?!」

隣に座ったカラボーに、振り向いたイヴェットが硬直する。この 四角四面な神父が冗談を言ったりするのだと、自分も瞬きしてし まった。ほんの一時間足らずだが生死をともにした相手の、意外な 一面。

咳払いした神父にひひっと笑ってから、イヴェットは改めてこちらに話しかけた。

「でも、よくあの雪崩で助かったねえ」

「ちょっと……幸運に助けられました……」

さすがに、英霊に助けられたとは言いにくい。まして昨日は敵対して命をやりとりした相手だなんて言い出したら、自分の拙いコミュニケーション能力では一晩かけても足りなそうだ。

ついと神父は瞳を動かして、こちらに尋ねてきた。

「もうひとりの、エルメロイの弟子はどうしたかな」

「カウレスだったら師匠を見ていただいてます。拙がこっちに来た 方がいいと言われて」 ここに来る途中、一度客車の部屋に立ち寄った。カウレスの言った通り、まだ意識は取り戻してないようだったけれど、だいぶ顔色はよくなっていた。それだけでどれほど自分が安心したことだろう。あの氷雪林での戦いは無駄ではなかったと、どれほど嬉しかったことだろう。

「腑海林アインナッシュの仔では、ありがとうございました」

「最初に言った通り、自分のために持ちかけたことだ。礼の必要はない。……だが、君の師匠は早くよくなればいいな」

「ありがとうございます」

礼を言って、振り返る。

ロビー車両には、もうひとり話さねばならない相手がいた。

ひとつ深呼吸をしてから、そちらへと歩み寄る。

「オルガマリー……さん……?」

銀色の髪の少女は顔をあげなかった。

ずっとうつむいたままで、足下にはトラベルバッグ大の箱が置いてある。妙に興味を惹かれる箱ではあったが、今は彼女の方が気にかかった。

「オルガマリーさん」

「知らないわ。話しかけないで」

と、少女はそっぽを向いた。それ以上踏み込むこともできず、逡巡していると、彼女はもう一言だけ付け足したのだ。

「……あなたの師匠は、どうなの?」

「おかげさまで安定しました。今はカウレスが見てくれてます」

さきほどのカラボーと、おおよそ同じことを言った。

さほど接触が多かったとも思えない師匠なのに、不思議と気にさ

れているのは、あの人ならではの特性だろうか。そんな師匠だからこそ、今自分も倒れ込まずにすんでいるのだろうと思えた。自分のために立ち続けるのは難しいけれど、それがあの不機嫌そうな人の支えにわずかでもつながるのなら―そんな傲慢なことを思っていいのなら、もう少しだけ、うずくまらずにいられるような気がしたから。

「そう」

と、オルガマリーは呟いた。

それきりで会話は途絶えたけれど、嫌な気はしなかった。少女がけしてこちらを──師匠を無下にしているわけじゃないのは伝わったからだ。

足下の箱について尋ねたくもあったが、それより先に異変が生じた。

さきほどのテーブルから、言葉が生じたのだ。

「で、集まった用件はなんなんだ、法政科」

カラボーが水を向けると、ああ、と菱理は手を打った。

「あなたがたには言ってませんでしたわね。どなたかがだらしなく 眠ってるようですから──私が探偵の真似事をしようと思いました の。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンとしても、オークションの 前に事件がひととおり片づいている方が有益でしょうし」

「……そうか」

突然醒めた声になって、黒い肌の神父が椅子から立ち上がった。

「どうなさいました?」

「帰る」

と、短くカラボーが言う。

「わたしもそうするわ」

イヴェットも立ち上がった。

「あら、あなたまでですか」

「当たり前でしょう? あなたの推理があってようが間違ってようが、あたしたちが本当に犯人だろうがそうでなかろうが、どうでもいいのよ。どうせ魔術師の殺し合いなんて日常茶飯事なんだから、オークションまで部屋にひきこもってた方がマシ」

「……俺も右に同じくだ。加えて言えば、俺は聖堂教会に属している。法政科に行動を束縛されるいわれはない」

ふたりの言葉は、いかにも魔術師らしく、いかにも代行者らしかった。

真実も人命もさほどの重みを持ってはいない。いつだって殺すことも殺されることもありえる。だからこそ余計なリスクは回避するのが当然だと、彼女たちは口にしているのだ。魔術師なればこそ、彼らを否定する言葉など誰も持ち合わせていないものと思われた。

しかし、

「……私はいいと思うね! 推理劇!」

と、メルヴィンが手をあげたのである。

魔術師たちと魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンスタッフ双方の 視線が集まる中、自分と一緒にロビー車両へやってきたアルビノの 青年は、堂々と胸を張ったのだ。

「あなたの推理を支持しよう。いいじゃないか推理劇。一度といわず、二度三度と体験してみたいと思ってたんですよね!」

「メルヴィン・ウェインズ……トランベリオの調律師」

改めて、オルガマリーが囁く。

トランベリオというのも、ちらと聞いた名前だった。確か、イヴェットの言ってた三大貴族。バリュエレータやバルトメロイと並ぶ、時計塔でも名門中の名門。

その名前の力か、イヴェットも口ごもったのである。

(.....ああ)

なんとなく、師匠がこの友人の話をしなかった理由が分かる。

つまるところ、面白いものの味方がこのメルヴィンなのだ。そこに愉楽があるなら、たとえパンドラの匣だろうがためらわずに開く、そういう心性が青年からは窺えた。自分の家名が持つ意味も効果も重々に承知した上で、軽々に振る舞うのがこの青年なのだろう。

ついで、車掌がすうと前に出たのだ。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンとしても、この件については 菱理様を支持することとなりました。皆様におかれましては、申し 訳ありませんが、しばしお付き合いいただきたく思います」

車掌は、最初に出会ったときと変わらぬ、一切の感情が窺えない 顔をしていた。無表情というのではなく、最初からそんなものは持 たないというような──あるいは魔術師のそれともかけ離れているよ うな貌かお。

自分たちが氷雪林で戦っている間、菱理はこうした根回しをしていたのだろうか。

「.....分かったわ」

諦めたように、イヴェットとカラボーが席に戻る。法政科に三大 貴族の分家、さらに魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのお墨付き まで加わっては、これ以上抵抗する方が無駄な労力だと考えたらし い。

全員が椅子に戻ったのを確認してから、

「―よろしゅうございました」

と、花のように菱理は一礼した。

「では、今回の事件について、法政科の立場から進言させていただ きたく思います」 「いよっ、名探偵!」

わざとらしく、メルヴィンが拍手をあげる。

考えてみれば、自分だけは後からの参加者であり、この推理劇で 受けるダメージもないわけだから、これは極めて身勝手な行為であ ろう。

「まず、いくつか前提となる情報を提示したいと思います」

と、菱理は微笑した。

白いうなじが、窓からの光に揺れた。それに連れて彼女の影も揺れた。

同時に、場の全員は嫌な感覚を覚えたかもしれない。美しい蛇に も似たこの女に、すべてを誘導されているかのごとき感覚を。

「さきほど、時計塔から使い魔が戻りました」

「使い魔?」

訊き返したメルヴィンに、菱理が小さくうなずいた。

「ええ、法政科に、七年前の事件についての情報を提供してもらってましたの」

「おいおいあんた! 自分の担当外の事件が簡単に閲覧できるほど 法政科はゆるくないとか言ってたろ! なんだったんだよあれ!」

こちらはジャンマリオ・スピネッラだ。

相変わらず大げさな身振り手振りで抗議するテレビメディアの魔 術師に、しれっと菱理は答えたものである。

「簡単にはできませんが、あなたが言っただけの関連性があれば十分ですわ」

「……っ、勝手なことばかり言いやがって」

「へええ、七年前? どういうこと?」

ついで、メルヴィンが興味津々に顔を突き出す。この中で、唯一 奇妙な調律師だけが法政科という名を恐れぬらしい。

「はい。少し、説明のお時間をいただいてよろしいですか」

菱理がゆっくりと頭を巡らせながら問いかける。

何かまずい、と思った。だがうまく口にできぬうちに、法政科の 女は続けて話したのである。

「七年前に、同じ手口の連続殺人事件があったんです。頭部を持ち去られた死体がいくつも見つかったと」

その言葉に、寸瞬血が凍りつくように思った。魔術師の間でだってあれだけ凄惨だった首なし死体は、一般でならどれほど残酷に映ったことだろう。

対して、メルヴィンはうーんと声をあげて、首を傾げた。

「そんな事件があったなら、私も覚えてそうなものなのだけど」

「情報統制があったのですよ。我が法政科の」

対する菱理は、品のよい民族衣装の袖を持ち上げて、あっさりと 打ち明けた。

情報統制。法政科からしてみれば本業だろう。神秘を隠匿するという時計塔第一の使命を正しく遂行する、第一原則執行局。

「……俺の台詞じゃねえか」

不満げに唇をとがらせたジャンマリオをよそに、女魔術師はさらに続ける。

「ですが、いま調べた情報ではほかのことも分かりました」

「ふんふん。ほかのことですか?」

「この件については、もうひとつの組織からも介入があったんです。つまり、聖堂教会の」

r——э! г

一瞬列車に動揺の気配が浮き上がる。

無論、カラボーのものだった。濡れた黒曜石にも似た瞳をゆっく りと向けて、菱理は黒い肌の老人へと話しかける。

「当時の捜査官が、カラボー・フランプトン。あなたでしたね?」

「……その通りだ」

短く、カラボーが認めた。唇が細かく震えていた。腑海林アインナッシュの仔を駆け抜けたときでさえ見られなかった動揺が、今聖堂教会の老人を捕らえていた。

「なぜ、いままで言わなかったんですか?」

「過去の事件について無駄に情報を漏洩することは守秘義務に反する。当然のことだろう」

硬い声で、黒い肌の神父が言う。

だが、全員が納得するはずもない。至極当たり前に、菱理は続けて問うた。

「それだけですか?」

沈黙したカラボーをしばし見つめてから、

「もう少し、話を進めましょう」

と、菱理が言った。

ロビー車両のテーブルの間をくぐり、一点へ視線を落とす。客車だとちょうどトリシャの死んでいたあたりだと気づいたのは、数秒ほど後のことだった。

「今回の事件、カラボー様の過去視があったにもかかわらず、犯行の現場は視えなかった。トリシャ様の未来視があったにもかかわらず、自分の身を守れなかった。つまるところ、過去からも未来からも犯行の瞬間は視えなかったということです」

歌うように言って、菱理は両手を掲げた。

片方の指は上部から引き下ろし、片方の指は下部から持ち上げる。過去と未来からの視線ということだろうか。二本の指を重なった一点で止めて、それから彼女は言葉を続けた。

「なら、答えは簡単でしょう。とても単純──現場は『あそこ』じゃなかったんです」

「あ.....! ı

その声に、イヴェットが手を叩いたのだ。

「そうか。なるほど。それはそうよね」

「さすがは魔眼の専門家スペシャリスト。理解が早いようですね。 過去視も未来視もあくまで時間軸を超越するだけのものです。だっ たら、いくら視ようとしたところで、事件の『現場』じゃなければ 『視えない』。当たり前のことです。遠見までも兼ねたタイプの千 里眼ならまた別ですけれど、そういうわけじゃないのでしょう?」

愕然と、自分は目を見張る。

周囲の魔術師たちは、彼女の推論を反芻・検証しているらしかった。時間軸を特定方向に見通せても、空間は超越できない。その場合、どのような現象が生じるのかと。

ひとり、メルヴィンだけはのんきに顎をさすってうなずいていた。

「ふうむ。じゃあ、一体誰がトリシャさんを殺したっていうんで す」

「ええ、そうなるでしょうね」

もっともな質問に、菱理はそっと視線を移す。

「では、ここでもうひとり証人にご登場いただきましょうか。──オ ルガマリーさん」

びくり、と少女が肩を震わせた。

それまで黙っていた天体科アニムスフィアの後継者は、女の声に低く呻きを押し殺した。

「あれを、見せてさしあげて」

その指令に、うつむいていた少女が震えた唇を嚙む。恐れを恥じるかのようだった。何度か深呼吸してから、足下に置いていたトラベルバッグ大の箱へと指を伸ばした。

最初に、その内側から覗いたのは、長い金髪だった。

無論人がそっくり入るような巨大な箱ではない。しかし、金髪についで額が、眉が、閉じられた目と鼻が続き、見覚えのある顔が明らかとなった。

顔だけが。

「トリシャ、さんの.....」

呻うめいた自分に、菱理がゆっくりとうなずいた。

「ええ。失われていたトリシャ・フェローズの生首です」

\*

全員の注視の中、優雅に菱理は生首を持ち上げた。

預言者の首を欲求したという妖女サロメに似て、法政科の女魔術師はひどく美しかった。

「……どういうことだ?」

嗄しわがれたカラボーの声に、彼女は穏やかに応えた。

「彼女の首は、虚数魔術の術式で隠されていました。おそらく、トリシャ・フェローズ自身が封印していたものと思われます」

「トリシャが自分で、自分の首を?」



わけがわからない。

どうやったら、そんな状況が起こりえるのか。

死後に奪われたはずのトリシャの頭部は、トリシャ自身が隠した ものだった。だったら、彼女の首を切ったのは誰だ? いや、どう やったら自分の首を隠すなんてできる? 手品の切断イリュージョ ンならともかく、これは本物の生首じゃないか。

理解不能すぎて、ただ呆然としていると、菱理はゆっくりと言葉 を続けた。

「おそらく、トリシャ・フェローズは自分が首を切断されて死ぬと悟っていたのでしょう。あらかじめ、首の落ちるだろう部分に虚空のポケットをつくりあげていた」

あまりにも、菱理の発言は荒唐無稽だ。なのに否定しきれない。 おかしいのじゃないかと口を挟むことができない。なにがしかの真 実をその裏に感じ取ってしまう。どうしようもない不安が、自分の 心臓を柔らかく包み込んでいた。

死体現場を視たときのカラボーの言葉は、こうだった。

― 『首が落ちた前後の状況は曖昧としてはっきりと視えない』

逆に言えば、この部屋にトリシャが入ったときなどの状況は視えたのだろう。

しかし、落ちた首はそのまま消えた。だから曖昧として視えなかったという風に誤解した? いや、それなら犯人の姿は視ていたはずじゃないのか?

混乱する自分をよそに、ジャンマリオが首をひねった。

「ん、どういうこった? トリシャが自分が死ぬのを悟ってたって......

「未来視でしょ」

と、再びイヴェットが口を挟んだ。

「正確なタイミングは分からないけれど──ひょっとしたら椅子に座った直後ぐらいかな──自分の首が落ちて死ぬ未来を視てしまった。だから、最低限できることだけをする必要があった。多分、その虚空にポケットをつくる魔術って一小節ワンカウントかそこらだったんじゃないの?」

「.....はい」

オルガマリーがうなずく。

銀色の美しい髪が無惨に揺れた。

「トリシャにしてみれば、軽い念話ぐらいの魔術でした」

「それは羨ましい限りね。魔術属性なんて取り替えきかないものな あ」

のびをしたイヴェットが、唇をとがらせる。かつて師匠も似たことを言っていた気がする。個人に依存する魔術属性は、基本的によほどの神秘をもってしても干渉のできないものだと。だからこそ、 先代ロード・エルメロイのような二重属性は尊ばれるのだとか。

そして、化野菱理が再び口を開く。

「ああ、そうそう。オルガマリーさんが虚空のポケットから取り出したとき、まだトリシャさんの生首は死にきってませんでした。なにしろ虚数魔術の術式の内では時間が止まってますからね。ええ、文字ひとつ書き残す時間がない中、最高のダイイングメッセージを選んだと言えるでしょう。喉に残った最後の吐息で、ほんの一単語、彼女は何を言い残したと思います?」

問いかけて、当然のように答えなどあがらないロビー車両で、彼女は笑った。

「カラボー、と囁いたのですよ」

これは、あまりに決定的だった。

ざあっ、と魔術師たちの間を硬い緊張が渦巻いた。一言呪文を唱えれば──いや場合によってはそれさえ抜きに、人を殺せるバケモノたちの敵意。

法政科の女魔術師は、指タ揮ク棒トでも振るように、言葉を操る。

「カラボー・フランプトン」

と、改めて名を呼んだ。

「あなたのそれは、測定の過去視──いえ、厳密に分けられるものではないにせよ、測定よりの過去視じゃないですか?」

はっ、とカラボーが片目を押さえる。

予測と測定。それはカウレスが話していたことだ。未来視にも過去視にも予測と測定の二種類があり、前者は普通に人間が持つ想像力の延長上、後者は自分の行動から時空軸を固定してしまう異能の類だと。

「通常、過去視にとっては予測も測定もあってないようなものとよく言われます。未来と違って、過去は変えられないのだから、どういう方法で過去を視たところで関係なんてないと。でも、あくまで通常ならという話です。──そうそう、直死の魔眼というのを、昨日話題に出されている方がいましたね。等しく視たものに死を押しつける、『虹』の位階の魔眼だと」

突然、途中で話題が変わった。

直死の魔眼。魔眼オークション前の説明で、オルガマリーが口にした代物。あのときの説明が正しければ、『黄金』や『宝石』さえ飛び越えて頂点に位置する、『虹』の位階の魔眼。

「私はそのような魔眼を拝見したことはありません。ですが、いささかなりと想像を巡らせれば、それがどのようなものかは推察できます。ええ、それはきっと未来視の究極でしょう。少なくとも、そうした運命力を視る能力のひとつなのでしょう」

「……直死の魔眼とやらが、未来視の、究極だと?」

呻いたカラボーに、菱理がうなずく。

「だってそうでしょう。誰だっていつかは死ぬのです。何だって不完全だから、綺麗に壊されて最初からやりなおしたいなんて願望を秘めているのです。その最後を視て現い在まにたぐり寄せるならば、未来視の究極と呼ばずしてなんとします」

Г......

菱理の言葉が、少しだけ自分には分かった。

不完全なのだからやり直したい。いっそ壊してほしい。いつか得体も知れない未来に終わりが訪れるぐらいなら、いっそ今すぐにこの首を絞めてほしい。きっと誰だって思うこと。ひどく素朴で薄暗い願い。素朴だからこそ、それがひとつの果てだという説明は、不思議なほど腑に落ちた。

「だったら逆も真理です。誰だっていつかに生まれたのです。不完全に生まれさせられたのだから、そんな最初が間違いだったと憤っているのです。その最初を見て現い在まに浮かび上がらせるならば、過去視の究極と呼ばずしてなんとします。ああ、それにしてみれば世界は泡のように視えていたかもしれませんね」

(.....泡?)

「ひょっとして時空泡のことかな」

これは、メルヴィンが口を挟んだのだ。

「ご存じでした?」

「私が知ってるのは科学の概念だけどね。極限に小さなスケールでは、物体は泡の集合体のようなものだという。別に科学的に正しい 描像を、彼が見ていたわけではないだろうけれど、それに近い概念 だと言いたいのかな?」

「おおよそ、その通りですわ」

菱理が肯定する。

いがらっぽいものが、喉の奥にこみあがるのを感じた。

世界が泡に見えている。なぜだか、その言葉にひどく危うさを覚えたのだ。人も、獣も、樹木も、魚も、花も、土も、石も、水も、光も、そのすべてが泡に見えるとはどんな気分だろう。何もかもが同じだと突きつけられながら日々を過ごしていくのは、どんな人生なのだろう。

それこそ、自分の眼球を握りつぶした気分にならないだろうか。

「……ああ、残念ながら、噂になっている直死の魔眼と違い、今回の魔眼はその果てには至ってないのでしょう。終わりを見るに至っていない。始まりを見るに至っていない。せいぜい、あらかじめ設定しておいた過去の事象を、特定のタイミングで認識して呼び起こさせる―そういう魔眼だったのではないでしょうか?」

菱理の言葉が丁寧なほどに、怖気が立つ。

ナイフの切っ先で首裏をなぞられるようだ。刃には毒が塗られていて、傷ひとつ残さないのに、こちらの芯までも腐らせてしまいそう。

「測定の未来視は、未来がそうなるように確定させてしまう」

歌うように、彼女が言う。

「ならば、測定の過去視は過去がそうだったと確定させてしまうのが当然でしょう。ええ、物事の終わりが『死ていし』なら、物事の始まりは『生きどう』なのが自然です。その魔眼は過去の事実を現代に蘇らせてしまう」

ああ、まるで推理小説の探偵じみて、化野菱理はひとつずつ丁寧 に並べていく。晒していく。切り刻んでいく。

こういう人だった、と思う。

初めて剝離城アドラで出会ったときから、こういう人だった。今まで失念していたのが嘘だったかのように、化野菱理は第一印象を取り戻していった。

法政科。魔術師を統べる魔術師として。

「……つまり、それは、過去に起きた出来事を再現する魔眼ってこと?」

イヴェットが口にした。

誰かがそう言ってくれるのを待っていたように、菱理は首を上下させた。

「ええ。おそらく過去から再現できる行動は制限されているのでしょう。今回の場合、あらかじめ記録しておいた斬撃を、特定のタイミングで再生する―そんな用途かもしれません。そうですね、たとえばこんな風に」

菱理が、テーブルの上にあったナイフと林檎を無造作にとる。

まず、ナイフを縦に動かした。

「こうやって斬撃を記録して、置いておきます」

それから、林檎をもって同じ地点に移動させる。

さきほどと同じように、菱理がナイフを振って、林檎の表面を傷つけた。

「後は、魔眼の保持者が観測していれば、いつでも記録した斬撃の通りに対象は切断される。私が言っている魔眼とはそういう用途のものですよ。──ねえ、あなたじゃないんですか」

そこで、もう一度老人を振り返った。

「あなたじゃないんですか。カラボー・フランプトン」

「……俺が、だと」

黒い肌の老人は、おこりを起こしたかのように震えていた。女魔 術師と老人の間で、忌まわしい呪いが嗤わらっているみたいに思え た。

「この場合、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンというのが、あなたにとっては使いやすいギミックだったんでしょう。なにしろ、列車はレールの通りに進むのです」

つう、と人差し指を動かす。

線路をなぞるかのような動きだった。その途中にナイフが流れ、 幻の線路を断ち切った。

「先行するロビー車両で虚空を切っておけば、その座標にいずれトリシャの首が来ます。部屋のどの位置に椅子があるかを確認するくらいはたやすかったでしょう。別に、少々大きめに範囲を切っておいてもかまわないでしょうし」

さきほどの林檎をとって、ナイフの流れた地点に置く。

「トリシャの死体が見つかったとき、列車は森で止まって、カラボーさんも外に出ていましたからね。窓の外側からでもちらりと覗きこめばいい。後はあなたの認識した過去にひきずられて、虚空が再び引き裂ける。トリシャ・フェローズの首と一緒に。そして、トリシャ・フェローズの首は自らの虚数魔術によって、次元のポケットに封印されたわけです」

ナイフで、林檎を断ち切った。

しん、と沈黙が落ちた。もう一度、菱理の話したことを検証しているようだった。魔術師の手になる以上、そもそも不可能犯罪などありえない。しかし、だとしても、この場に集った魔術師たちにさえ彼女の言い分はすぐさま飲み込むには突飛すぎた。

がしがしと頭を搔いて、ジャンマリオが口を開く。

「おいおい。ちょっと待てよ。それってつまり七年前の連続殺人事件も......?」

いくつもの視線が、老人に集中する。

七年前の連続殺人事件。いくつもの頭部が失われ、聖堂教会から はカラボーが捜査員としてあたっていたという事件を下敷きに、菱 理が話していることは、誰の目にも明らかだった。

なのに、彼女はわざとらしくかぶりを振る。

「あなたが七年前の殺人鬼で、今回の犯人だと断定しているわけ

じゃありません。そんな証拠は確かにありません。ですが、これだけの状況が揃えば、私たちがそれなりの措置を取る理由にはなるのでは?」

美しい微笑は、いまや恐るべき意味を湛えていた。

「教えていただけませんか? あなたなら―あなたの魔眼なら、首をはねてからずっと後に、結果を押しつけるような所業もかなうのでは」

「そんなものは、俺の過去視には─」

狼狽えたカラボーが、何事かを言おうとしたときだった。

「.....待って欲しい」

声が、したのだ。

ロビー車両の扉が、開く。

闇の底から浮かび上がるように、まず車輪がきいと絨毯を踏んだ。次に上質の革靴が現れ、車椅子に座った人影が憂鬱げに部屋を見回したのである。車椅子を押しているのは眼鏡をかけた癖っ毛の少年──カウレス・フォルヴェッジで、座っているのが誰かなど、もはや問うまでもなかった。

「師匠―!」

「ウェイバー!」

楽しげに見守っていたメルヴィンまでもが、立ち上がったのだ。

「ようやくのお目覚めですか。ロード・エルメロイII世」

菱理が目を細め、師匠の頭部から車椅子まで視線を動かす。

対して、師匠は眼鏡に触れたきりだった。

「いささか事故があってね。まだうまく歩けなかったもので、弟子

に頼んで、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフから車椅子を用意してもらった。……まさか、メルヴィンまで来てるとは思わなかったが」

「やや! 親友の危機に駆けつけるのは当然だろう!」

「余計なお世話だ。そもそも親友なんて言ってるのはお前だけだ」

「友達なんて互いに契約しあって決めるものじゃないだろう! 心の交流だよ! 無意識の承認だよ! もっと心を開いて打ち解けあうべきじゃないかな! あ、ついでにハグしてくれてもいいんだよ! -

「いいから黙ってろ」

吐き捨てるように、師匠が口にする。

かすかに荒い吐息からすれば、意識を取り戻して間がないのだろう。実際自分とて、このタイミングで師匠が現れるなど夢にも思わなかったのだ。それも車椅子に乗ってやってくるなど想像の範囲外にもほどがある。

思わず立ち上がり、駆け寄っていた。

この一瞬だけ、事件も何もかもが遠かった。

「師匠、身体は一」

「問題ない。問題ないとも。差し支えあるようなら、わざわざ出て くることもない」

駆け寄った自分の頭を、師匠がフードの上から撫でてくれた。普段つっけんどんな師匠が、そんな優しさを見せてくれる方が自分には苦しくて、やるせなかった。

「カウレスから事情を聞いた。いろいろあったんだな」

「.....はい」

うなずく。

涙がこぼれないようにするのに、ひどく努力が必要だった。辛い

のは自分でないと分かっていて、しかしそれをうまく伝えられる言葉が自分の中に存在しなかった。

「本当に……本当にいろいろ、ありました。でも、拙なんかより、 よほど、師匠が……」

言葉はなんて無力なんだろう。いや、自分はなんて無能なんだろう。

もっと用意しておけばよかった。師匠が回復しているのは分かっていたんだから、そのときに備えておくべきだった。思考は空転して言葉は何ひとつ定まらない。目覚めたら話そうと思っていたのに、喉の奥から出てくるのは嗚咽ばかり。

「はは、サーヴァントとはな」

これは周囲に伝わらぬよう小声で言って、師匠が唇を歪める。

苦笑に、痛みが滲んでいた。けして肉体だけのそれではない。ヘファイスティオンを名乗る女英霊との接触は、師匠の精神にただならぬ痛みを与えていた。

「あげく、腑海林アインナッシュの仔に虚数魔術、過去視の果てと きたか。たった半日かそこらに詰め込みすぎだろう」

「──あら、どこから聞いていらっしゃったんですか?」

菱理が首を傾げる。

「聞こえたのは、『あなたの認識した過去にひきずられて、虚空が再び引き裂ける』からだよ。でも、それだけ聞けば、おおよその話は推測がつく。……グレイ、あのサーヴァントについては、後で話そう」

最後を耳打ちして、師匠は車椅子の車輪をゆっくりと回した。

正面から菱理を見据えて、三本の指を持ち上げたのだ。

「ミス化野。三点ほど、今の話には問題がある」

「気を持たせたお目覚めでしたが、早速名推理を聞かせてくださる んですね」 「ひとつ、カラボー氏の魔眼にそんな能力があるかどうか。ふたつ、仮にそんな能力があったとして、ほかの魔術師にもトリシャさんの殺害ができぬとは限るまい」

菱理の言葉にかまわず、師匠はたてつづけに言った。

「三つ、今の推理には動機がないだろう」

と、詰め寄った。

「カラボー・フランプトンがトリシャ・フェローズを殺す、合理的な理由がまるでない。他人を追いつめるには、あまりに不完全すぎる思いつきなんじゃないか」

「なるほど。お得意のホワイダニットですか」

ひとつうなずいて、菱理の笑みが深くなる。

「仰るとおり理由は皆目分かりません。ひょっとしたら、ほかの魔術師でも似たようなことはできるのかもしれません。ですが、トリシャのダイイングメッセージはどう説明するんです? それに、もともと私たちは現代社会の法には沿っていませんし、国家に管理された警察でもないのですよ。疑わしきは罰せずin dubio pro reo。そんな法の原則に則る必要は欠片もないのです」

菱理が囁いたのは、ローマ法の時代に残されたというラテン語だったろうか。そんなものは必要ないと、彼女はあっさり言ってのけた。そして、この列車の内では彼女の言葉こそが真実なのだと。

それから、ぽん、と手を打った。

「ああ、どうしても理由が必要なのでしたら、過去視の魔眼で、自分と殺人鬼を同一視したなどはいかがです? 七年前の殺人を見続けるうち、自分と殺人鬼が混じってしまったとか。魔眼が制御できなくなったならありそうなことでしょう?」

「……本気で言ってるのか」

「本気ならいいんですか? 本気でも戯れ言でも大した違いはない でしょう。私たちは魔術師なんですから」

肩をすくめて、菱理はかぶりを振る。

ふざけて言ってるのか本気なのか、自分には分からない。案外時 計塔の歴史にはそんな例もある気がする。それこそ小説の『ジキル 博士とハイド氏』と似た何かだって、時計塔に刻まれてきた歴史に は存在するのではなかろうか。

「時計塔の魔術師として、これだけの材料が揃えばひとまずカラボーさんを拘束するには十分ではありませんか?」

あらためて言って、彼女はちらと神父の方を見やった。

「それに、能力のことでしたら、証言をいただけばすむことです」

「.....私には、そんなことはできないと言っている」

声を振り絞るように、カラボーが言う。

「ああ、できないと仰られる? それならそれで大丈夫ですよ」 と、なおおぞましく菱理は笑った。

「カラボーさんの魔眼は、オークションに出るのでしょう。だったら魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン側の口から、どれだけの性能を持った魔眼かは説明されるはずです」

『一ええ、その魔眼にはかないます』

突然、声がしたのだ。

いや、それは声ではなかった。厳密に言えば思念ですらなかった。

まるで概念そのものが、突然自分たちの脳に染み渡ったかのようだった。

その概念と同じくして、薔薇の女が現れたのだ。魔眼蒐集列車 レール・ツェッペリン・支配人代行と言われた──自分が何度も見て きた女が。

今度ばかりは、彼女の姿を認識したのは自分だけではないらし

かった。

ロビー車両に集っていた魔術師たちが、いずれもかすかに息を止め、彼女に注目していたのである。

『刻限になりましたので、オークションの前にいただきにあがりま した』

「刻、限.....?」

『スタッフよりお話し申し上げたはずです。オークションより半日前に、魔眼を摘出させていただくと』

オークションのための、魔眼摘出。

よりにもよって今このタイミングで──いやそれも違う。このタイミングだからこそ、菱理は推理開帳などという行為に及んだのだ。

(逆、だったんだ.....)

気づいた事実に、自分は戦慄した。

周囲の魔術師を納得させるのに証拠が不完全だなど、菱理にも当然分かっていた。トリシャのダイイングメッセージや、カラボーが七年前の事件にも居合わせていたという件はともかく、過去視に勝手な能力を仮定するようなやり方で、乗り合わせた魔術師たち全員を納得させられるはずもない。

しかし、どれほど突飛だろうが、荒唐無稽だろうが、自分の推理 を魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが裏付けてくれるという確信 をもっていた。証人や証拠を揃えて犯人を追いつめるという普通の 手順からはありえない、しかしこの場と魔術師ならばかなう逆転の 手段。倒錯の探偵。

いいや。

最初から、彼女は探偵になどなろうとしていない。彼女にとって これは推理劇ではない。 政治劇だ。時計塔を渦巻く数々の権力闘争のように、化野菱理はこの事件を処している。これが法政科のやり方なのだと、暗に魔術師たちへ示している。

たじろぎ、カラボーが数歩後退した。

「だ、だが待て! 今はまだ.....」

抗おうとする老人の懐に、吸い寄せられるみたいに薔薇の女は侵入した。腑海林アインナッシュの仔では、あれほど鮮やかな体術を見せていた老人がこうもたやすく接近を許したのは常にない動揺ゆえか、それとも薔薇の女が持つ卓越した神秘ゆえか。

その指が、つぷりとカラボーの半顔に沈み込んだ。

まるで泥か何かに沈み込むかのような、異常なまでの自然さだった。血の一滴もこぼさないそれは心霊手術と似た技術だったかもしれない。人差し指と中指、親指が第二関節まで潜り込み、ほんの数秒でずぶずぶと抜けた。それと同時に意識も奪われたのか、カラボーが倒れ伏す。

### 「支配人代行」

そっ、とオークショナーが溶液の満たされた硝子の筒を差し上げ た。

支配人代行たる女が手を振ると、筒の内側へふたつの眼球がとぷんと音をたてて落下したのである。

施術の間、誰も身じろぎさえできなかった。

「以上で、魔眼の摘出は終わりです」

神の御み業わざでも見たごとく声を震わせて、オークショナーが 告げた。

声は震えていた。自分たちもだった。あまりにも隔絶した何かを見たとき、人は誰もがそうなるのかもしれなかった。魔術として、また神秘としてどれほど今の施術が優れているかなど見当もつかない自分さえ、息ひとつこぼせないままだった。

支配人代行が再び消えたことにさえ、すぐには気づかないほど

に。

「移植は我らでもかないますが、摘出は支配人代行のみが成しえる 絶技です。このためにこそ、いつもかの方は眠ってらっしゃいま す。一度その手を振るったからには、しばらくはまた眠りに落ちて らっしゃるでしょう」

告げて、オークショナーは硝子の筒を撫でさすった。

赤子を撫でるよりもずっと優しく、芸術に触れるよりずっと誇ら しげに。

「おお……おお、素晴らしい」

筒の内側の眼球に、再び声をあげる。

純粋なる感動。純粋なる衝動。心の底の、さらに底から開け放たれるような声音だった。イヴェットとカラボーは、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフが必ずしも魔眼に執着しているとは限らないと言ったが、少なくともこのオークショナーだけは例外らしかった。

厳重に巻かれた眼帯の奥から、何かを見ているのか。

それとも、視覚とは別の感覚だろうか。筒の内側から声を聞くように、匂いを嗅ぐように、顔を擦りつけて、彼女はこう続けたのである。

「カラボー様のご自覚はなかったようですが、『宝石』の位階に達するでしょう。我らがオークションの目玉商品eye catcherにふさわしい。とっくに終わったはずの過去の影を、現い在まへ泡のように浮かび上がらせる――泡ほう影えいの魔眼とでも名付けましょうか」

泡影の魔眼。

その名が告げられると同時に、今度は化野菱理が振り向いた。

「どうやら、ひとまずは解決したようです」

倒れたままのカラボーを見下ろして、彼女はそっと着物の袂を引き寄せた。

「皆様の貴重な時間を奪い、大変失礼いたしました。どうぞ魔眼蒐 集列車レール・ツェッペリンの快適な旅を再開いただけますよう」



カラボーは、個室に監禁されることとなった。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと協力して、法政科が状況を 仕切っている以上、逆らう余地はなかった。いや、カラボーを除く 時計塔の魔術師たちにしてみれば、面倒な些事が早々に終わって重 畳というぐらいかもしれない。

眼には魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンから提供された包帯を 巻き付けられ、足は鎖で縛りつけられている。その拘束具も魔術に よって補強され、逃げ出されぬよう講じられているらしかった。

自分と師匠は、その部屋で一緒に佇んでいた。

目覚めたら、もう少し話をしたいという提案が受け入れられたからだ。一応カラボーを勝手に解放したりはしないくらいには信頼されているようなのだが、実際のところは分からない。とりあえず、部屋の外には魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフもついて監視することになっていた。

魔眼を奪われたまま昏倒しているカラボーを見据え、師匠は小さく息をついた。

「で、なぜ、お前がついてきてる?」

「そりゃあついてくるよ! 親友だろ! あんまり冷たいこと言うと泣いちゃうぞ血反吐と血涙でこの車両を水浸しにするけどいいんだな!」

実にうざったい泣き真似をするメルヴィンを、あっさりと師匠が 無視する。

ちなみに、カウレスは師匠に頼まれて、オルガマリーの方についていた。昨日もトリシャが亡くなったばかりのオルガマリーに付き添っていた少年ならば、少しは近づきやすいかもという判断だ。

「……師匠の身体は、本当に大丈夫なんですか?」

「とりあえず、こうして話すぐらいなら」

淡く苦笑して、師匠は唇を歪めた。

けして、顔色はよくない。いいはずもなかった。直撃ではなく防御の術式も用意していたとはいえ、生身であのサーヴァントの宝具を食らったのだ。稲妻に焼かれた肉の臭いがまだ鼻孔から離れてくれなかった。

なのに、弱音など吐こうとしない師匠の横顔が、自分には辛かった。

「……ひとまず、カラボーさんが起きるまで、状況を整理しようか」

眼鏡をかけなおし、師匠は口にした。

状況の整理。この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗り込む 前からの、あまりにも多くの出来事のファイリング。順序づけ。

たとえば、奪われた聖遺物。

たとえば、残された招待状。

たとえば、トリシャさんの死。

たとえば、サーヴァントの襲来。

たとえば、腑海林アインナッシュの仔の出現と探索。

たとえば、法政科の女魔術師による、ほとんど蹂躙というべき推理劇。

でも、今、最初に問うべきはと考え、自分は一言ずつ区切るよう に問いかけた。

「本当に、師匠は、カラボーさんがトリシャさんを殺したんだと思いますか。菱理さんたちが言ったような──泡影の魔眼で」

「……確実なのは、後半だけだ」

師匠がかぶりを振る。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン側が、泡影の魔眼と名づけ、 今回の犯行が可能だと断言したからにはそこは真実なんだろう。だ が、可能だということと実行したということには大きな隔たりがあ る。ミス化野はそこを無理矢理結びつけていたが、力業だというこ とは本人も重々承知していたはずだ。

もっとも、彼女にしてみれば、それで十分なのだろうがな。法政 科が本当の犯人捜しをする必要なんてないんだから」

「法政科は正しく時計塔を運営するだけが目的だからねえ」

納得したように、メルヴィンが相づちを打つ。

自分も想像していたことだが、長く時計塔にいる魔術師にしてみれば、そうした法政科の体質は馴染みきったものらしい。権力の腐敗とはまた別の、役割に徹しきった存在。運営される側も運営する側も、双方を歯車としか見ていない感覚に、ごくりと唾を飲み込んでしまう。

「そもそも、私はあの支配人代行だって、さっき初めて見たぐらいだ。……グレイには見えていたのか?」

「……はい。時々、ですけど」

「君に見えるなら、霊媒としての感受性の問題か」

ほんの少し、師匠の言葉には羨望に似た何かが滲んでいるように 聞こえた。

「かも、しれません。ほかの魔術師の方も、ほとんど見えてなかっ たみたいですから」

そう言って、きゅっと唇を嚙む。

続いて、もうひとつのことを問いかけるべきかどうか悩んだの だ。悩んだけれど、これ以上胸に閉じ込めていることもできず、打 ち明けた。

「師匠は、あのサーヴァントのことをどう思ってるんですか」

口にして、ちら、とメルヴィンを見やる。

ちなみに、青年の胸元のハンケチーフが赤く染まっているのは、 もはや本日何度目か分からない吐血のせいだ。正直輸血しなければ 間に合わない量じゃないかと思うのだが、どういう身体構造をして いるのだろう。

「サーヴァント? んんん、どういうことかな?」

案の定、メルヴィンは反応した。

「ウェイバーの参加した聖杯戦争に出てきたとかいう、英霊の写し身──境界記録帯ゴーストライナーのことかい? 誰がウェイバーを傷つけたか気になってたんだけどひょっとしてサーヴァントだったわけかい?! いやなぜ、イギリスにサーヴァントが出てくる? それも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに?」

「私が聞きたいね」

質問攻めに短く答えて、師匠はぐったりと車椅子の背にもたれかかる。

「師匠、やっぱり、まだ寝ていた方が……」

「大丈夫だ。そのためにこの車椅子も用意してもらったんだから」 そうは言いつつも、叶息はひどく苦しげだった。

それでも、ぐいと視線を持ち上げて、メルヴィンに質問を返す。

「一応聞いておくが、お前が犯人じゃないな?」

「おっとウェイバーくん。私は悲しいぞ。結婚詐欺の犯人だとか、 違法薬物販売の犯人だとか、昔からあまりに罪をなすりつけすぎ じゃないか!」

「お前がすでに何度もやらかしてる前科持ちだからだ。……だが、お前だったら、ここで自慢たらたらに告白するだろうな。グレイ、隠さずにこの場で話していい。私が昏倒してる間に、あのサーヴァントと接触したのか?」

「.....あ、はい」

と、自分はうなずいた。

ふたりの間の信頼関係はちょっと謎過ぎたが、それでも師匠がよいというのなら自分が反論する理由もなかった。

「腑海林アインナッシュの仔から脱出する際、雪崩に襲われたところをあのサーヴァントに助けられました。──お前は戦士だったのだから、戦場以外で死ぬべきではないと」

「確かに、それは古い戦士の理屈だな」

懐かしそうに、師匠が笑った。

少しして、

「……ああ、私は、戦士ではないだろうな」

と、呟いたのだ。

それだけで、あのサーヴァントとの邂逅に、師匠が負傷以上の衝撃を覚えていることは十分感じられた。当然だろう。ともすれば、 人格すべてを否定するほどの言葉を、あの女戦士からぶつけられたのだから。

- ― 『気に入らない顔だな』
- ― 『どのような魔術師かと思えば、こんなろくでなしとはな』
- ──『ああ、もう沢山だうんざりだこんなのは食傷にもほどがある』

ぎゅっと、胸の奥が冷たくなった。

石みたいになった心臓を服の上から押さえて、少しずつ呼吸する。師匠はどんな気持ちなんだろうと、どうしても考えてしまう。 追いかけ続けた人に―その人に最も近いと言われた相手に、正面から否定されたなら、どれほどに心を引き裂かれるだろう。

それでも。

それでも、訊かなきゃいけないと思った。

「あの.....」

と、呼びかける。

かすかな躊躇いを振り切って、顔をあげて尋ねた。

「あのサーヴァントは……どんな英霊なんですか」

Г......

自分の質問に、師匠はしばし沈黙した。

いつもならそれだけで言葉を失っていたけれど、今度だけは続けて質問する。

「ヘファイスティオンって……言ってましたよね。オルガマリーさんからは、イスカンダルの友人として最も有名な人物だって……」

「ああ。ヘファイスティオンは、イスカンダル第一の腹心に違いない。数多くの伝説がそれを示している。イスカンダルの麾き下かに、英雄、軍神あまたあれど、第一の腹心はヘファイスティオンのほかにあらずとな」

師匠も、肯定した。

「だからこそ、困惑している」

「え?」

瞬きした自分に、師匠は嚙んで含めるように、言葉を続けた。

「私は……『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』で彼女を見た覚えがないんだ」

「……『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』」

名を聞いたのは初めてだが、意味は理解できた。

こちらの表情からそのことを察したのか、師匠が目を細める。

「ふむ。ライネスから聞いていたか?」

「……あ、はい。第四次聖杯戦争で師匠に従っていた英霊─イスカンダルが使った宝具のひとつですよね?」

「従っていた、ね」

苦笑して、師匠が顔を撫でた。

「とはいえ概要はその通りだ。『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』は、イスカンダルが世界を蹂躙した至上の軍隊を、固有結界ごと呼び出すという規格外の宝具でな。初めて見たときにはみっともなく腰を抜かしたものさ。ひとりずつが紛うことなき英霊、遥かマケドニアからアジアまでを駆け巡った偉大なる軍勢。軍神も、マハラジャも、王朝の開祖も、誰もが心にひとつの絆と景色を焼きつけた勇者たち」

師匠の口調は誰かに話しかけるというよりも、何十回何百回と読んだ書物を手元に置いたまま開きもせずに暗誦しているようだった。

自分にも、その光景が見えた。

荒野に咆哮をあげる、屈強なる古代の軍隊。騎兵も槍兵も入り混じり、愛用の具足を纏って、自慢の武器を掲げ、しかし両の瞳には頑是無い憧れと好奇心を宿して。

そして──すべての軍を率いる、たったひとりの王の姿。

英霊の内にあって、なおイスカンダルが特別視されたのはこの宝具のためだろう。たとえ死によって分かたれようとも、遥か二千年以上の時間を経ようとも、その魂を世界に召し上げられようとも、魔力とともに王が呼びかければ再び馳せ参ずる、強大きわまりない絆の在り方。

「あの軍勢は数万もいたし、私も将軍のひとりひとりと話したわけ じゃない。だが、居並ぶ腹心の中にあんな女がいなかったのは間違 いない。今言ったように、第一の腹心たるへファイスティオンがい ないはずはないのに、だ」

いるはずの英霊がいない。

非現実じみた英霊の大軍なればこそ、よりくっきりと欠如は浮かび上がるだろうと思えた。総勢数万にも至る軍隊ならば、その数千ずつを統べる将軍もまた、部下全員を束ねたほどの存在感を放っていただろう。古来オーラともカリスマとも呼ばれてきた、人の上に立つ人の持つ輝きを、師匠が見落とすとは思えなかった。

だったら、あの女戦士はどういうことなのか?

「それでいて、ヘファイスティオンだというのも否定しがたい。彼女はイスカンダルの宝具たる『神威の車輪ゴルディアス・ホイール』を使ってのけた。なるほど、あれが使えるような英霊は、イスカンダル本人を除いては、『彼もまたイスカンダルなのだから』とまで言われたヘファイスティオンぐらいしかいないだろう」

当然、師匠もその逸話を知っていたらしい。

ダレイオス三世の母が、ヘファイスティオンをかの征服王と誤った際、イスカンダルが笑って言ってのけたというエピソード。

車椅子にもたれかかって、片手でこめかみのあたりを押さえた。

「まだしも……あれがオリュンピアスだという方が、よほど納得も いくんだがな」

「ああ、オリュンピアスはアレキサンダー……イスカンダルの母親 のことだな。マケドニアと同盟を組んでいた有力国の王女の」

これは、メルヴィンが言葉を添えたのである。

後から詳しく聞いた事だが、オリュンピアスは単なるイスカンダルの母以上に、恐るべき人物として知られてたらしい。

いわく、祭の度に霊感にとりつかれ、何匹もの大蛇を操って人々の間を這いずらせた。

いわく、結婚式の前夜には、雷が自分の腹部に落ちる夢を見て、 そのゆえにイスカンダルはゼウスの息子だと言ってのけた。

いわく、イスカンダルの父フィリッポスが他の妻を正室に迎えようとした動きのあったがゆえ、フィリッポスを暗殺した疑いがある……など。後のイスカンダルという英雄の遍歴を思わせる、凄まじい苛烈さが彼女には備わっていた。

「確か、マケドニアには専門の神官階級がなかったから、このオリュンピアスが本国での重要な儀式を一手に担っていたんじゃなかったっけ。当時の人間の信仰深さ──神秘の強大さからすれば、イスカンダルにとってもマケドニアにとっても重要極まりない存在だ。単なる新興宗教の信者などという言葉では括れない」

メルヴィンの言葉に、ふと自分もあの女戦士の言葉を思い出した。

「……そういえば、母からのお目付役だったとか言ってましたが」

「ふむ。元はそういう関係でもおかしくはないが」

相づちを打って、師匠は瞼をつむった。

迂闊に思考を邪魔しないよう口を閉ざしたところで、メルヴィンがひそひそと耳打ちしてきた。

「事情はよく分からないが、つまりへファイスティオンがこの場に 現れたのかい」

「少なくとも、自称通りでしたら」

「ほうほうほう」

嫌な感じに、青年の色素が薄い目が光る。

「.....黙って」

不意に師匠の人差し指が唇にあてられ、視線が横に流れる。

少し遅れて、ベッドの近くで横たわっていた老人が、身じろぎし たのだ。

「カラボーさん」

どうやら、神父も眼を覚ましたらしかった。

突然訪れた盲目に驚いたのか、何度か顔に触れてから、今度は自 分の足に巻きついた鎖を引き寄せた。

「申し訳ありません。ミス化野の言葉で、拘束させてもらってます」

「……そうか。その声は、ロード・エルメロイだね」

「弟子のグレイと、一応友人のメルヴィン・ウェインズもいます。 後、できればII世をつけていただければ」

穏やかな訂正に、神父の唇はほんの少しほころんだ。

「ああ、あの話は本当だったのだね。新しい現ノ代-魔リ術ッ科ジの君主ロードは、先代に敬意を払って、II世をつけるようまわりに触れてまわっているなんて聞いたことがあったが」

「……さて。魔術師としては、私など足下にも及ばない方だったのは確かですが」

否定も肯定もせず、師匠が話を受け流す。

ほんの少し伺っただけの自分でも、師匠と先代の関係はきわめて複雑なのだろうとは理解できた。かつて第四次聖杯戦争で戦い、殺し合い、しかしその決着を見届けることはできなかったというふたり。今師匠が先代をどう思っているのかは分からないけれど、II世という言葉にこだわっていることは間違いなかった。

「確認させてもらって、いいですか」

と、師匠は穏やかに切り出した。

「本当に、カラボー師が七年前の事件を?」

「.....分からないんだ」

と、老人が頭を押さえた。

皺だらけの指が、今は無性に哀しかった。指は軋むように何度も 震えていた。

「俺は本当に、自分があの事件に関係していたことを、ついさっき まで忘れていた」

「……覚えて、ない?」

その言葉に、眼を見張る。あまりにも内容がこの老人と似つかわしくなく思えたからだ。同時に、だからこそ続く言葉に納得させら

れることともなった。

「あの事件だけじゃない。最近は、自分の過去についてあちこちが 虫食いみたいに穴だらけになっていたんだ.....」

愕然と、自分はその言葉を聞いている。

師匠も硬い表情のままで、老人の暴露に耳を澄ましていた。

「過去は見える……嫌でも押しつけられる。眼を開いていようが閉じていようが、そんなものは関係ないとあざ笑うように雪崩れこんでくる。でも、それ以上の勢いで、自分自身の記憶はどんどん壊れていく。あれはそういう魔眼だった」

魔眼を手放そうとしたのは、それが理由だったのか。

恐るべき腑海林アインナッシュの仔に立ち向かってでも、魔眼 オークションを中止させまいとしたのも、きっと同じ理由。これ以 上壊れることを拒んだからこそ、彼はこの列車に乗ってきたのだ。

だけど、それはもうひとつの事実を明らかにしてしまう。

「……つまり、あなたにあの魔眼はまったく制御できなかった」 師匠が、その事実を口にした。

ある意味で、化野菱理の推理をむしろ裏付けてしまう一言だった。

「.....そう、なるな」

朽ちた枝のように、カラボーがうなだれる。

その指が包帯をついた。血は滲んでいない。あの支配人代行によって行われた眼球摘出手術は、被験者に痛みも残してないらしかった。あくまで念のためというだけのことなんだろう。

「.....ああ」

と、こぼれるように老人が呻いた。

「それでも……それでも七年前の事件ぐらいは、今こそあの魔眼があれば、分かったかもしれないのに……」

カラボーの声が床を這った。

あんなに忌み嫌っていた魔眼が、今こそ必要なのにと。

あまりにも皮肉な結果に、慰めの言葉も思いつかなかった。いつもと同じく、自分は傍観していることしかできない。こんなにも無残な結果に喉を詰まらせ、首を絞める綿のような無力感に立ち尽くしているだけ。

「誰かが.....」

と、自分は口にしていた。

「誰かがあの魔眼を落札したら、七年前の事件については分かるん じゃ。いえ、今回の事件だって......!」

「かもしれない。だが、私が落札できるような額じゃないだろう」 師匠がかぶりを振る。

それはその通りなのだ。買い上げた魔術師に要請する手もあるが、協力してくれる可能性は極小だろう。法政科の菱理にしたところで、別段真実を追及してるわけじゃないのは明白だ。かの魔眼が誰の手に落ちても、もはやカラボーの過去や七年前の事件を見つめることはありえない。

「一ははあ、買い戻せばいいのかい?」

と、のんびりした声が応じたのだ。

「メルヴィン」

「いやいや、さっきから気になる単語ばっかりでさ。サーヴァントとか首切り死体とか。今回最高額がつくだろうから確実とは言わないが、挑戦してみるのは面白い。せっかく魔眼オークションに乗り合わせたんだからね」

にんまりと笑った瞳は、師匠に向けられていた。

「もちろん、それなりの楽しみがあればという話だけど。どうかな ウェイバー?」 「悪魔に魂を売る気はない」

にべもなく、師匠が視線を切る。

対して、メルヴィンは肩をすくめたきりで、こちらに話を振った。

「ところでグレイさん。私はその被害者──トリシャ・フェローズとは残念ながら一度もお目にかかってないんだが、何かしら思い出せることはないのかな?」

「トリシャさんに……ですか?」

問われて、自分も考え込んでしまう。

残念ながら、さして接触が多いわけじゃなかった。話した状況も ほぼすべて師匠が一緒だったので、自分だけが気づいたことなんて あるとは思えない。

「ええと、そういえば最初に会ったときは……」

突然フラッシュバックした記憶に、ぼっと赤面してしまった。

初めて出会ったとき、彼女の携えていたものを思い出してしまったのだ。

「どうかしたか?」

「あ、いえ……トリシャさんに初めて会ったとき、服の内側に…… あの、その……何か、卑猥……なものが……見えて……」

「なんだって?」

訊き返した師匠のおかげで、ますます顔から火が出る気分だった。

しかも、眉をひそめた師匠はこちらの紅潮など一切気にせず、重ねて問いかけてきたのである。

「もう一度言ってくれ。何が見えた?」

「え、えええ! そんな!」

抗議など聞こえもしなかったみたいに、師匠はこちらへと乗り出 してくる。

「何が、見えたんだ?」

「あ、あの……その……」

さすがに二度も言いたくない。

しかし、頑として逆らえるほど、自分に強い意志があるはずもない。観念してうつむき、ぼそぼそと呟く。

「だ、だから……トリシャさんの服に……卑猥なものが……」

あまりのことに、首をくくりたい気分になった。愉快そうに右肩でアッドが笑いを押し殺しているのまで感じられて憎らしい。神様そこにいるのなら、たったいまこの因業罵倒型封印礼装をぶっ壊してあげてください。

しかし、師匠の反応はそんなものではなかった。

口元に手をあてたまま、目を見開いていた。やがてその指がこめ かみに触れて、啓示に打たれた預言者のごとく囁きをこぼした。

「持ち込むの自体は不思議がない。私だって防御策はいくつか講じていた。だが、そんなものは現場になかったぞ。仮に防御策だとしても、到底魔眼殺しほど安定性のあるものじゃない。……だったら、答えは」

言葉は、静かだった。

「別の使い方がある、ということ」

# 「師匠」

呼びかけた自分にも、師匠は反応しなかった。

虚空を見つめたまま、至極穏やかに言葉を続けたのである。

「推理じゃない。到底推理とはいえない。だが、この想像が真実 だったなら言える。言い切れるとも。この犯人は、私の敵だ」

どきりとした。

これまで、何度か師匠のそばで複雑怪奇な事件を見てきた。

しかし、どの事件に対しても、あくまで師匠は受け止めるだけの一解決するだけの立場だったのだ。推理小説の探偵とは本来そうあるべきだろう。なのに、犯人が自分の敵だなどと断言するのは、一体どういう心境の変化だろうか。

「だったら、もうひとつ調べる必要がある。この儀式を完遂するなら、しかるべき触媒が必要だ」

#### 「師匠」

自ら車輪を回し、扉へと近づいてから、師匠は振り向いた。

「後で、どうしても、もう一度会っていただくよ。カラボー氏」

「す、すいません。失礼します!」

その言葉とともに、部屋の外へ遠ざかる車椅子を、自分は慌てて 追ったのであった。 数分ほどして、

「一あ、先生!」

と、廊下のカウレスが振り返った。

癖っ毛がぴこんとはねて、眼鏡の上で揺れる。こちらは師匠に言われて、オルガマリーの様子を見ていたのだが......列車の廊下で立ち尽くしていたところを見ると、どうやら問題が生じたらしい。

なお対面しているのは、師匠と、師匠の車椅子を押す自分のふたりきりである。メルヴィンはなにやら師匠に言われて、別行動中だった。

「申し訳ありません。一度は入ったんですが、追い出されてしまって」

「いや、いいんだ」

と、師匠が手をあげた。

それから、少年へとこう言いつけたのだ。

「カウレス。ひとつ頼みがあるんだが、しばらくこの部屋に誰もいれないよう、廊下で見張っていてもらえないか」

「見張るんですか? もちろんかまわないですが」

「スタッフなどなら仕方ないが、誰かが近づいてきたら事前に教えてほしい。一応結界は張っておくつもりだが、正直自分の腕は信用できないものでね」

苦みを帯びた師匠の言葉に、カウレスは真っ直ぐ頭を垂れた。

「分かりました。ですが、先生はご無理なさらず。本当は動き回っていい身体じゃないはずですから」

「ありがとう」

礼を言って、師匠は扉へと向き直った。

「鍵は掛けてないな。入らせてもらうぞ」

ぐい、と扉を引いて、その内側を露わにする。

はたして、オルガマリーはその個室の中央で、椅子に座っていた。

「……何、またお前なの」

と、銀色の髪の少女は横目に睨みつけた。

化野菱理の推理劇が終わった後、カウレスを追い出してから、彼女はこの部屋で引きこもっていたらしい。もう一歩たりとも動くつもりはないというように、その表情は硬く、冷たかった。

「早く出て行きなさいよ。お前の弟子も追い出したんだから」

拒絶を前にして、師匠はそっと扉の縁に触れた。

何かの術を使ったようだったが、さきほど言っていた結界だろうか。外部に余計な話を聞かれない程度なら、師匠の腕でもたやすくつくれるらしい。

「グレイ」

「.....あ、はい」

すげなく言ったオルガマリーの前へと、師匠の車椅子を進める。

眼と鼻の先まで進ませ、それこそ吐息のかかりそうな距離で、師 匠はゆっくりと切り出したのだ。

「君に、訊きたいことがある」

その様子で拒絶しきれないと判断したのか、オルガマリーは嫌そうに口を開いた。

「今更何? 事件については洗いざらいあの法政科が蹂躙していったでしょう?」

解決したとはいわない。あくまで法政科が政治劇のパフォーマンスとして利用しただけということは、彼女も十全に承知しているらしかった。

「あいつら、勝手に踏み込んできて、勝手にトリシャの首を奪って いったんだもの。別に、お前たちだってどうでもいいんだけど」

彼女の言葉からすると、菱理にとってはもう用済みということなのかもしれない。あくまで魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの事件を処理するためだけに、オルガマリーやトリシャの生首といった証拠を利用しただけ。それより先のことなど、一切関知しない。

### (.....本当に?)

何かしら、違和感はあった。理由も理屈もないのだけど、顔を埋めた羽毛の枕の中で、ほんの数枚だけ人工の羽が混ざっていたような感覚。

それを言語化する前に、師匠が口を開いた。

「レディ」

と、呼びかけたのだ。

「私は、悔しく思っている」

「悔しい?」

「そうだ。今回の犯人は明らかに私の敵だ」

再び、師匠は敵と言った。いまだ輪郭も見えざるこの事件の犯人こそは、ロード・エルメロイII世と相容れざる者だと。

「だから、問いたい。トリシャ・フェローズはほかに何も残さなかったか? 虚数術式のポケットから落ちたものは、生首のほかになかったか?」

尋ねた師匠に、少女はすぐ答えを返さなかった。

代わりに、

「.....ねえ」

と、低く囁いた。

「どうして、私がそんなことを言わなきゃいけないの」

「オルガマリーさん?」

思わず名を呼んだ自分に、少女は視線も向けなかった。

「私は、お前たちが嫌いよ」

スカートをぎゅっと摑み、下から睨めあげる。

薄い唇をへの字にして震わせ、目尻には涙を溜めて、それでも言い放つ。

「頑張って努力して認められましたなんて、そんな顔してるヤツラが嫌い! 他人に認められる必要なんてないって自己完結してるヤツラが嫌い! 両方の顔してるようなお前は、最悪の最悪に嫌い!」

「師匠は、そんなこと……」

「言ってるのと同じよ! だって、お前たち立ち上がろうとしてる じゃない! あんな法政科の推理劇を見て、まだ諦めないで何かし ようとしてるじゃない! そんなの見てたら、私の方が惨めになる でしょう!」

強くかぶりを振って、少女は叫んだのだ。

あまりに感情的で、何の理屈にもなってなくて、だからこそ否定 しがたい圧が言葉にはあった。小さな拳を精一杯に握りしめ、小鼻 をひくひくと震わせて、屈辱を嚙み殺しながら自分たちを睨んでい た。

「そんなお前たちを拒みきれない今の自分が……何より、嫌よ」 震えた声が、絨毯に絡みついた。

Г......

師匠は、しばし沈黙して、少し距離を取った。

代わりに、かちん、と音がした。

胸元のシガーケースから、葉巻を取り出した音だった。マッチを擦り付けるようにして、葉巻の先端部に火をつけると、師匠は唇の端でくわえた。その香りが、ひどく懐かしい気がした。師匠の体調を考えると止めるべきなのだろうけれど、それでも今しばらくはこの香りとともにいたかった。

オルガマリーを噎むせ返らせぬよう、横を向いて、ゆるりと煙を くゆらせながら、

「私は、勝てなかったんだ。レディ」

と、師匠は吐き出したのだ。

「.....何のこと?」

「知っているだろう。第四次聖杯戦争について調べたのなら、私があの戦いでどのようになりはてたかも分かっているはずだ。ああ、確かに私は生き残った。だがそれだけだ。勝つことはできなかった。ばかりか、あの戦いでは誰ひとり勝てなかった」

(.....b)

と、自分は瞬きした。

第四次聖杯戦争では誰も勝てなかった、というのを初めて聞いたからだ。何人もの魔術師と英霊が挑んだ中、師匠が生き残ったという結果だけは知っていたものの、総体としての結末は耳にしていなかった。

(.....だったら)

もうすぐ第五次聖杯戦争が起こるというのも、勝者が出なかった ためだろうか。

魔術師と英霊の殺し合いの果て、聖杯によって願いが叶えられる というその儀式で勝者が出なかったなら、それはあまりにも無残な 死者の列ではあるまいか。

そして、生き残ってしまった師匠は--

「立ち上がったわけじゃない。──単に、うずくまる方が辛いだけ だ。 諦めなかったわけじゃない。──単に、思考を止められないだけ だ。

あの戦いに後悔はない。だが、思い返さなかった夜もない。自分の行動がほんの少し違っていたら、まったく違った結果が出たんじゃないかと、何度シミュレーションしたかなど覚えてもいない。ああ、私が第五次聖杯戦争に出ようとした理由なんて簡単だ。レディ、私はきっと証明したいだけなんだ。あのとき、劣っていたのはマスター私だけで、サーヴァントは必ずや勝利をもぎとれる器だったのだと」



(あ.....っ)

師匠の声に、自分は奥歯を嚙みしめた。

多分、そうなのだろうと思っていたことなのに、言葉になって現れると、やはり胸が騒いだ。喉がひりついた。第五次聖杯戦争に師匠が出ようとしていたそのわけ。現実とも異界ともしれぬ空間を走る魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、師匠はようやっとその内実を告白した。

自分と同じように敗れた、君主ロードの娘を相手に。

「オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア」

もう一度、ゆっくりと呼びかけたのだ。

葉巻を指に挟み、語りかける。

「今度こそ、私は勝ちたいんだ。この事件の犯人が私の敵であると 分かった以上、どうやっても負けるわけにはいかないんだ」

言葉は、まるで祈りのようだった。

けして美しいだけのそれではない。静謐なる教会に尼僧が跪ひざまずくごとき清らかさではなく、不眠不休で歯ぎしりし、組み合わせた指に血が滲むほどの情熱が燃えさかっていた。おそらく信仰の本義とはこれだ。人と人を結びつける神聖な絆などではなく、誰もを猛らせるだけの圧倒的な炎。

きい、とオルガマリーの座っていた椅子が軋んだ。

師匠に気圧された少女が、かすかに体重を移した音だった。

「あなたは……」

と、呻きがこぼれた。

「この事件の犯人は、あの聖堂教会じゃないっていうの? 別に真犯人がいて、あなたにだけはその相手が分かるとでも言うの?」

「今の材料だけでは追い詰めきれない。だけど、もう少し材料が揃えば、おそらく」

師匠の言葉の奥に、ぎらぎらとした光が宿っていた。

「勝ってみたくないか、オルガマリー」

少女の名前とともに、ロード・エルメロイII世は問いかける。

まるで純真な悪魔みたいに。まるで狡猾な天使みたいに。ひどく 矛盾した概念が師匠の内側で共存していて、同時に少女へと乗り移 ろうとしてるように見えた。

「ひょっとすると、私はトリシャさんの名誉をもっと傷つけるかもしれない。ひょっとすると、ミス化野の組み立てた論理を補強するに終わるかもしれない。ひょっとすると、君の顔にまで泥を塗るだけで、ただ惨めにこの列車を降りるはめになるかもしれない。――だけど、それでも」

それでも、なお、と師匠は吼える。

「証明したくないか。従者を殺されたままで泣き寝入りなどしない のが自分なのだと、世界に向かって証明したくないか」

そこで、言葉は途切れた。

熱心に話していた師匠が、車椅子の背にもたれかかったのだ。傷 の痛みを無視して語り続けた反動に、ついに耐えられなくなったら しかった。

慌てて駆け寄り、汗を噴きだした師匠の額を拭う。

しばらくして、重い吐息とともに、少女は口を開いた。

「オルガマリーと呼んだわね。天体科アニムスフィアでも、君主ロードの娘でもなくて」

「……そうだ。君が必要だ。君の答えがなくては勝てない」 弱々しく肯定した師匠に、オルガマリーも視線を合わせた。

「忘れないで。これは取引よ。ロード・エルメロイII世」

「もちろんだとも」

「だったら」

うなずいた師匠に、オルガマリーは立ち上がった。

くるりと踵を返すと、背後にあった机の引き出しからとある品を 取り出したのだ。

「……これが、トリシャの首と一緒に落ちていたのよ」

「.....やはり」

品を受け取って、師匠は呟いた。

手の平を転がして、確信とともに囁く。

「仮にも法政科の魔術師が見落とすとも思えない。まして、この礼 装の意味が分からないはずもない。パズルがはまらなくなるから、 わざと推理から外したな。ふん、視る側が視られる側になるとすれ ば、それも当然か」

自分には分からないが、それが師匠の推理にとって欠くべからざる品らしかった。

(...... 拙が見たのとは......違う)

トリシャと出会ったときに、思わず赤面してしまった代物ではない。

奇怪なアクセサリーみたいな品だった。青いガラスの中心に目 玉っぽい模様が描かれ、まるでこちらを見つめているような造形に なっている。

一旦、机の上にそのアクセサリーを置き直して、

「後、もうひとつ訊かせてほしい」

と、師匠が持ちかけた。

「やはり、アニムスフィアが少し調べたというには、あなた方は聖 杯戦争について詳しすぎる。可能なら、事情を話してもらえない か」

「大したことじゃないわよ」

「どんな些細なことでもいい」

「それって、事件どうこうじゃなくて、単にあなたがあの聖杯戦争 に女々しく未練たらたらだからじゃないの?」

手を振って、いかにもくだらなげに少女が言う。

挑発しているのは明らかだった。それでも師匠の表情は、変わらなかった。

「かもしれない。今の私が冷静だとはとても言えないだろう。それでも、ひとつずつピースをはめていくのはやめたくないんだ。それをやめてしまったときこそ、私は本当の意味で立ち止まってしまう気がする。つまらないこだわりかもしれないが、私ができることなんて、結局それぐらいのちっぽけなことなんだ」

# Г......

「あれだけ聖杯戦争に詳しかった君が、胡散臭い聖杯だとか、そんな超抜級の代物があるとは思えないとか言っていただろう。召喚される英霊についても封印指定局が動いていることについても十分知っていた君が、どうして聖杯についてああも酷評する?」

また、少しの間、オルガマリーは黙考した。

どこか遠い眼差しになって、それでもやがて、ゆっくりと口にしたのである。

「……昔、父さんが、マリスビリー・アニムスフィアが言ってたのよ」

と、形のよい唇がこぼした。オルガマリーの父とはつまり天体科 アニムスフィアの現君主ロードにほかなるまい。師匠やあの闊達た る老女ロード・バリュエレータに続く、三人目の君主ロード。時計 塔を統べる十二人の王のひとり。

「冬木の大聖杯は使い物にならないって」

「大聖杯が使い物にならない?」

鸚鵡返しに呟き、師匠が眉をひそめた。

(.....大聖杯?)

自分も、その言葉を反芻する。

聖杯戦争とは、七人の選ばれたマスターがイスカンダルなど七騎の英霊とともに戦いあい、生き残った一組が願望器となる聖杯を手に入れる……とかそういう流れの魔術儀式だったはずだ。だが、その大聖杯が使い物にならないとは?

同じ思考に辿り着いたのか、師匠も質問した。

「それは、どういうことだ?」

「知らないわよ。父さんは、あの先代ロード・エルメロイが死んだ 聖杯戦争とかいうのをしばらく懸命に調べていたけど、結局そんな 結論で取りやめたってだけ。……だから、私はこの聖杯戦争という のはインチキだと思ったのよ。何かのイカサマで英霊召喚を可能に はしてるようだけど、願望器となるような超抜級の代物じゃありえ ないって。きっと、そういう意味だって、思ってたのだけど」

言葉を区切らせながら、オルガマリーが顔をあげた。

「あなたには、別の意味が分かるの? 第四次聖杯戦争を戦い抜い たあなたなら?」

「.....いや、私にも分からない」

ゆるく、師匠がかぶりを振った。

「私も大聖杯を直接目にしたわけじゃない。以後にいくつも仮説は立てたが、確証を持つには至らなかった。あるいは第五次聖杯戦争に参加すれば、そうした謎についても答えが出るかと思っていたが」

短い言葉に、反比例して長い時間を、自分は想像した。

第四次聖杯戦争から十年。師匠の性質を考えると、どれほどの時間、聖杯戦争について思い煩っただろう。ひょっとすると、それは、自分がこの容姿について苦悩した濃度に匹敵するのではないだろうか。

だからかもしれない。

頭の悪い自分と師匠ではまるで似通ってないのに、時々身勝手な

親近感を覚えてしまうのは。痛みに耐えかねて叫びだしてしまいたい、その刹那だけは自分とこの人は共有してるんじゃないかと思えて。

銀色の髪の少女は、ゆらゆらと視線を彷徨わせて、ふと呟いた。

「まるで、残像みたいね」

「聖杯戦争がか?」

「何もかもよ。この列車の旅で触れたものは、何もかもが残像みたい」

と、オルガマリーは返した。

その目が細められて、窓の外を流れる昼下がりの風景に、視線を 移す。

冬の陽光は弱々しく、流れていく影の色も淡かった。腑海林アインナッシュの仔を脱出してからはおおよそが開かれた原野で、緑の海を掻き分けるようにして列車は走っているのだった。

「あなたの聖杯戦争も、腑海林アインナッシュの仔も、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンも、まるで置いていかれた残像のよう。とっくに主人は彼方へ歩き去っているのに、影だけが現い在まの時間に取り残されてる。影しかないと分かってるのに、どうして誰も彼もが一生懸命にすがってるのかしら。本当に馬鹿馬鹿しくてみっともない」

少女の言葉に、自分もそんな幻を見た気がした。

腑海林アインナッシュの本体。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの、本来の支配人。

どちらも話にはあがって、今回の事件に影だけを残している。いや、過去の影を浮かび上がらせるという泡影の魔眼だって似たようなものだ。誰も彼もが過去に縛られ、本物と遠ざけられたまま、その影に踊らされている。

「.....残像?」

もう一度、ぽつり、と師匠が呟いた。

痩せた背中が震えた。サーヴァントの宝具で傷ついていた身がついに限界に達したのかと思い、自分の心臓が跳ねる。

「師匠っ?」

「……ああ、それだ。それがふたつめのパーツだ。決定的な歯車だ」

しかし、呻くように口にして、師匠は天井を仰いだのだ。

自らの額に手を置く。ゆっくりと顔を撫で下ろして、低く笑っていた。

「さすがは……天体科アニムスフィアの後継者だな。たとえ理性でなくても、その視点は世界を俯瞰しているか」

「っ、な、何よ。急に褒めないでよ!」

「だが、この答えの検証は……ああ、くそ、せめて時計塔の地図があれば」

車椅子の肘掛けに手をつき、軽く唇を嚙む。

その言葉を聞きとがめてか、赤面したオルガマリーが尋ねたのである。

「地図が、必要なの?」

「ああ。霊地状況まで含んだ地図が必要だ。最新の衛星写真でもなんとかならなくはないが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのことを考えれば、該当するアストラル界のデータが......」

「用意できるわよ」

少女が、短く言ったのだ。

「何?」

「用意できると言ったのよ。つまり、この星の現実テクスチャと、 現実テクスチャに重なっている内界の座標情報があればいいんで しょう?」 そう告げて、オルガマリーは近くの鞄から、手の平大ほどのレンズや歯車が嚙み合った機器を取り出したのである。

どうやら、それは映写機に似た魔術礼装だった。

「照らせBright」

囁きとともに、レンズから光が生まれた。

低い音を立てて、部屋の中央に、地球儀のごとき幻像が浮かび上がったのだ。

幻像の表面には淡い光がいくつも走っており、オルガマリーが手をかざして拡大すると、どうやら自分たちがいるらしいイギリスの周辺地域をも映しだした。

「.....これ、は」

「天体科アニムスフィアがつくってる疑似環境モデルの、数多ある 実験作のひとつよ。あくまで幻像だし、霊脈レイラインや霊地の確 認にしか使えないけれど、あなたの言った程度の役には立つはず よ。何よ、別に驚くようなことじゃないでしょ。法政科だって似た ようなのは持ってるわよ。でないと、特許出された魔術の使用頻度 とか確認できないでしょ」

低く呻いた師匠に、してやったりと唇に含ませて、オルガマリーが胸を張る。

師匠はしみじみと幻像を見返してから、うなずいた。

「……ああ、理屈は分かる。だが、天体科アニムスフィアが地球に も興味があったとは思わなかった」

「地球だって星のひとつでしょ? だいたい私たちの目的は天体そのものじゃない。より深くこの地ほ球しを知りたいなら、外堀を埋めるのが近道ってだけで、だったら、その流れとして再演を行うのは―」

言いかけて、少女がうっと口ごもる。

「……オルガマリーさん?」

「......なんでもありません! それより、これで問題ないなら、さっさと調べなさい」

「分かった」

そう言って、師匠も拡大された表面へ目を凝らした。

長い指が球体を流れる白い光をなぞり、自分たちのいるらしき地点で止まった。手帳にメモを取りつつ、師匠は何度かうなずいて、 検算みたいに数字を刻んでいく。

「ああ、これで間違いない。少なくとも、理由だけは明らかだ。犯人の目的はどうしようもなく明確だった。だったら......」

師匠の声が、遠く響く。

どれほど助けてあげたくても、そんな疑問の答えを自分が持っているはずもない。唇を嚙んで視線を外し、窓の外を流れていく景色に逃避する。氷雪林などどこへやら、いっそのどかな田園風景が次々と移っていき、師匠の思考は深く深く沈殿していく。

やがて、虚ろな笑い声がこぼれた。

「.....はは」

「師匠?」

「なるほど。順番の問題か」

浮かべた笑みの性質は、いつもとまるで違っていた。

ぞろりと牙みたいに剝かれた白い歯が、自分の喉にかぶりつくみ たいで、一瞬心臓が跳ねてしまった。

「ああ、今度こそ摑まえたぞ……ははは、どうして気づかなかった? こんなのは謎でもなんでもない。最初からこれでもかとばかりにあからさまだろう。いつのまに、私の頭蓋骨にはおがくずが詰まってたんだ。

個人的な衝撃が強すぎて、完全に見誤ってた。ああ、そうだ。ヘファイスティオンが女性で召喚されればどうしてもその理由を考える。だが、重要なのはどうしてヘファイスティオンが女性なのかじゃない。どうしてヘファイスティオンが『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』にいなかったかでもない。二千年以上も昔のことだ。伝承にはどんな事情も間違いも起こりえる。だから、そんなことよりも、考えるべきはもっと前にあった」

一拍おいて、自らの答えを嚙みしめるように、囁いた。

「……どうして、あれがヘファイスティオンを名乗ったかだ」

ホワイダニット。

なぜ、そうしたのか。

何度となく繰り返されてきた、師匠の思考の源泉。 しかし、今回 はどういうホワイダニットが発生するというのか。

「いや、全部そうだ。これは事件なんかじゃない。かつて事件だったものの残像だ。いいや、もっとずっと救われない残骸だ」

「何を言ってるのあなた?」

オルガマリーの眉が怪訝そうに寄ったが、師匠はかぶりを振った。

「説明は後でまとめてする。残念ながら物証がなければ信じてもらえるような話じゃないんでね。.....もっとも、間に合うかどうか」

葉巻をくわえたまま、苦く唇を歪めた師匠が、ふと扉の方を向いた。

ごそごそと、気配が部屋の外で動いたのだ。師匠が何か細工していたようだが、外部からの音を遮蔽する類ではなかったのか、ここにきてふたりの声が届いたのである。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよメルヴィンさん。先生に誰もいれるなって」

「むむ! だから、私はそのウェイバーに乞われて、願いを達成してきたんだが!」

そのやりとりに、師匠の表情が淡くゆるんだ。

「ああ、ヤツがやってきたか。グレイ、開けてやってくれ」

「あ、はい」

扉を開くと、もつれあうようにふたりの人影が入り込んできた。

片方はカウレスで、もう片方はメルヴィンであった。ぱんぱんと白いスーツを叩いて、白い髪の青年の方が自慢げに胸を張ったのだ。

「ふふん。君がどうしてもと頼んだとおり、オークションを遅らせる手配をしてきたよ!」

「どうだった?」

「はは、こういう文句のつけかたなら任せてくれたまえ。カタログの不備に列車遅延、追加客の案内の不手際から手当たり次第に切り込んで、ひとしきり抗議を浴びせてから、資金追加などの必要上、可能な限りオークションの開始を延ばせってねじ込んできた。夕刻開始だったところが深夜開始になるそうだ」

クレーマーという言葉が頭をよぎったが、あえて口にはしない。 確かにこの青年ならば得意分野っぽい気はする。ロンドンの高級店 に入っても、まったく変わらぬ調子で苦情を振りまいてるところが たやすく想像できる。そのくせ最終的に見ると、上客の部類に入り そうなのがなおさら性質の悪いところだった。

## 「上等だ」

と、師匠もうなずいた。

銀鎖の懐中時計を取り出し、時間を確認する。

「零時まで後十時間か……。間に合うかというとギリギリだろうな」

「どうするんですか、先生」

カウレスが、さすがに不安そうに問う。

対して、師匠は困ったように笑ったきりだった。

「焦っても仕方あるまい。まずは英気を養うさ。──ところでカウレス、ひとつ頼みごとをしてもいいかな?」

\*

その後、事態は動かなかった。

師匠はおとなしくベッドに戻って休息を取っていたし、自分も隣から離れなかった。

カウレスも師匠の背中に包帯を巻き直し、オルガマリーからも らっていた秘薬パナケアを塗り直したぐらいで、部屋を出ないまま だった。夕食のアナウンスもあったが、師匠が不要だと言ったの で、そのまま過ごすことになった。

メルヴィンは唯一楽しそうにあちこちを出入りしていたが、少なくとも認識できる範囲では大きなトラブルはなかった。

ただ、全員がとある予感を抱えていた。

この短くも恐るべき魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの旅が、 いよいよ最終局面を迎えようとしているのだという予感を。

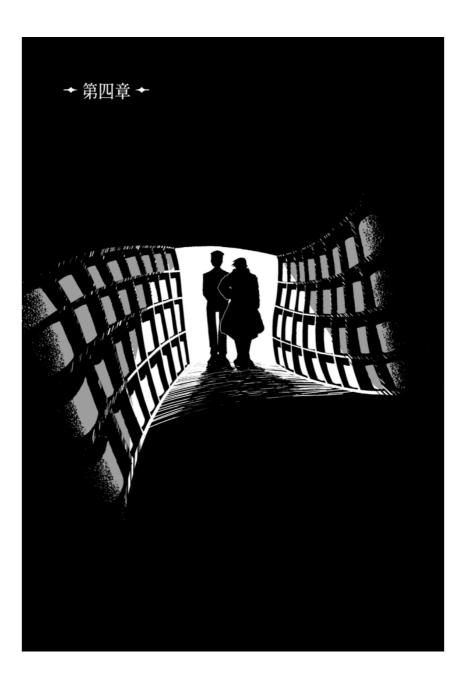
そして、夜も更けた頃、車内にとある放送が響きわたったのであ る。

「皆様」

車掌のロダンの声であった。

もはや聞き慣れたバリトンは、厳かにこちらの耳じ朶だを叩い た。

「皆様──これより魔眼オークションを開催いたしたく存じます。どうぞ第二車両・万魔眼球庫パンデモリウムまでお越しくださいま



「ようこそ、皆様。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが誇る万魔 眼球庫パンデモリウムへ」

車掌の挨拶は、まるで荘厳な楽器のように列車内に響いた。

息が詰まるほど、奇妙な場であった。

万魔眼球庫パンデモリウムの名にふさわしく、内側の壁にはいく つもの眼球が封じられた硝子の筒が、所狭しと置かれている。ずら りと並んだ眼球には、多くの魔術師と出会ってきた自分をも威圧す るだけの異様さがあった。そのすべてが魔眼だとすれば、ひとつひ とつに想像を絶する神秘と物語が秘められているのではあるまい か。

同時に、もうひとつの異常にも気づかざるを得なかった。

(.....大きさが、おかしい)

どう見ても、列車ひとつ分の広さではない。

縦幅はともかく、横幅は倍ほどもありそうだ。あくまで必要最低限という感じではあるが、空間を歪める魔術か何かが使われているようだった。奥は一段高くなっていて、車掌とオークショナーが控えている。いまこの列車を運転しているのはほかのスタッフなのか。それとも、列車自体が自らを運行させているのか。

「皆様、長らくお待たせいたしました」

再び、車掌が口にした。

闇と同化したまま何千年でも佇んでいそうな姿であり、声であった。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンある限りその存在は潰えず、万が一魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの消えることがあれ

ば、ともに消えてしまいそうにも思えた。

自分と師匠も含めて、場にはほぼ全員の招待客が揃っている。

ほかに、メルヴィン。

オルガマリー。

イヴェット。

ジャンマリオ。

化野菱理。

いないのは、何かしら吹き込まれたカウレスと、監禁されたカラボーぐらいである。

腑海林アインナッシュの仔を脱出してから乗り込んできた鴉から すなどの使い魔たちも、二組に分かれて、天井近くへ配されてい た。

「今回出品される魔眼は全五点となります。個々の魔眼についての性能や条項、落札見積価格エスティメート、およびオークションについての諸注意は、お手元のカタログにありますのでご確認くださいませ」

全部で五点。

うち二点は初耳だが、おそらく自分たちが出席しなかった夕食あたりで紹介されていたのだろう。出席しなかったのはこちらの勝手なので怒る理由もない。

「また、先に案内しています通り、オークション中の貨幣はドルで対応しております。今回の旅は大英帝国内ということもあり、眉をひそめられる方もいらっしゃるかとは思いますが、これは欧州全土を運行する魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンゆえの事情とご寛かん恕じょくださいませ。各国通貨のドルへの交換は承りますし、融資の確認などが取れますよう、外部への通信は確保しております。ご自由にお使いください」

説明の後、車掌が一歩下がった。

その間隙へ、するりと毛皮のコートが入り込んだのだ。

「では、魔眼オークションを開始いたします」

オークショナー・レアンドラが、粛々と宣言した。

毛皮のコートの胸元に、小さな木槌が揺れている。ひどくちっぽけなその木片が、どうしてこんなにも恐ろしく目に映るのだろう。

「......師匠」

「……残念だが、まだ物証は届いてない」

密やかな声で、師匠が答えた。

メルヴィンによる遅延工作は無駄に終わったのか。

オルガマリーも、イヴェットも、もはやこちらを見ようともしなかった。事件に対する関係はそれぞれだろうが、同時に彼らはどうしようもなく魔術師だった。魔眼のオークションとなれば、ほかのあらゆる関心を打ち切ってしまうほどに。

同時に、異様な熱は招待客だけによるものでもない。

さきほどの使い魔たちのおびただしい視線が、壇上に注がれているのも感じられた。

「最初の魔眼を、開帳いたします」

オークショナーが頭を下げると、その隣から別のスタッフが現れた。

壁にずらりと並んでいるそれとは別の、優美な拵こしらえをなされた硝子の筒を抱えていた。無論、中身に入ったのは一対の眼球である。その筒が傍に鎮座されると、オークショナーは満足げにうなずき、ハスキーな声で囁いた。

「まずはノウブルカラーの一点、『炎焼』の魔眼です。 ノウブルカラーとしては基本的なものですので、最低額は百万ドルから。では、オークションを開始します」

木槌が打ち下ろされる。

その響きが消えぬうちに、ビッドが始まった。

「百十万ドル」

「百二十万」

「百三十万」

使い魔たちから、続けて声があがったのだ。

大型のオークションでは、ビッドの値段はオークショナー側から 提示していくそうなのだが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの それは使い魔を含めても二十に満たぬため、参加者が直接数字を宣 言する方式を取っているそうだ。

とはいえ、使い魔の多くは梟ふくろうや鴉といった鳥類だけに、 ひどく不気味な光景だった。鸚鵡が声まねをするといっても、それ は所詮真似だ。声に意志はこもってないし、知性が宿ることもあり えない。しかし、今使い魔たちがわめく声音は単なる知性ばかりで はなく、魔眼や金銭への異様な妄執をもへばりつかせていたのであ る。

「百五十万」

「百七十万」

「百九十万」

さらに、声は続く。何小節も続く呪文のようだった。

声音に潜んだ強烈な妄念もあいまって、このオークション自体がある種の大儀式のごとく、自分の目には映っていた。新たな値を叫ぶたびに椅子が響き、呻き、ねじくれた空間をさらに歪ませるように思えた。いや、実際それは魔術なのかもしれない。金銭は人がつくった共同幻想であり、ある種の魔術だよと師匠が言っていたのを思い出す。だったら、オークションなんてその最たる例だろう。まして、魔眼のオークションともなれば。

使い魔たちがひととおりの値を宣言したところで、初めてパドル 札があがった。

「五百万ドル」

イヴェットである。

一気に、三倍近くあがった。本気で参加してる招待客なら、使い魔なんかに任せないという彼女の言葉を思い出す。ここまでは所詮は前座。本番はここからなのだと宣言されたみたいで、列車の空気は一段と熱を増した。

もうひとつ、パドルがあがった。

今度「五百三十万」はジャンマリオだった。思わず眼を見張って しまう。メディアで儲けたと言っていたが、だからといってそこま での額を用意できるものだろうか。それとも、もっと別の方法で儲 けた金なのだろうか。

「五百五十万」

「六百万」

再び、イヴェットとジャンマリオが続けて言った。

背筋を嫌なものが流れる。人の命だってたやすく買えそうな額が、いともたやすくこの列車の中を流れていく。たやすく消え去っていく。それはほとんど魔術のように、こちらの神経を侵していく。

「六百十万」

「六百二十万」

「六百三十万」

イヴェット、ジャンマリオ、イヴェットの順。

細かい寄せに入っていく。十万刻みであげていく声は、ある種の リズムを伴ってるようにも聞こえた。時折オークショナーのカウン トが挟まって、なおさら車両の熱がかきたてられていく。

思惑も熱も渾然一体となって、オークションという場を熟させていく。

この場合、対象となる魔眼は視られているのか。それとも視ているのか。

「六百三十万です。ほかにありませんか?」

オークショナーが確認とともに、車両を見回した。

ジャンマリオが悔しそうに歯嚙みしていたが、これ以上の増額はなく、オークショナーが木槌を持ち上げたところで、新たな声が生まれた。

「一千万」

真っ白な髪の青年が、パドルをあげたのだ。

(メルヴィン.....)

息を、止める。

桁違いの数字を口にしたメルヴィンは、いつもと変わらぬ落ち着いた顔だった。

さすがに、イヴェットもジャンマリオもその数字には抗えず、今度こそあらゆる声が絶えたところでオークショナーが木槌を打ち下ろす。ハンマープライス。誰が落札者であるか、明確に示す硬い響き。

その音とともに、群がっていた使い魔たちにもそこはかとない気 配が動いた。

(誰がどの魔眼を手に入れたかが、次の時計塔の利権につながる……)

そんなことを、以前イヴェットが話していた。上位の魔眼とはそれだけの力があるものなのだと。メルヴィン・ウェインズが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでなんとかのノウブルカラーを手に入れた……その情報だけで、奪われる命もあるのだろう。

最初の魔眼が下ろされ新たな魔眼が壇上へと配された。

「次は、掠りゃく取しゅの魔眼となります。再度申し上げますが、

責任制限条項などは皆様カタログをご確認ください。こちらの魔眼は『黄金』の位階でもありますので、最低額は五百万ドルからになります」

責任制限条項で思い出した。

前のオークショナーの話だと、主人に牙を剝いたという魔眼だ。他者の生命力を視ただけで奪うという『黄金』の位階。

はたして『黄金』という名が口にされたとき、使い魔たちの間から大きく唸りがこぼれた。カタログなどで確認してはいても、実際に出てくると感慨が起こったものか。神秘とともに生きる魔術師だからこそ神秘の価値を知る。黄金の魔眼が与えた衝撃はいかほどだったろうか。

今度は、ジャンマリオは参加しなかった。先ほどの金額レースを見て、これは相手にならないと思ったのかもしれない。

やはり使い魔たちの小競り合いの後、イヴェットとメルヴィンの 一騎打ちになり、今度はイヴェットの方が四千万ドルで落札した。

「さすがは魔眼の大家。これぞという魔眼では退かないな」

師匠が評して、顎元を撫でる。

イヴェットにしてみれば、絶対逃せない一幕だったのだろう。

続くふたつの魔眼は、さすがにノウブルカラーではなく、結果として使い魔たちが競り落とした。この場合、移植手術は魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと落札した相手の双方が日取りや場所などを協議して行われるらしかった。

\*

そして、そのときはやってきた。

五点目となる魔眼の入った筒が、ついに壇上へとあがったのである。

「では、最後に──今回のメイン。『宝石』の位階、泡影の魔眼とあいなります」

オークショナーが一礼した。

招待客たちではなく、その魔眼にこそ礼をはらうかのように。

誰ひとりその態度に否を唱えず、むしろただでさえ沸騰していた 列車内が、その数十倍も煮えたぎる。欲望と妄執ともっとそれ以外 の熱情が混こん淆こうした、言いしれぬ渦が万魔眼球庫パンデモリ ウムを席巻していた。

「当列車においても、『宝石』の魔眼を扱うことはまずありません。私も含め、この場に居合わせた皆様はそれだけで至上の幸運 だったと言わざるを得ません」

かすかに、オークショナーの声も上擦っているように聞こえた。

万魔眼球庫パンデモリウムに満ちている熱は、けして買い手ビッダー側だけのものではない。列車のほとんどのスタッフはただかつての支配人に続いてるだけだろうとも言われていたが、ことが『宝石』の魔眼ともなれば、新たな一面をさらけだすらしかった。

「最低額は三千万ドルからです」

スタートから桁が違った。

このレベルとなれば、使い魔で参加している魔術師たちも下手な 参加をする気はないらしい。誰も声をあげる気配はなく、生身で参 加している招待客だけのレースとなった。

# 「一七千万」

まず、メルヴィンがスタートを切った。

この額になっても、純白の青年は一切表情を変えていなかった。 淡々と最低額の倍以上の値をつけて、ひとつうなずいたきりであっ た。

#### 「八千万」

続いて、オルガマリーもパドルをあげたのだ。

ここに来て初めての参加に、あげかけた声を押し殺す。

# 「……オルガマリーさん」

「当然といえば当然だろう。従者の死という不運があったとはいえ、もともと彼女は今回の魔眼が狙いだったんだから。『虹』ではなかったにせよ、『宝石』の位階となれば目的には十分。遠慮する理由もあるまい」

師匠が、呟く。

自分たちと取り引きしたとはいえ、オークションは関係ないということだろう。

それはその通りだ。オルガマリーが参加したからといって、師匠が犯人を捜す障害になるとも思えない。しかし、わずかなりとも言葉を交わした相手が、このような苛烈な競争に参加するということ自体、臆病な自分の心を揺らすには十分だった。

# 「八千五百万」

# 「九千万」

ふたりの間で、火花が散るようだ。

交わされる刃は現実にも魔術にもあらず、しかし確かに血を噴き、強烈な痛みを強いているのが自分にもはっきりと伝わった。金 銭という人類の共同幻想は、それだけの意味を持っている。

# 「九千五百万」

# 「一億」

大台に乗った言葉は、三人目。

イヴェットも、堂々と参加したのである。

しかし、だから何だと叫ぶように、声は続く。

# 「一億一千万」

#### 「一億二千万」

メルヴィンとオルガマリーのパドルは下がらない。

痛いほどに、心臓が高鳴っている。傍で見守っているだけの自分の意識が、数字の渦に巻き込まれていく。

「ああ、ピカソだってその程度の値はつく。宝石の魔眼となれば、 まだまだ止まらないだろうさ」

師匠が呟き、はたして数秒で、新たな価格がついたのだ。

#### 「一億三千万」

あっ、と声が出そうになった。

いままで傍観していた化野菱理がパドルをあげたのだ。四人目の 参加。優美に袂を押さえたその姿に、スタッフも魔術師たちも唾を 飲み込んだ。

「......いやいやいや、法政科さんってば冗談でしょ?」

さしものイヴェットさえ、動揺を誤魔化すためか、ぱちぱちと瞬きしてから軽口を叩く。普通のオークションならばマナー違反なのかもしれないが、この列車ではとりたてて注意する様子もなかった。

「もちろん本気ですよ。冗談で参加できるような場所ではないで しょう」

菱理の言葉は、あくまで穏やかだった。

メルヴィンも、オルガマリーも、その微笑に言葉を失った。

「さあ、どうぞおかまいなくオークションを続けてください」 ゆるりと促すと、オークショナーが軽く木槌を打ち下ろした。 それだけで、ビッドが再開された。

## 「一億四千万」

# 「一億五千万」

#### 「一億六千万」

メルヴィン、オルガマリー、菱理の順。

ビッドに参加する招待客が四人になったことで、オークションが 否応なく加速する。ぐるぐると渦を巻く螺ら旋せんを想起した。 オークションに参加している魔術師たちの間で、金という『力』を 媒介に行われる、螺旋の大魔術儀式。ひりつく渦の中で、なおも四 人のパドルは下がらない。

#### 「二億」

イヴェットの声で、新たな大台に乗った。

さすがに、ざわめきが湧いた。見守っていた使い魔たちの間を、確かに動揺の気配が渡っていく。彼らからさらに外部へと、この情報は流れていくのだろう。波紋はどれほどに魔術の世界を揺るがしていくものか。

#### 「難しい局面だな」

と、師匠の囁きがこぼれた。

「それこそ、これが招待客を選ばない時計塔でのオークションで、死ぬ前のトリシャが言ってたような『虹』の位階──直死の魔眼ともなれば、数十倍の値がついてもおかしくない。論理も因果も飛び越えて死という結果を与えてしまうような魔眼があれば、それは誰もが飛びつくだろう。だが、今回の泡影の魔眼はその点で決定的じゃない。『宝石』の魔眼は君主ロードの何人かがかろうじて持っているかどうかというほどの希少性だが、過去を現在に浮かび上がらせるという特性自体は、魔術師によって評価が分かれるところだろう。だから、このオークションは希少性自体にどこまでの値をつけるかという話になる」

# (.....ああ)

なんとなく、分かる。

価格とは、けして絶対的なものではない。とりわけ、神秘はそうだ。その価値と意味を知る魔術師自体が少ないのだから、どうして

も極端な揺らぎが起きてしまう。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの値付けは、ある意味格安といってもいいくらいだ。なにしろ、本来魔眼なんて値段のつけられるものじゃない。それでも招待客を限定してる以上、このあたりで限界が来るだろう」

実際、動きがあった。

悔しげに唇を嚙み、オルガマリーがパドルを下ろしたのだ。

いいや、彼女だけでなく、メルヴィンもパドルを下ろしていた。 ついに終わってしまうのか。いかなる祭りにも訪れる終着点。魔眼 は誰の手に落ちるのか。はたまた誰に新たな世界を視せるのか。

残るは、菱理とイヴェットのみ。

菱理は、新たに声をあげた。

「二億一千万」

「二億二千万」

イヴェットが、即座に返す。

だが、その渾身のビッドも、微笑を浮かべたままの菱理に迎え撃 たれた。

「二億三千万」

菱理の澄んだ声が、列車に響き渡り。

ついに、イヴェットの口から応ずる声はこぼれなかった。さきほどまで追随していたオルガマリーとメルヴィンも、もう一度パドルをあげなおす気配は感じられなかった。

改めて、オークショナーが万魔眼球庫パンデモリウムを観察する。

「二億三千万で、いいですか?」

やはり、と物音は絶えたままだった。

#### 「よろしいですね?」

全員に確認しつつ、木槌が持ち上がる。ハンマープライス。カラボーの瞳にはまっていた──ひょっとしたら事件のすべてを見通していた魔眼は、法政科の手に──

### 「一二億四千万」

パドルが、あがった。

その相手に、誰もが目を剝いた。イヴェットやオルガマリーはもちろんのこと、いままで最高額をつけていた菱理さえもが硬直していたのである。

#### 「師匠!」

そのパドルをあげたのは──師匠だったのだ。

想像もしなかった魔術師の参加に、使い魔たちの何匹かが悲鳴のような声をあげた。菱理の参加にも驚かなかったオークショナーさえ、今回ばかりは呆気にとられたように、持ち上げた木槌の行き場を無くしたのだ。

「どうしたかな? 二億四千万ドルと言ったんだ。オークショナー、進行を続けていただきたいのだが」

至極落ち着いた声で、師匠が促した。ただ、隣に座った自分の視界には、膝に下ろしたままの左拳がかすかに震えているのが分かった。

# 「では―」

と、木槌を下ろして、オークショナーがうなずいたとき、

## 「待って!」

と、メルヴィンが手をあげた。

「さすがに過熱しすぎています。申し訳ありませんが、少し休憩を

いただけませんか」

勝手とも思われるその言葉に、ほかの魔術師たちから一切抗議があがらなかったのは、師匠の参加があまりに意外だったためだろうか。

かすかな戸惑いとともに、オークショナーは口を開いた。

「提案を受け容れます。十五分、休憩を取りましょう」

オークショナーの宣言が、万魔眼球庫パンデモリウムに長く揺よ う曳えいしたのだった。

# 「―どういうことだい、ウェイバー」

今回ばかりは真剣な声で、メルヴィンが口を開いた。

個室である。万魔眼球庫パンデモリウムを一旦辞して、師匠用の 部屋に戻ってきてすぐ、青年がいままでにない強さで、師匠を詰問 したのである。

「今のエルメロイがあんな金を用意できるはずないだろう! というか、ウェイバーの借金だって全然整理できてないはずだ! 魔眼 蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションが不渡りなんて許してくれると思うのか」

「もちろん、用意なんてできないさ」

うなずいて、師匠は軽く目を細めた。

「だけど、お前、あそこで手を引くつもりだったろう」

「まあ……ねえ。わりとお金の余る生活してるけど、所詮は本家のお下がりだ。これ以上は先立つものが足りてない。あれ以上は引っ張れないよ」

大げさに、青年が両手を持ち上げる。

バイト代ぐらいしか触ったことのない自分にしてみれば、もはや 理解の範囲外すぎて足りるも足りないもさっぱりだ。一億ドルどこ ろか一万ドルだって、ろくな使い道を想像できやしない。

「それでいうと、イヴェットちゃんはだいぶ怪しいんだけどね。いくらなんでも二億ドルは引っ張りすぎだ。アーシェロットやバルトメロイの本家なら出すかもしれないが、だからといってお小遣い程度の金額にはほど遠い。代々魔眼を専門とする家系とはいえ、そんな大金があるとは到底思えないよ」

「……それは、イヴェットが事件に関わってるってことですか?」

「さてね。私は探偵じゃないよ。単に、資産の限界を言ってるだけ だ」

逆に言えば、有力な家の資産限界を見積もるのは、時計塔の権力 構造に組み込まれた者にとっては基本的なスキルなのだろう。けし て時計塔が魔術を研究するためだけの場ではなく、ありとあらゆる 陰謀の坩堝るつぼと言われる由縁。

さきほどのオークションが象徴する、時計塔の戦い。

嫌な汗が噴き出るのを感じながら、自分はもうひとつ質問していた。

「じゃあ、法政科の菱理さんはどれぐらい出せるんでしょう?」

「......あっちは、ある意味いくらになってもかまわんだろう」

「え?」

振り返った自分に、師匠が小さくため息をつく。

「このオークションでつりあがった金が、どこに入るのか考えてみ たまえ」

「え、ええと……」

すぐに意味がのみこめなかった自分に、ひょいとメルヴィンが長い人差し指をあげて、説明を続ける。

「ほら、ほかの魔眼と違って、泡影の魔眼はカラボーさんのでしょ。まあ魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは無理強いしても目当ての魔眼を供出させるけれど、それはあらゆる魔眼はこの列車で扱われるべきという信念に基づくものであって、別に金をかっぱぐのが目的じゃない。売セリラ手ーには手数料コミッションを除いて正当な金額を払うんだよ」

「え、じゃあ、あの二億ドル以上の額面はほとんどカラボーさん に」

「うん。ところがカラボーを収監すれば、その財産は時計塔で没収

でしょ。今回つりあがるだけつりあがった魔眼の値段も、結局そのまんま時計塔に戻ってくるわけ」

「あ.....っ」

思わず、声がこぼれた。

メルヴィンの言っている意味にやっと自分も気づいて、それから 師匠が続きを引き取ったのである。

「必然、時計塔でも運営を握っている法政科が、それらの財産を得ることになる。化野菱理の裁量範囲まではいくら金を出しても問題ないだろうな。なにしろオークションで渡した金が、手数料以外はそっくり返ってくるんだから」

単純だが、途轍もないからくりに、目を見張ってしまう。

自分がオークションの熱にただ惚けていた間、その裏で張り巡らされていた陰謀。あるいはその一端。彼女からすれば、あっちの財布からこっちの財布に金銭を入れ直すだけの話なのか。

「だったら、彼女の裁量範囲がどれまでかだな。いくら法政科とはいっても所詮は構成員のひとりだし、十分限界に近いとは思うんだが。というか、いくら数パーセントとはいっても、手数料コミッションだって馬鹿にならないよ。カラボーの所属が聖堂教会である以上、下手すれば戦争だし」

メルヴィンが、くりくりと自分の白い髪をいじる。

対して、師匠はいつも以上に眉間の皺を深くしながら、尋ねたのである。

「メルヴィン。どれぐらいまでなら引っ張れる? 粘ってられる?」

「ふむ。別にウェイバーはあの魔眼が欲しい訳じゃないだろう。目 的はなんだい?」

「おそらく、向こうもこの高騰は予想してなかったはずだ。オークションの間は集中せざるを得ないはず。その隙に、こちらの切り札を届かせる」

(.....向こう?)

一体、それは誰のことだろう。

カウレスに託した何かと、関係してるのだろうか?

「ずいぶん高い隙だなあ」

快活に、メルヴィンが笑った。

それから、

「ねえ、ウェイバー」

と、むしろ優しい声で呼びかけたのだ。

「もう一度訊こう。これが愉しくなるって、君は約束できるかな? 私に対して保証できるのかな? 友人の破滅を賭けても恥じないほどの一幕だと断言できるのかな?」

青年の瞳は、真っ直ぐに師匠を射貫いていた。ひょっとしたら、 第四次聖杯戦争直前、若かりし師匠が極東への旅費を要請したとき にも同じように見つめたのかもしれない。ふたりの間にぴんと張り つめた空気は自分には窺いしれない時間を凝集させていた。

小さく、師匠がうなずいた。

「約束しよう。きっと君好みだ」

「ようし、それじゃあ」

すぐさまメルヴィンが携帯端末を取り出したのだ。オークション が始まる前、外部への通信は確保できていると話したようにあっさ りと相手とつながり、即座に青年は本題を切り出した。

「あ、私です私。前に欲しがってた調律器だけどさ。いやあげないよ。あげないけど、担保にしたらすぐいくら出せる? 三千万ドル? いやそりゃないだろ七千はいけるはずだよ。うーん、じゃあ時間ないし間をとって五千で妥協しよう。じゃあそれで」

「やあ私だ。ちょっと我が家を抵当にいれようと思うんだけど……

いやママには耳に入れずにこっそり欲しいんだ。すぐならどれだけ 回せる?」

「うんメルヴィンだよ。おげえええええええええ。いやすまん。いつもの吐血だ。ところで、前から気にしてた礼装をまとめて担保にしようと思うんだけど、いますぐならどれだけ融資できるかな......」

のべつまくなく、たてつづけに三件の相手に融資を決定してから、青年はするりとうなずいてこちらを振り向いたのである。

「はい。追加で一億三千万。とりあえずは戦えるかな?」

ぽかん、と自分は口を開けていた。青年のやった作業の意味は自分にも理解できたからだ。まるでちょっとコーヒーでも奢るよというぐらいの気軽さで、何もかもを譲り渡したのだと否が応でも理解させられた。

その言葉にうなずいてから、師匠はこちらへ振り向いた。

「ところで、グレイ。ライネスからカードを預かってないかな?」

「え? あ.....は、はい!」

失念していたものを師匠から指摘され、あわてて懐を探る。

「これ、ライネスさんから預かってたカードです!」

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗る前、ライネスから受け取ったのだった。いわく、オークションには実弾キャッシュが必要だろうからと、ほとんどねじこんでくる勢いで渡されたものだが、ここに来て本当に出番がやってきた。

カードをちらと見下ろして、師匠が嫌そうに片目をつむる。

「ああくそ、おそらく三千万がところは引っ張れるんだろう。あいつの立場なら、私の借金をこのあたりで積み増しておきたいだろうから、持たせてると思ったよ」

「じゃあ、足して追加が一億六千万か。三億六千万まではいけるね え」 計算したメルヴィンが、ふと背後を振り向いた。

個室の扉が開き、眼鏡をかけた癖っ毛の少年がそこから現れたの だ。

「先生」

「カウレスさん」

と、自分も名を呼んでしまった。何事かを師匠に命じられていた カウレスが、大きな鞄を持って、部屋に戻ってきたのである。

鞄の内側から覗いた品へ、自分の目は食い入った。

「.....あ<sub>ı</sub>

「うまくいったな」

と、師匠が囁き、いまだ緊張がほぐれぬ表情でカウレスもこくり とうなずいた。

「はい。菱理さんの部屋に置いたままだったから回収してきました。 先生の言った通り、鍵も何もかかってなかったですけど」

「トリシャさんの、首」

つい、まじまじとその品を見つめてしまう。

カウレスが持っていた鞄には、オルガマリーが発見した──虚数術式で隠されていたというトリシャの生首が入っていたのだ。菱理がオークションに参加している間、少年はその首を奪って隠れていたらしい。オークションが中断して、この部屋にやってくるまで間があいたのは、菱理が部屋に戻って騒ぎ出さないかとひやひやしていたからだろう。

結果としていえば、菱理は万魔眼球庫パンデモリウムに待機した ままで、事態が発覚することはなかったのだが。

「彼女にしてみれば、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフだって信用できないのだから、鍵をかける意味を感じてないんだろう。仮に誰かが忍び込んだところで、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの外まで持ち出すのは難しかろうしな。ましてやトリ

シャさんの首にいまさら証拠能力もない。魔眼のこともあるし、腐らないよう魔術はかけてるようだが、まあそれぐらいだ。.....だけど、こちらには重大な意味がある」

師匠がにんまりと笑った。

「ところで、あの、オークションはどうなったんですか。ちらっと 万魔眼球庫パンデモリウムを見たらいなかったんで、あわててこっ ちに戻ってきたんですけど」

「ああ、二億四千万ドルの時点で休憩が入った。ちなみに、今最高額のビッドをしているのは私だ」

「えええっ?!」

驚愕に飛び跳ねんばかりのカウレスから、師匠はそっと鞄を取り上げた。

膝にその鞄を置いて、器用に車椅子をターンさせる。

「先に準備するぞ、カウレス」

「っ、はい!」

部屋を出る師匠を、あわてて少年が追いかけていく。

自分とメルヴィンとで、取り残された格好になってしまった。

あまりに密度の高すぎる時間に圧倒されて、ゆるゆると首を振り、大きくため息をついてしまう。たかだか十数分が、今は何ヶ月も凝集しているように思えた。この休憩時間だって、ほかの陣営も融資やら何やらを探して、右往左往してるかもしれない。

だから、だろうか。

ちゃんとした理由にはなってないのだけど、取り残された自分は つい振り向いて、メルヴィンへと質問してしまった。

「なんで……そんなに、なさるんですか?」

そんなに師匠へ肩入れしてくれるのかと訊こうとして、しかし言葉にはならなかった。

それでも、言葉にならなかった分まで、青年は察してくれた。

「そりゃあ簡単だよ」

と、へらへら笑って、うなずいたのだ。

「いいかい。私は他人の堕落や失墜に愉楽を感じる、わりと人でなしだ。まあ時計塔で私を知ってる誰に訊いても、即座にうなずいてくれるだろうさ。その評判が極めて正しい、と太鼓判を押すしかないような生き方をしてるからね」

言ってから、メルヴィンはハンカチで口元を拭った。

また、うっすらと血が滲んでいた。

「普通の魔術師になれない身体だって分かるよりずっと前から、私はこんな風だった。だから、家庭環境で歪んだってわけじゃないな。きっと最初から人でなしなんだろうし、体質が分かった後の家の冷遇にしたところで、別段私自身には何の影響も与えなかった。うん、ほんの二、三回か何十回ぐらい死にかけただけのことで、そんなの魔術師なら誰だって経験してるようなことだ」

端々から窺える事情も、ただ遠い。魔術師なら誰だって経験してることでも、魔術師ならざる自分には想像するしかない。

それでも、この青年がひどく真摯に語っていることだけは分かっ た。

初めて会ったときからずっとふざけていたようなメルヴィンが、 少なくともこのことは真剣に話しているのだと、伝わってしまっ た。

「だけど、人でなしには人でなしの矜恃がある。それが愉しそうだと思えたなら、たとえ親だろうが自分自身だろうが、きっちりかっちり最後の最後までベットすべきだ。でなしに自分だけ安全圏にいるようじゃ、そいつはもはや人でなしでさえなくて、ただの卑チ怯キ者ンに堕ちるだけだよ」

静かに言って、真っ白な青年もまた師匠の後を追った。

万魔眼球庫パンデモリウムが──戦いの場が、彼を待っているのであった。

「一では、二億四千万から再開します」

オークショナーの声は、もはや冷静さを取り戻していた。

参加者については意外でも、金銭の多寡でいまさら我を失ったりはしないらしい。自分やカウレスも含めて、さきほどの全員が戻ったのを確認して、ハンマーを打ち鳴らす音で再開を宣言する。

「二億五千万」

「二億六千万」

すぐさま、桁外れの数字が列車内を飛び交った。

最初が菱理、次がメルヴィンだった。一度はパドルを下ろしたメルヴィンの復活に、菱理は軽く目を細めた。ひとまず師匠が天文学的な借金をさらに負わされる事態は免れた、と安堵する気にもなれない。

ばかりか、もうひとりが、オークションの戦線に舞い戻ったのだ。

「二億八千万」

イヴェットである。

休憩時間中に、メルヴィンのような追加融資を受けていたのだろうか。一千万ずつのレイズではらちが明かないと見てか、ツインテールの少女は一気に二千万を乗せた。パドルをあげたまま、可憐な唇には会心の笑みが浮かんでいた。

しかし、

「三億」

「三億二千万」

菱理とメルヴィンのふたりも、それに追随したのだ。

二千万ずつの上乗せ。三億に乗った額面に、もはや居並ぶ魔術師 たちの使い魔は呻きさえあげられない。常連の彼らでさえ見たこと のない世界に、オークションは突入していたのだった。

「三億三千万」

「三億四千万」

「三億五千万」

続いて、レイズが一千万ごとに戻る。イヴェット、菱理、メルヴィンの順。

一言ずつが命を削っているかのようだ。魔術の原則に等価交換なんて言葉があるが、こんな額面と等価になる魔術が、一体どれだけあるだろう。当たり前に増えていく一千万ドルという数字は、一体どれだけの人間が一生を捧げれば達成できる額なのか。

#### 「三億六千万」

ついに──わずか数分で、その金額にたどり着いてしまった。

メルヴィンが新たに融資を取り付けた金額の、上限。

一瞬だけ、世界は静止した。

しかし、続く数秒で、

# 「三億七千万」

これは、菱理がパドルをあげたまま宣言したのだ。

ぶるり、と隣の師匠が拳を握りしめたのが分かった。動揺を外に漏らさぬよう、師匠も表情に気をつけているが、そんなのは稚拙なポーカーフェイスだって、今の自分は知ってしまっている。師匠の本来はどうしようもなく情熱的で、衝動的で、我慢がきかない性質だ。いくら訓練を重ねようと根っこの部分が変わるわけじゃない。

その師匠が、今必死に動揺を押しとどめている。

ちら、とメルヴィンの視線がこちらへ動くのを感じた。もういい

か、という問いかけに、しかし師匠は反応しない。すればここが限 界だと気取られるからだ。

だから、なのか。

メルヴィンが、顔をあげてビッドする。

「四億」

「四億一千万」

思わず、あ、と声が出そうになった。

続けてビッドしたイヴェットの四億一千万を受けて、菱理がパドルを下ろしたのである。三人によってつりあがっていたオークションは、ついにその一角が崩れ、イヴェットとメルヴィンのふたりだけのレースとなった。

(イヴェットさんと.....?)

正直、予想しない事態だった。誰が降りるとしても、まず法政科 の菱理だけは残るだろうと、なんとなく考えていた。

まさか『宝石』の魔眼を巡って、このふたりが争うことになろうとは。

しばらく、動きが止まった。

「四億一千万で、いいですか?」

改めて、オークショナーが確認する。

二度は言わせず、あがったままのパドルから、メルヴィンが宣言する。とっくに限界は超えているのに、そのはずなのに、なおもビッドすることをやめない。

「四億二千万」

「四億三千万」

即座に、イヴェットが応じた。

さきほど、彼女が一度はパドルを下げた額の、倍近くに達してい

るのに。

(レーマン家ってそんな資産がある.....?)

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの常連であることを考えれば、命知らずの冷やかしなどとは思えない。だからといって、法政科や三大貴族の分家と張り合うほどの資産家だなんて聞いたことはなかった。もちろん、自分は時計塔内部にまるで詳しくないのだから、実はそうだったとしてもおかしくないのだが、彼女に対する周囲の反応といまいち一致しない。だとすれば……一体どういうことなのだろう?

(.....誰かが、イヴェットに融資した?)

― 『おそらく、向こうもこの高騰は予想してなかったはずだ』

師匠の言葉が、脳裏をよぎった。

向こうとは、イヴェットのことだったのか。

それとも、彼女に融資しているもっと別の―

「四億四千万」

「四億五千万」

「四億六千万」

メルヴィン、イヴェット、再びメルヴィン。

「五億」

今度こそ。

その数字が決定打となったか。

さらなる大台に乗ったイヴェットのビッドに……メルヴィンのパドルが、下りる。

そのときだった。

(.....え?)

気のせいだろうか。一瞬、列車が揺れたように感じた。

刹那、すぐ隣で我が意を得たりというべく、師匠の表情が息を吹き返したのだ。

堂々と、その手が上がった。

「待っていただきたい」

と、師匠がオークション全体に向かって告げたのであった。

\*

「二度の休憩は認めません」

と、オークショナーがかぶりを振った。

厳然たる態度は、一度目のそれもイレギュラーだったのだからと 伝えていた。

しかし、

「休憩じゃない。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンそのものにか かわる提言だ」

師匠の言葉に、オークショナーの気配はかすかに揺れる。

それが何らかの返答となる前に、参加者の座席からひとりの女性が立ち上がったのだ。

「あら、どうしましたのロード・エルメロイII世。私の推理に不服でも?」

どうしてだろう。

首を傾げた法政科の女魔術師は、ほんの少し嬉しそうに見えたのだ。まるで、ずっと遅刻していたダンスパートナーが、やっと現れたかのように。

「ああ、そうならよかったんだが」

と、師匠はかぶりを振った。

「ロジックとしては穴だらけでも、君の推理そのものに間違いはない。少なくとも、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに起こった事実としては、おおよそ確かなことだろう。だからこそ、まずは例のものから見ていただきたい」

と、師匠が切り出した。

一部の使い魔たちは、何事かを囁きあっていた。そもそも、彼らにしてみれば事件自体が初耳だ。突然オークションが中断したあげく、法政科と師匠とで推理がどうとか言い出されても、理解不能もいいところだろう。

「カウレス、出してくれ」

「.....っ、はい!」

一度唾をのみこんだカウレスが、例の鞄を持って、車両の中央へ と踏み出した。

万魔眼球庫パンデモリウムで堂々とさらけ出されたのは、もちろんトリシャの生首。否が応でも列車で起きた事態を理解させられた使い魔たちが一様に騒ぎだし、オルガマリーが茫然と立ち上がった。

菱理の、眼鏡の底の目が冷えた。

「あなた……」

「事態を解決するのに必要なのでね。勝手ながら持ち出させても らった。別段君の持ち物というわけでもないのだから問題ないだろ う? ああ、不法侵入のあたりは勘弁していただきたい」 しれっと言って、師匠は天井の使い魔たちへと視線をあげた。

「事件を知らぬ向きにも、いささかの時間をいただくことをお許し 願いたい。現ノ代ー魔リ術ッ科ジの君主ロードとしてお願いする」

言い放つと、使い魔たちの気配は一瞬波打った。

しかし、抗議する者はいなかった。成り上がりとはいえ、君主 ロードと法政科の渡り合いならばどのような事態でも一聴に値する と、そう考えたのだろう。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのス タッフも、その様子に強固な反論の意思はなくしたらしい。

「ありがたい。皆様、貴重な時間を感謝いたします」

と、師匠はうなずいた。

「では、七年前の事件から整理させてほしい。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで起きたトリシャ・フェローズの殺人事件と酷似した──法政科が隠蔽していたという連続殺人事件だ」

簡単におさらいしたのは、どうやら使い魔で見聞きしている外部 の魔術師たちへの説明も兼ねているようだった。

「当時の事件には謎に覆われた部分がいくつもあるわけだが……共 通点として、全員の首がはねられて頭部がなくなっていた。では、 この状況から考えられることはなんだね?」

# 「え.....」

車両中の視線が集中する中、ゆっくりと師匠は結論を言った。

「死んでいる、だよ」

ぽかん、とした空気が列車を流れた。

天使が通り過ぎたなんて形容されるような、つかのまの沈黙。

「おいおい君主ロード、何を当たり前なこと言ってるんだ。なんだ とんちか? それともマザーグースか?」

傍観していたジャンマリオが、いつもの大げさなジェスチャーで 肩をそびやかす。 しかし、菱理は違っていた。

何かの香を纏わせた──後から師匠に聞いたことによれば、極東には香を薫たき染しめる習慣があるらしい──袖で口元を覆い、短く応じた。

「それは、現代社会の問題ね」

「その通り。現代では誰か人間がいなくなれば、どうしても社会が 反応する。欠落を放っておくほど無関心ではいられないんだ。昔な ら人のひとりがいなくなった程度は、妖精にかどわかされたです む。だが、現代でそんなオチはない。仮に見つからなかったという 答えで終わるにせよ、徹底的に捜索されるさ。何しろ情報化は徹底 され、今後も飛躍的に向上していく一方だ。誰もが情報を発信でき る時代だよ。たまたま失踪した人間の周囲に、そんなことを気にす る相手が誰もいないこともあるだろうが、それはただの偶然でしか ない。……だが、これだけはっきり死体が見つかってしまえば、犯 人はともかく、被害者の捜索なんて誰も考えないだろう?」

「あ.....」

やっと、師匠の語る内容が理解できた。

しかし、やっぱり、それに何の意味があるのだろう?

自分が首を傾げたところで、師匠はさらに言葉を続ける。

「殺される前に、私はトリシャ・フェローズと話していたが、とある極東の儀式に詳しすぎたように思う」

聖杯戦争という名前を、わざと伏せた。

使い魔の何匹かは疑念の気配を浮かべたが、極東という段階であまり興味をそそられなかったらしい。以前師匠も言っていたが、聖 杯戦争というのはひどくマイナーな儀式なのだろう。

「今考えてみると、これは自分が死んだときのためのヒントだったんだろう。何事もなければ単なる世間話ですむ。事件が起こったなら、手がかりとまではいかずとも、そのきっかけとなる。彼女の未来視は予測。測定と違って悲劇的な未来も避けようはあるが、そこに至る可能性は視ていたはずだ」

場の反応を窺いつつ、

「同時に、自分の首を隠したのはふたつの意味があった」

と、師匠が二本の指を立てる。

まず、中指を折った。

「ひとつは、自分の死が七年前の事件と関係しているというダイイングメッセージ。虚数魔術によってつくられた次元の空隙では、時間の経過が意味をなくす。一言ぐらいなら言い残せるかもしれないと、そういう心算はあったはずだ」

こちらは分かりやすい理由だった。なにしろ、そのダイイング メッセージでカラボーが名指しされたからこそ、カラボーが犯人と 目されたのだ。

なんとか吞み込んだところで、師匠が人差し指を折った。

「そして、もうひとつは自分の魔眼を利用されないためだよ」

「魔眼を、利用されないため?」

オルガマリーが、はっと何かに気づいたように、繰り返した。

「……つまり、あなたは七年前の被害者が」

「ああ、七年前の事件の被害者は──その全員かどうかは知らない が、魔眼の所持者だったはずだ」

師匠の結論に、列車は再びオークションと同様の熱を巻き起こした。魔眼保持者連続殺人事件という恐るべき過去をつまびらかにされて、魔術師たち全員の関心が強引にかき立てられたのだ。

対して、オルガマリーは別の方向から切り込んだ。

「ですけど、魔眼を摘出して、他人に移植できるのはこの魔眼蒐集 列車レール・ツェッペリンだけでしょう。ほかでも不可能ではない にせよ、成功確率が低すぎます。魔眼を利用したと言うのなら、あ なたはこの列車が七年前から共犯だったと言いたいんですか」

「まさか」

と、師匠がかぶりを振る。

「だから、犯人は魔眼だけでなく頭部そのものを奪ったんだろう」 その意味は、すぐには理解されなかった。

困惑と疑念が車両内に入り乱れ、しばらくしてようやっと、オル ガマリーの低い呻きへと変じたのである。

「まさか……あなたは……その頭部が……」

「そうだ。被害者から持って行かれた頭部は、生きていた」

生きていた、と。

信じがたい言葉を、師匠は口にした。

「別に難しい話じゃない。脳と眼球とそれをつなぐ経路さえ確保できていれば、魔眼は発動できるんだ。なにしろ魔眼は独立した魔術回路を持っている。手足も内臓も神経もいらないだろう。むろん血液などを確保するための術具や魔術は必要だが、犬や猿の頭部を切り離して人工心肺で生いき存ながらえさせるぐらいは、数十年前の科学だってやってのける。優れた魔術師ならもっと気軽にやりおおせるだろう」

淡々と続く説明を、誰もが信じられない顔で受け止めていた。

万魔眼球庫パンデモリウム―その壁に据えられた無数の魔眼が、 突然すべて笑い出すような錯覚に襲われた。それだけの凄絶さが、 今の推理にはこもっていた。今すぐ座り込んで吐き出したくてたま らない気分だった。

「つまり、被害者の頭部だけ生かしておけば、魔眼は使用可能なんだ。これなら逃げられることもなければ、反抗されることもまずない。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを使う必要もなく、かつ複数の魔眼を好きに使わせられる。魔術師としてすら非人道的な手口だがね。ああ、これだけの魔眼が揃えば、極東の儀式の調査をすることなど造作もなかったろう」

Г......

誰もが押し黙る。

いくら魔術師とはいえ、そんな発想を誰が持てただろう。首をは ねたのが、死んだと思わせて頭部だけで利用するためだなどと、そ んな考えに辿りつけるだろう。

しかも、それが聖杯戦争を調べるためだったとは?

「待って」

と、オルガマリーが制止した。

「あなた、いまの言い分だと、トリシャは」

「そうだ。トリシャ・フェローズは七年前の事件の関係者だ。それ も犯人側の」

愕然と、オルガマリーは言葉を失った。

隣で聞いていた自分さえ衝撃を免れなかった。だってそうだ。単に事件の被害者だと思っていた相手が、もっと凄惨な過去の事件で、犯人の側に関わっていただなんて、どうして信じられるだろう。

弱々しくオルガマリーが椅子に座り込む。

「だったら、トリシャは……なんで……」

少女は否定しなかった。父親が話していたという聖杯戦争の知識がそれを妨げていた。でなければ、どうやって父親は大聖杯が使い物にならないなどの情報を集めたのだろうと。

だが、

「思い違いがあるようだ」

と、師匠は優しく言ったのだ。

「犯人側の関係者だが、トリシャや君の父親が犯人そのものとは言ってない。むしろ、彼女は七年前の犯人を知りたがっていたんだろう」

「どういう、こと……?」

顔をあげたオルガマリーに、師匠は諭すように話す。

「天体科アニムスフィアはおそらく儀式を調査するために、外部の協力者に依頼していた。ただ手段までは知らされてなかったはずだ。君主ロードである父上は薄々気づいてたかもしれないが、その内実まで詳しく知らされていたなら、トリシャさんがいまさらになってカラボー氏と接触しようなどと思わなかったろう」

「カラボーと」

菱理が、その名を繰り返した。

「さっき、私の推理はおおよそ正解だとか言ってましたわね。つまり、七年前の事件も、カラボー・フランプトンが犯人だったと言いたいわけでしょうか? 聖堂教会側の捜査員が犯人だったというなら、それは迷宮入りもするでしょうけれど」

「ある意味で。おそらくはこれと似た種類の礼装によって」

自らの眼鏡に、師匠が触れたのだ。

「魔眼殺し……?」

「もともと、魔眼は純粋に魔術として論じた場合極めて原始的なものだ。なにしろ人類にとって最古の魔術だからな。ゆえに神秘としては強大だが、いくつもの対抗策が世界中で練られている。たとえば、これもそのひとつだ」

言って、懐から小さな品を出した。

オルガマリーのところで発見された、目玉のアクセサリーめいた 代物だった。青いガラスの中心に目玉っぽい模様が描かれた、例の 品である。

「ナザール・ボンジュウというトルコのお守りでね。トリシャさん が自分の首と一緒に、虚数術式で隠蔽していたものだよ」

と、師匠は菱理を見返した。

あなたが、推理の際公にしなかったものだ、とつきつけるよう

に。

「魔眼を見返す魔眼。最も分かりやすい対策だろう。似た感じで、インドや東洋のあたりではとある魔術考察が生まれている。――これによると、万物には視られる力というものがあるらしい」

「視られる力……ですか」

ぴんと来なかったので、つい自分も口を挟んでしまった。

「ああ、視られる力があるからこそ、人はモノを見ることができるという思想だ。科学的に喩えるならば、光を反射する能力と言ってもいいだろう。天使や仏像が光背ハイロウを持っているのは、こうした概念による。より強く視られる力を保持しているからこそ、彼らは人類を導く存在たりえる。もっと単純に、オーラとかカリスマとか言うこともあるんだろう。強引にでも視線を引き付ける力というわけだ」

見ること、見られること。

視る力、視られる力。

あたりまえと思っていたことが、魔術の名のもとに反転する。ね じ曲がる。

「この場合、視られる力は、魔眼殺しのレンズのように直接魔眼の効用を阻止する礼装に比べれば、単純な防御効果では劣る。だが、それでもなお、魔眼にとって天敵のようなものだ。なにしろ、本来意図しない情報を意識しない内に叩きつけられるんだからな。この情報にはいろんな応用法がある」

さきほどのナザール・ボンジュウを手にして、師匠は一定のリズムで回して見せた。

くら、と目眩がした。

額のあたりを押さえた自分にうなずき、師匠が言葉を添える。

「……たとえば、催眠術。サブリミナル効果なんかもその内だろう。現代科学では否定されがちな題材だが、魔術の分野では初期のメスメリズムとて有効だ。目の前で振り子を使ったりするのも、視られる力の応用と言えるだろう」

メスメリズムは、確か現代の催眠術のルーツとなる体系だったは ずだ。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジの講義でも、聞いたことがあった。なんでも、天体から放出される『流体』などが万病のもとであり、だから動物磁気をもって患者を治療するのだとか、なんともいかがわしい解説をしていたオカルトだが、その実体は相手の無意識に働きかける催眠術であったのだという。

「視る力が強ければ強いほど、視られる力によって無意識のうちに誘導される。暗示は魔術では初歩的なものだが、これらの組み合わせによって、初歩とは断じきれない効果を持つことになる。強大な魔眼の持ち主なればこそ、この視られる力には逆らいがたい。ましてや自分の視る力について自覚が足りてないような相手ならば、驚くほどたやすく術中に墜とすことが可能だろう」

「カラボーが催眠で操られていたと言いたいのかしら?」

いぶかしげに、菱理が訊いた。

「あなたの推理とも符合してるんじゃないか? 動機がないと話したとき、あなたが言ったのは魔眼が暴走でもしたんじゃないかと話しただろう。カラボー氏が何らかの要因で意識を奪われた可能性については、むしろ肯定的だったはずだ」

あのときの菱理の言葉はけして肯定的なものではなく、師匠の指摘に対するつじつま合わせだったはずだが、ここにきて奇怪な一致を示していた。

師匠が、周囲を見回す。

自分の言葉がどう浸透してるのか確認しつつ、慎重に続きを紡ぐ。

「おそらく、トリシャ・フェローズはカラボーと魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで出会うことは分かっていたはずだ。その未来視によって彼と出会うことを予測するのはさして難しくないからな。

ただ、七年前の事件を仕掛けた相手と、直接出会う未来は視えなかった。だからこそ、カラボーを使って探ろうと考えていたんだろう。暗示によって操られたという可能性も考慮して、さきほどのナザール・ボンジュウなどの礼装を整え、彼の潜在意識に潜り込む準

備をしていた」

ひどくゆっくりと、師匠は説明した。

やるせないため息が、車椅子からこぼれた。

「それこそが、彼女の失敗だった」

と、断じたのだ。

「おそらく、真犯人はトリシャがそうするだろうと考えていた。しかし、彼女に直接手を打つのは難しいとも推測していた。なにしろ相手は未来視だ。ほとんどの襲撃は予測されてしまう。......しかし、時間軸を越えて過去からやってくる刃は未来視の死角だ」

時間軸をねじまげて現れる死の斬線。

過去からやってくる攻撃は、未来視をもってしても回避不能だったと、師匠は言う。なんとなくその理屈は分かる。未来視は今より 先を視るものだ。過去から泡のごとく浮かび上がる死の影なんて、 間違いなくその対象外だろう。

「だから、トリシャに尋問されるより早く、カラボーを操った。ああ、実際のところ、トリシャ・フェローズはほかにも魔眼所有者ホルダー用の礼装を持ち込んでいたようだが、虚数術式で隠蔽されたこのナザール・ボンジュウぐらいしか見つからなかったのは、真犯人によって手際よく廃棄されていたためだろう。いささか珍しい使用法ではあるが、その手の知識を持つ魔術師なら、視られる力の発想へとつなげるのは難しくない」

## ( **b**.....)

自分がトリシャと初めて会ったときに見た、卑猥な品はそういうものだったのか。

たとえば、魔眼に対して醜いものを見せつけるのが、対処策のひとつなどとは聞いたことがある気がする。あれも視る力に対して、不快な情報を叩きつけることで呪詛を防止するといった類なのだろう。

「それでも、トリシャさんは死に至るほんの一瞬前には気づいた。 過去からの刃は視えずとも、自分が死ぬというその事実だけは視た んだろう。一小節ワンカウントの虚数術式を発動する程度の時間しかなくてもね。命を落とすのは免れずとも、後に続く者にヒントをくれた。それはきっと、彼女も七年前の事件をそのままにしておきたくはなかったからだ。

オルガマリー、君に解錠できるよう次元ポケットを調整していたなら、きっと彼女は、君にだけは真実を知って欲しかったのだろう。知るだけで危険に晒されるかもしれない真実でも、君ならきっとなんとかしてくれると信頼していたんだろう」

しみじみと、師匠が囁いた。

つかのま、万魔眼球庫パンデモリウムに重い静寂が垂れ込めた。 胸元で拳を握りしめて、オルガマリーは肩を震わせていた。気づか なかった従者の思いと選択は、今になって主人たる少女に届けられ たのだ。

「.....お馬鹿なマリー。しゃんとなさい」

ぼそり、と少女が呟いた。

どうして、今そんな言葉が出るのかは分からない。だけど、トリシャとオルガマリーにとっては重要な一言だったんだろうと思えた。

そして、

「さっさと済ませてほしいんですけど? もうオークション終わる ところなんですよ」

と、イヴェットが唇をとがらせる。

不満げなのは、自分こそがかの『宝石』の魔眼を受け取る自信が あったためだろう。実際さっきのオークションの様子からすれば、 彼女が落札する寸前なのは確かだった。

(もしかして.....)

一瞬、疑念が頭をよぎった。

(じゃあ.....もしかして、イヴェットさんが.....)

想像がばくばくと心臓を高鳴らせる。

嫌な汗が噴き出して止まらない。座っていてもぐるぐると三半規管を攪拌されてしまうよう。この列車が捻れて回転してるような錯覚さえ感じていた。

そんな事情は関係なく、なおイヴェットは言い募る。

「だいたい、結局のところ、先生は誰がその真犯人って言いたいわけです? これ見よがしにトリシャさんの首持ってきたけれど、今の推理とどういう関係があったのよ」

「……ああ、それなら、こういうことだよ」

「え? <sub>1</sub>

きょとん、とイヴェットが眉を寄せたときだった。

白い光が、車両に走った。

カウレスが手に持っていた生首から、突然光の渦が走り、まるで鎖のように少年の四肢を縛りつつ、光の外界と内側とを断絶せしめたのである。

「先……生……っ?!」

「呪縛用の魔術だが、大したものだな、ミス化野。私じゃ到底こうはいかない」

その言葉に、目を剝いた。

ばかりか、

「ありがとうございます」

菱理も、肯定するように礼を言ったのだ。

さきほどまで、推理を通して対立していたはずのふたりは、ひどく似つかわしく互いを見つめ合っていた。

「使い魔たちの五感も封じてくれたのか。そちらは頼まなかったん だが」 「有象無象にあまり噂されるのは好みませんので」

と、菱理は答えた。

天井近くで見守っていた使い魔たちもまた、今の光を受けて硬直していた。おそらくはサブで走らせていた術式なのだろうが、魔術師たちと違ってさほど発達した魔術回路を持たぬ使い魔は、その程度の術式でも十分封じられたらしい。

光の鎖に縛られたカウレスが、喘ぐように言う。

「先生、どういう、ことですか」

「見ての通りだ。ミス化野と共謀して、君を陥れたんだよ」 いともたやすく、師匠は告白した。

そして、自らの弟子に──カウレス・フォルヴェッジに、宣告する。

「──お前が、カラボー・フランプトンを操り、トリシャ・フェローズを殺害せしめた真犯人だ」



師匠の告発は、はっきりと万魔眼球庫パンデモリウムに響いた。

突然弟子を告発した君主ロードに、オークションに参加していた 魔術師たちは浮き足立ち、列車側のスタッフも何が起きているのか 分からず、ただ成り行きを見つめるばかり。五感を奪われた使い魔 たちは、まるで石像のごとく硬直したままだった。

「そん、な……師匠……」

自分も到底受け容れられず、立ち上がろうとした。

そのとき、密やかに歩いてきた誰かが、後ろから自分の腕を引っ 張ったのだ。

「駄目だ、近づかないで。グレイさん」

## (え?)

茫然とした。いつのまに万魔眼球庫パンデモリウムに入っていたのか、自分も気づかなかったからだ。意識が外れたのはさきほどの術式が発動した瞬間ぐらいだから、おそらくタイミングを合わせたのだろうが……自分はまったく別のことに気を奪われていた。

だって、自分の手を摑んだ人物は─

\*

「先生、何をそんな―」

光の鎖に縛られたカウレスは、淡く笑った。

冗談でしょうと言いたげな表情で、しかし師匠の言葉も結界もび

くともしないのを確認すると、困ったようにかぶりを振った。

「え、と、本気なんですね?」

「もちろんだ」

「どうしても、俺を犯人だということにしたいみたいですが、それだけじゃあ、ここでは通らないでしょう。そちらも分かっていますよね?」

「その通りだ。魔術師だけの場なら法政科の強権だけでも通るが、 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは死徒の領域。ゆえに推測だけ ではなく、列車側を納得させられるだけの物証が必要だった。たと えば、ミス化野がカラボーの魔眼の能力を看破するのに、生首のダ イイングメッセージや支配人代行の発言を待っていたようにね」

認めて、師匠は背後を振り向く。

「だから、私も彼を待っていたんだ」

私のすぐ後ろだ。腕を引っ張って、止めてくれた相手。

「間に合ってくれたな」

「さすがに苦労しましたよ、先生」

癖っ毛を揺らし、ずれた眼鏡を直して、少年は苦笑した。

その笑みのカタチまで、拘束された相手と生き写しであった。どうしてこんなことが起こっているのか、自分の脳では到底把握することができなかった。

「俺がここについた以上、少なくとも君の偽証については決定的だろう」

と、彼は拘束された相手に、言ってのける。

それはそうだ。たまりかねて、座り込んでいたオルガマリーがついにその名を呼んだ。

「.....カウレス・フォルヴェッジ」

ああ、新たに現れた少年もまた、カウレス本人だったのだ。

拍手が巻き起こった。

こんな状況にあって、なおも高らかに、愉しげに。

「やってくれたなウェイバー!」

と、いまだ拍手を続けたまま、メルヴィンが叫んだのである。

朗らかに笑い、真っ白な青年は心底の賛辞を師匠へと向けていた。ぎりぎりまでオークションで争っていた調律師は、あらゆる呪縛から解き放たれて、凄まじく自由に快かい哉さいをあげていた。

「なるほどこれは愉快だ! 痛快だ! まるで何がなんだか分からないぞ! 危うく身代を持ち崩しかけた甲斐は十分にあったが、一体全体どうしたことだ! 君は一体どんな魔法を使ったのかな!」

「仮にも魔術師が、簡単に魔法とか言うな」

謎がまた謎を呼ぶ奇妙な光景を前にして、師匠は苦々しく唇を歪めた。

「実際危なかったんだ。オークションの最中なら、ライネスの接近に気づかれることはないと思っていたが、同時に時間との争いも強いられた。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションは絶対だ。一度落札が決まってしまえば、たとえ後からどのような違反が露呈しようとも、その約定は成立してしまう。さすがにそんなことになっては、カラボー氏にもトリシャさんにも申し訳がたたない。何より、私の誇りが許さない」

懐からシガーケースを出して、唇に咥える。

いつもならマッチでゆっくりと炙るところだろうに、今回ばかり は指を打ち鳴らして、火をつけていた。いわく、師匠にとっては発 火というよりも火打ち石の要領らしいが、いつも通りマッチを使う だけの心の余裕も失われていたためかもしれない。

車椅子に深く座り、煙を吐き出しながら、

「イヴェットに融資を出していたのは、お前だろう」

と、師匠は指摘した。

#### 「認めましょう」

と、対するカウレスが──いいやカウレスの姿をしていた少年が、 肯定する。

「代わりに、こちらからもお訊きしたい。どうやって、本物のカウレスをこの場に? 正直、ギリギリで露見したとしても、電話や通信魔術ぐらいなら誤魔化せると思っていたのですが」

「そりゃあ私が頑張ったからさ」

ぎい、と再び万魔眼球庫パンデモリウムの扉が開いた。

現れたのは、見慣れた少女であった。金髪の狭間で、爛々と瞳が燃えている。いまは魔眼の色を目薬で誤魔化す必要も感じてないのだろう。

「兄思いの義妹が、遠路はるばる、ひたすら飛行魔術で飛んできたからだって、この美しい事実について是非伝えて欲しいな。我が兄よ」

古びた箒ほうきを手にして、ライネスが肩をそびやかす。

しかし、その目の下にはべったりとくまが張り付いていた。隠しようもない疲労に、ぐいと頰のあたりを擦って、上擦る声で強がってみせる。

「私だって女魔術師の端くれだからね。 
箒と魔女の軟膏とを用意すれば、がっつり飛んでこれるさ」

「飛行魔術? でも、それって.....確かすごく難しいんじゃ」

師匠が言っていたのを、思い出す。

いかに魔術とはいえ、人単体での飛行は至難の業だと。女魔術師がいくつかの条件を整えさえすれば比較的簡単にはなるが、逆にそのためのトランス状態にあっては、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンまで飛んでくるのはほとんど不可能だとか。

しかし、それを聞いたカウレスの偽者は、とある単語を口にした のだ。 「さては、トーコ・トラベルか」

「とーこ、とらべる?」

どこかで聞いたようなその言葉にきょとんとしていると、師匠が 片目をつむった。

「かなりインチキくさいやりかたでね。あらかじめ飛行先を設定して、超長距離のゴムでも引っ張るみたいに、術式を成立させるんだ。なにしろ目的地から引っ張られ続けてるんだから、トランス状態だろうがなんだろうが、魔力さえ安定させれば確実に成功するさ。もっとも、空を飛ぶなんて幻想から思い浮かぶような憧れや自由さとはほど遠い。ああ、あの冠位魔術師・蒼崎橙子が考えつきそうなイカサマだよ」

Г.......

まさか、再びあの女魔術師の名を、こんな場面で聞くとは。

ということは、オークション終盤でかすかに感じた揺れは、 ひょっとして彼女たちが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに激突 した衝撃だったのだろうか。

「あ。設定用の目印は私が持ってます!」

剽ひょう軽きんな声で、メルヴィンが手をあげたのだ。

「いや、ひょっとしたらライネスちゃんが追いかけてくるかなーと 思ってね? 招待状にはふたりの同行者まで許可すると書いてるん だから、かまわないよね?」

おどけた青年がきょろきょろとスタッフを見やるが、ひとまず魔 眼蒐集列車レール・ツェッペリンと激突したことも含めて、不服を 申し立てる者はいないようだった。

それを確認してから、師匠が口を開いた。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは三泊四日で霧の国を一周して、ロンドンに戻ってくるって言っていただろう。アクシデントがあったとはいえ、三日目のオークションではロンドンまで残り半日ほどの距離に近づいてるのが道理だ。まして、オークションがぎりぎりまで引き延ばされたならなおさらな」

「いやはや話を聞いたときは驚いたぞ」

ライネスがいつもの調子で、ふふんと鼻を鳴らす。

「突然携帯に連絡が入って、こっちに本物のカウレスがいるはずだから捜せとか言われてね。スヴィンに戻ってもらって、あわてて捜させたんだ。さすがにあいつの鼻は優秀で、廃墟で眠っているカウレスを見つけるまで小一時間とかからなかった」

「俺からすると、自宅で寝ていたはずがいつのまにか廃ビルで寝かせられていて、何かのイリュージョンにでも使われたのかと思いましたが。しかも、眠っている間に数日が消し飛んでいたなんて」

歯ぎしりしたカウレスが、偽者を睨みつける。

話を聞いて、ようやくおぼろげに事態が理解できてきた。列車に乗る以前から、カウレスと偽者が入れ替わっていたこと。気づいた師匠が、急遽ライネスを通じて、本物のカウレスを呼びだしたということ。

だけど、あまりにも目まぐるしい。

次から次へと詰め込まれる情報を理解するので、精一杯だった。

「─なるほど、スヴィンくんが見つけたのか」

と、結界の内側で、偽者が頰を搔いた。

「彼だけは警戒してたんだよね。カウレス・フォルヴェッジとロード・エルメロイII世の師弟関係はまだ数週間かそこらだから、おそらく誤魔化せるだろうと踏んでいたんだけど、彼の鼻だけは難しい。第一科ミスティールの特別講義でしばらく外しているというから、これはチャンスだと思ったんだけど」

ひどく穏やかに、偽者は告白した。

「じゃあ、ミス化野と手を組んだのは、偽者だってバレたときです ね」

「ああ。ライネスとの連絡で、君が偽者だと分かっても、私には安全に排除する能力がなかった。グレイやメルヴィンに話せば態度で バレただろう。スムーズに騙せるのはミス化野をおいてない。呪縛 用の魔術を密かに掛けておくのなら、トリシャさんの首が一番だった。もっとも、オークションで協調する気はないとも言われたので、ずいぶん成り行きにハラハラさせられたがね」

きっと、カラボーとの話し合いで、何かに気づいたときだ。

別の使い方があると呟き、先だって部屋から出て行った際、師匠は追っていった自分に待機するよう話して、ひとりでどこかに移動していったのだ。それから数分もせずに戻り、オルガマリーの部屋へと赴いたのだが、まさかそんな交渉をまとめていたとは。

あーあ、と天井に息を吐き出してから、偽者はもうひとつ尋ねる。

「ところで、どこで気づきました? 本物のカウレス・フォル ヴェッジをおおよそ完璧に模倣トレースしたつもりだったんです が」

「見事な模倣だった。おそらくは降霊術の応用か。憑依経験の鮮やかさに舌を巻いたとも。私の認識した範囲では、ほぼ一言一句違わず、本物のカウレス・フォルヴェッジも同じ言葉を口にして、同じ行動を取っていただろう。......ただ一点を除いて」

人差し指をあげて、車椅子に座った師匠は、軽く自分の胸を押さ えた。

「私の治療だ」

「む。今のカウレス・フォルヴェッジの技術に合わせた自信はあったのに」

不満げに唇を尖らせた少年に、師匠はいつもの講義みたいにうなずいた。

「原始電池については完璧だった。私の指導の癖までも見極めた施術だったよ。だが、カウレスはまだ薬草術についての経験が浅い。 秘薬パナケアとはいえもとは植物だ。電気をあてられれば変質する。だが、彼の技ぎ倆りょうからすればちょっとやりすぎなぐらいに、パナケアと原始電池の双方が活用されていた」

「.....あちゃあ」

大げさに、少年がのけぞった。

「いやあ、さすがに焦ったんですよ。ここで先生に死なれる予定はなかった。あのサーヴァントがあそこまでやるとは思わなかったんです。いくらなんでも一派の君主ロードが消えてしまっては、今後に支障が出過ぎてしまう。ううん。カウレスの技術でも八割方は助かったけれど、二割は見過ごすには大きすぎる確率でしょう?」

サーヴァントという言葉が出たとき、かすかに師匠の吐息が震えたのを、自分は感じた。その動揺も吞み込むみたいにして、師匠は揺るぎない口調で続けた。

「本物のカウレスと入れ替わったのは、列車に乗りたいと私に申し 込んだときか」

「ああいや、当人がいるんだからそちらに確認していただいてもいいですが、カウレスが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗りたがっていたのは本当ですよ。僕が妨害しなければ、多分同じことを言ってたんじゃないかと。でないと、あなただって誤魔化されないでしょう? いや、つきあいの長い弟子だと、さすがにぼろが出たでしょうし、カウレスは入れ替わるのに都合がよかったんですよ。まあ、その場合の手も用意はしてたんですが」

偽者のカウレスは、はにかむように笑う。

正体が露見するまでとまるで変わらないのに、まるで違った笑みに見えた。その笑みがたまらなくなって、つい自分も口を挟んでしまった。

「姉の話をしていたのは......どういうことなんです?」

「ああ、あれも全部本当ですよ。人間、誰か他人の性格を想像するときは、表情やら過去やらやりとりやら、適当に得た情報のかけらをつなぎあわせて、『なるほどだからこの人はこんななんだな』なんて、勝手に想像するものでしょう。あれだけの情報が揃っているからこそ、僕がカウレスであることに疑いがもたれにくくなるわけで」

言うとおりだ。姉の話が真に迫っていて、魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリンに乗り込む動機が揃っていたからこそ、疑いもしな かった。 今、本物のカウレス・フォルヴェッジは、偽者の告白に身を震わせている。

姉の話、というのに反応したようだった。ひどく申し訳なかった。彼にとってとても大切なプライバシーを、時計塔にやってきた理由のハジマリを、自分は確認もせずに踏み荒らしてしまったのだ。できうるなら、いますぐに謝罪してから、耳も目も閉じてひきこもってしまいたかった。

そして、師匠の視線はもうひとりの生徒へと移る。

「私たちの情報を流していたな、イヴェット」

「バレました?」

と、こちらの少女も困ったように眉をひそめた。

「あたし、メルアステア派のスパイ以前のお仕事があって、こちらにはずいぶんよくしてもらってたんですよ。今回は落札した魔眼は 移植前に調査してもいいよなんて言ってくれたもので」

これも、二重スパイと呼ぶべきかどうか。

考えてみれば、イヴェットの魔眼は感情視ができたはずなのだ。 彼女がグルでなかったならば、カウレスに化けていることなどあっ さり露見したに違いない。

何にせよ、イヴェットに融資をしていた相手は判明した。

師匠が敵だと言ったその相手も、きっと。

ただ、自分は恐ろしかった。

偽者だとバレてもなお、薄ら寒く笑っているこの相手が怖かった。

改めて、師匠は偽者のカウレスへと問う。

「お前は、誰だ」

「もう予想はついてるんじゃないかな?」

首を傾げた偽者に、肯定も否定もしなかった。

「推理でもなんでもない。ただの勘だ。口にするようなものじゃない」

「でも、勘はある。僕たちには十分だろう? 別に君は探偵というわけじゃないんだ。怖がらずに言ってみるといい。なんだったら、その返礼として、間違ってたら僕が正体を明かすと約束しよう」

とんでもないことを、偽者は言い出した。

あまりにもあけすけに、自分の正体を取引材料に使ったのだ。すでに呪縛の結界に捕まっているとはいえ、そんな提案が一体何の利になるというのだろうか。

Г......

しばし、師匠は口を閉ざした。

瞼も閉じ、葉巻の煙だけがたゆたい、やがてその唇が開いたと き、

「ヒントは、十分にあった」

と、囁きをこぼした。

「七年前、天体科アニムスフィアの君主ロードから調査依頼を受けるほどの関係にあり、薄々殺人事件に関与してると気づかせながらも口を挟ませない相手。イヴェットを懐柔して、魔眼を落札させるために莫大な出資をよこせる相手。生徒のひとりに過ぎないカウレスになりすませるほど、現ノ代ー魔リ術ッ科ジのデータを隅々まで持っていて……そして、聖遺物を入れた金庫の魔術錠ミスティック・ロックを開けられる者」

ひとつひとつあげていく要素に、偽者がうなずく。

師匠が口元の葉巻を持ち上げる。まるで鍵のようだった。複雑に 絡み合った謎を解くための、たったひとつの鍵。

先端の火が揺れるとともに、師匠は答えを示した。

「あなたが金庫を開けられるのは極めて当然。そもそも、あの金庫

はあなたがつくったものだからだ。現ノ代ー魔リ術ッ科ジの先代学部長」

思い切り、後頭部を殴られた気分だった。

そうだ。気づくべきだったのだ。金庫のことだけじゃない。今回の相手は現ノ代ー魔リ術ッ科ジについて詳しすぎた。まして、暗示魔術は初歩とはいえ、メスメリズムは近代の代物──つまりは現代魔術の範疇ではないか。

「正しい呼び方だ。僕は君主ロードじゃなかったから」

と、偽者は答えた。

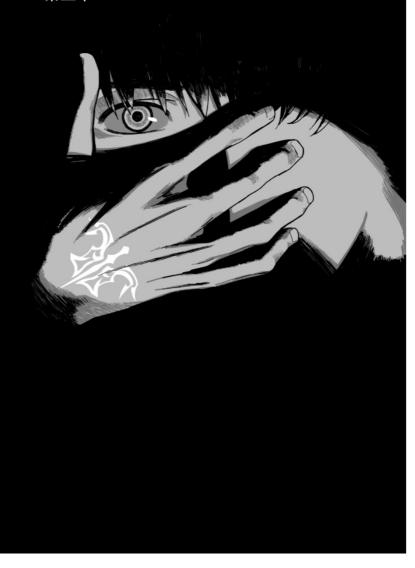
「あなたが来る前から、現ノ代ー魔リ術ッ科ジはあった。ただ時計塔の主軸となる十二科に数えられながら、担当する君主ロードはいなかった。時代の要請に応じて、あくまでお飾りのようにつくっただけだったんだ。十二家の誰ひとりとしてそんなことに本気じゃなかった。使いやすい労働力になる新世代ニューエイジが少しでも増えるなら、と考えた程度のことだ。ああうん、だから僕がいなくなった後、あのエルメロイ教室を立て直した君主ロードが現ノ代ー魔リ術ッ科ジを引き取ることになったと聞いて、つい心が弾んでしまったんだよ。これはひょっとしたら何かが変わるんじゃないかって」

花みたいに、少年は笑った。

けしてカウレスがしない笑い方だった。

「だから、つい間近で見ていたくなったんですよ。新しい学部長の やり方を 」

# ◆ 第五章 ◆



笑ったまま、偽者は瞬きした。

二度、三度と繰り返し……五度目には、自分の知っている少年はいなくなっていた。

「失礼。術式を終了するのに、少し手間取りました」

と、口にしたのはまったく知らない相手だった。

背はすっと高く、燃えるような赤髪と白い肌の組み合わせが印象に残った。纏っていた衣服さえもが、海のように蒼いスーツへと変じていた。年齢は分からない。二十半ばから四十半ばまで、どの数字を言われても納得してしまいそうだ。ただ、その唇が含んだ花のような笑みだけは、きっとしばらく忘れられないだろうとも思った。

こんなに柔らかく、穏やかな笑顔なのに、怖かったから。

理由は分からない。

今まで化けられていたカウレスが、その姿に戸惑いを押し殺して いた。

疲労を押し殺したライネスは、口元を押さえて状況を見守っていた。

やっと犯人と対峙したはずのオルガマリーも、指弾することはかなわなかった。

イヴェットはあちゃあと顔を押さえ、ジャンマリオは短く呻き── 法政科の菱理は、その表情を無くした。

「高度な変身術だな。スーツさえも例外ではないか。本来動キ物メ 科ラの領域だが、前の学部長はかなり多くの魔術に手を出していた のだったな」

と、師匠が口にする。

変身術とは、つまりおとぎ話の魔女が被害者を蛙に変えてしまったりするやつだ。ものによって強大な呪いだったり、古く高度な魔術だったりするらしいが、細かいところまでは分からない。そうした術式を、この相手は──現ノ代-魔リ術ッ科ジの前学部長は操るらしかった。

結界の中で、前学部長は小さく会釈した。

「古い知り合いはドクター・ハートレスなんて名前で呼んでいたけ ど、君たちにもそう呼んでもらえると嬉しい」

「ハートレス.....」

笑みを絶やさぬままの男に、つい呟いてしまう。

すると、

「……妖精に心臓を盗まれたから、なんて話を聞いたことがあった な」

これは、隣でぼそりとメルヴィンが耳打ちしたのだ。

時計塔の権力闘争とは一歩離れた場所にいた彼にも、その名前は 届いていたらしい。

(.....妖精に、盗まれる?)

そういえば、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの停止した場に も、妖精の輪フェアリィーサークルが残されていたことを思い出し た。妖精にも使い魔や幻想種などいくつもの種類があるそうだが、 いくつかの神秘な現象は、いまだ時計塔でも位置が定まってないら しい。

無邪気なところでは、靴を入れ替えるとか、勝手に家を掃除するとか。

深刻なところでは、取り替え児チェンジリングや、神隠し。

妖精に拐かされた人間の多くは、もはや現代という常識テクス チャには戻ってこられないという。

魔術にも手の届かない、遠い彼岸。

あるいは、彼らが求めてやまない深淵の申し子。

「いわく、現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長はかつて妖精に攫われ、その心臓を盗まれたままだとか。ゆえにあだ名をハートレス。メイン十二科で唯一君主ロードならざれど、その神秘を侮るべからず。……十年近くも前の話なんで、すっかり忘れてたよ」

メルヴィンの言葉に、自分も唇を嚙んだ。

あの時計塔ですら怖れられ、ひとつの学部の長を務めた──何より も、師匠の前代の現ノ代ー魔リ術ッ科ジを治めていたという事実 に、喉がひりつくのを感じたのだ。

しみじみと、師匠が言う。

「こんなところで出会うとは、思ってなかった」

「あなたが学部長を継いでくださったときには、立ち会えなかった ですもんね。もう僕が時計塔を諦めた後でしたから」

にこにこと、ハートレスは言った。

この出会いを心底喜んでいるように見えた。あるいは心底どうで もいいようにも思えた。ふたつは同じことかもしれなかった。

「ところで、まだ推理はあるんじゃないですか? 君が一番こだわっている部分があったでしょう。そう、ホワイダニットはどうなってるのかな」

なぜ、その犯罪を行ったのか。

どうして、犯罪であっても行わざるを得なかったのか。

今度は、師匠は素直に口を開いた。反論するのも煩わしいと思ったのかもしれない。

「この事件は残骸だ」

と、断言したのだ。

「なぜなら、あなたはとっくに本来の目的を達成しているからだ」 「なんだって?!」

ジャンマリオが素っ頓狂な声をあげて、こめかみをついた。

「そいつの目的は『宝石』の位階──泡影の魔眼だろうが! だからこそ、馬鹿みたいな金をオークションにつっこみかけてたんじゃねえの!?」

「魔眼はあくまでおまけだよ。手に入ればよしとは思っていたろうが、別段入らずともよしとも思っていただろう。そのおまけを防ぐためだけに、ずいぶんと危険な橋を渡らされたが」

苦々しげに、師匠が葉巻を握り込む。

それから、

「天体科アニムスフィアの君主ロードが調査依頼して、あなたが請け負った極東の儀式は、聖杯戦争だ」

と、言葉を紡いだ。

今度こそ聖杯戦争の名を出したのは、使い魔たちの五感が封じられた以上、もはや伏せる必要がなくなったということだろう。

「聖杯戦争は、七人の魔術師が七騎の英霊を呼び出し、願いを叶えるための聖杯を巡って争うという魔術儀式だ。ああ、おおよその魔術師には先代のロード・エルメロイが亡くなった儀式という方が通りがいいだろうな。時期を考えると、天体科アニムスフィアの君主ロードが調べる気になったのも、先代の死が理由だったのかもしれない」

皮肉そうに、唇を歪める。

「ともあれ、調査の結果として、天体科アニムスフィアの君主ロードはあの儀式における大聖杯が使い物にならないと考えたらしい。 その根拠までは知らないが、仮にも君主ロードが納得するほどだから、そのレポートは疑う余地のないものだったんだろう。実際、いくつもの魔眼を同時併用した調査だったのだから、精度も抜きんで ていたのは想像に難くない。そもそも時計塔では、極東の魔術儀式でまともな願望器など成立するはずがないという意見が大勢だからな」

師匠の言葉に、自分は息を吞み込んだ。

頭部を切り離され、それでも酷使されつづけた魔眼の主たち。その無念と反比例して、彼らの魔眼は聖杯戦争という儀式の奥底までも見抜いたのだろう。

「同時に、その調査であなたは別の情報も得ていたはずだ。今回の 事件に連なる情報を」

「いいね。とてもいい。学部長の間に、君のような生徒を持ってみたかった」

ハートレスは、ゆるやかにうなずく。

その対峙は、いつもとまるで逆だ。生徒カウレスに化けていた ハートレスが問いを発し、講師である師匠が答えていく形式。

「何ひとつ間違ってません。是非続きを」

「.....あなたを喜ばせるつもりはないが」

「でも、君だって真実を知りたいんでしょう。そこに謎ミステルがあるなら解体したいというのは、僕らのような人種にとってもはや本能です。遠慮はいらない。心ゆくまで晒してみたまえ。代償としてその正否を必ず答えると誓いましょう。今の君にはその確認が必要だと思うんですが、どうかな?」

赤髪の男は、悪魔のように推理を迫る。

あるいは、劇の続きをねだる童わらべのようにも見えた。ひょっとすると、そのふたつは同じ概念なのかもしれなかった。

「同じ情報で天体科アニムスフィアが諦め、あなたがこの事件を引き起こしたのは、目的が違うからだ。さきほどの供述通り、天体科アニムスフィアの君主ロードは聖杯が使い物にならないからと諦めた。ならば、あなたの目的がそれでないことは明らかだ。ああ、最終となる目的は分からずとも、この事件であなたが目標としていたことは分かるさ。なにしろ、その結果をこの目で見たんだ」

ひとつ、師匠は深呼吸した。

それからもう一度葉巻を咥え、煙とともに答えを吐き出した。

「英霊だ」

と、突きつけたのだ。

「あなたは、英霊をサーヴァントとして呼び出したかったんだ」

「素晴らしいエクセレント!」

ハートレスがスーツの胸元に触れて、感慨深げに天井を仰いだ。

しかし、その言葉は別方向にも波及を生み出した。

「ちょっと待て。英霊って境界記録帯ゴーストライナーか。そんな もの、本当に呼びだしたってのか」

傍らのジャンマリオが、狼狽を隠さず口にしたのだ。

もちろん、菱理とメルヴィンは知っていた。

オルガマリーはかすかに震え、カウレスとライネスも伝えられていたのか、表情を険しくしたきりだった。

列車側のスタッフは、少なくとも驚愕を外には出さなかった。

そして、師匠は答えなかった。

すでに、ハートレスがサーヴァントを呼びだしたのは確定した事実だからだ。列車の屋上で出会い、戦い、今こうして車椅子に座って行動することを余儀なくさせた相手。

「私が気を失っていた間のことだが、グレイは腑海林アインナッシュの仔の内側で、とある種を見つけたという」

不意に、師匠の話がこちらへと向いた。

びっくりした自分が何かを言う前に、師匠はさらに質問を叩き込んだ。

「あの種を仕掛けたのは、あなたじゃないのか?」

「ふふん? なぜ僕がそんなことを?」

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと腑海林アインナッシュの仔―このふたつを同じ霊脈レイライン上に配置すれば、必然的に歪みが生じる。たとえば紙を考えればいい。一枚の紙の上下にふたつの点を打って、その点同士を近づければどうなるか」

想像してみる。

紙に打った点同士を近づけて、ぐいと押し曲げたカタチ。ふたつ の凸が生まれ、その間がたわんで、同じ深さの凹が現れる。

たとえば、それは杯のような。

「そう。生まれるのは杯だ。実際に中間地点に生まれるわけではないが、強大なふたつの魔力が相剋する地点には、それだけの歪みが生じる。この場合、相剋する魔力は等質かつ等量であればあるほどいい。たとえば、上級死徒なんて呼ばれる存在の置き土産同士ならもってこいだろう。

無論、これだけでは杯や大釜として成立しても、聖杯戦争のそれとしては成立しない。それなりの術式で細工すれば、大魔術にも適応できるが、仮にもサーヴァントを呼ぶための亜種聖杯として仕立て上げるには、もうひとつかふたつ細工が欲しい。たとえば、歪みの形を誘導するために、小聖杯となる礼装を埋め込んでいくとか、日本に存在する大聖杯と接続するとかね」

接続、と師匠が言う。

葉巻を持った指が流れた。万魔眼球庫パンデモリウムの内側で、 葉巻の赤い火が残像の線を形成する。

「霊脈レイライン自体は地球の各地を巡り、遠く極東までだって続いている。ああ、ひょっとしたら、あなたはあのへんの土地を買いとって開発していたんじゃないか。霊脈レイラインを整えるために」

「.....カ!」

思い出した。

腑海林アインナッシュの仔から脱出し、魔眼蒐集列車レール・

ツェッペリンに合流するときのことだ。周囲の土地が妙に開発されていて──そのくせ、特に新しい建物がつくられる気配もなかったのだ。あの際はいぶかしむ暇さえもなかったが、まさかそんな意味があったとは。

「霊脈レイラインを整えるため、現実の土地へ手をいれるのは珍しくない。どの時代のどの国でも、首都を設ける際には自然とやっていることだ。東洋では地鎮祭や風水といった形で、今でも親しまれている。決まった線路がなく、霊脈レイラインを走る魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンにそうした工作を施したなら、あらかじめ運行する土地を固定することもできるだろう。その行く先に、腑海林アインナッシュの仔を用意しておくこともできるんじゃないか。同時に、遠く日本の大聖杯と接続することも」

「すごいな。これがエルメロイ教室を一躍時計塔の名物に押し上げ た鑑定眼ですか」

ハートレスが、心底感嘆の声をあげた。

光の結界の内側で、男はどこかユーモラスに顔をしかめた。

「僕がその発想に辿り着くまで、丸一年使ったんですよ。自信がなくなっちゃいます」

「こんなのはただの答え合わせだ。嫌というほどヒントをもらった上で、いくら積み重ねたところで発見者や発明者の業績に届くものか。ああ、加えて言うなら、あなたがサーヴァントを召喚したのは一日目の夜のはずだ」

「その根拠は?」

ハートレスの質問に、師匠がこともなげに答える。

「あのサーヴァントは、私を呼び寄せるために手紙を出させたと言った。二日目の魔眼の披露の直後に、お前が持ってきたやつだ。 ということはそれ以前に召喚していたことになる。――カウレスに化けていたお前が、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでそれだけの時間自由でいられたのは、一日目の夜しかない」

## (一日目の、夜……!)

その時間を思い出して、自分はあっと声をあげそうになった。

カウレスと―今考えれば偽者のカウレスとしばらく話をした後、彼からおやすみと言われて眠りについたのだ。師匠の葉巻が心地よくて、いつもに比べて妙に寝付きが良かった夜。あるいは、よくあることだし、疲れのせいだろうと思い込んでいたけれど、師匠の寝起きが妙に悪かった朝。

「あれは……まさか……」

「毒とかじゃないですよ。ほんの少し、眠りが深くなる程度の薬で す」

ハートレスが微笑する。

彼の内情を打ち明けられて、自分の胸の内は嵐が渦巻くばかりだった。ひとつずつ、最悪の形で事態が符合していく。こんな形で結実するなんて、悪夢にさえ浮かばなかった物事ばかり。

あの夜、カウレスに扮したハートレスはヘファイスティオンを召喚していた。

だったら、召喚した場所はどこだったろう。

ひょっとしたら魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを降りていたのかもしれない。たとえそうだとしても、あの神威の車輪ゴルディアス・ホイールをもってすれば、再接近することは容易だったはずだ。自分たちがヘファイスティオンに気を取られている隙に、もう一度列車に乗ることだって。

(それだけ.....じゃない)

ヘファイスティオンと戦った際、カウレスは雷に魔力を感じたからやってきた……と話していた。原始電池の修練を続けてきた彼だから、そんなこともあるのだろうと自分も納得した。だが、それもこれもまったくの偽り。ペテン。

あのときカウレスに変装していたハートレスは、どのような気持ちで師匠を助け、治療術式を施したのだろうか。

そんな思いのすべてを封じ込めたまま、師匠は言う。

「つまり、この事件において、トリシャの殺人や魔眼オークションは、あなたにとっておまけだ。サーヴァントを召喚できた時点で、

すでにあなたは成功してしまっている」

「ご明察。百点満点をあげましょう」

ハートレスが破顔した。

その笑みを無視して、師匠が問う。

「成功したのだから、さっさと消えれば良かったのに、なぜそうしなかった」

「さっきも言ったでしょう。君のことを見たかったからです」

彼の表情は、ひどく柔らかだった。

「なぜ、カウレスになりすました?」

「君のことを知りたかったから」

と、ハートレスは小鳥が囀さえずるように言う。

この事件の犯人は敵だと、師匠は断言していた。

なのに、その敵はひどく親しげに語りかけてくるのだ。

「調べれば調べるほどに、聖杯戦争は興味深かった。誰もが息づいていた。神話も伝説もありのまま現代に再現されていた。魔術師にとってさえありえないおとぎ話だからこそ、これ以上なく僕は魅入られた。子供の頃に見た夕焼けみたいに、どこまでもいつまでも追いかけていきたいと、心の底から願った」

夕焼けという単語が、なぜだか、ひどく胸をついた。

少しずつ闇に落ちていく緋色の光景。移り変わる光をいつまでだって眺めていられた時代。この男はいまだその赤光に佇んでいるような気がした。ずっとずっと夕焼けを見つめていて、何十年も経っていたことに突然気づいた眠り男リップ・ヴァン・ウィンクルみたいに。

すう、とひとりの影が割り込んだ。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの、車掌だった。

「あなたが、腑海林アインナッシュの仔を呼び出したと?」

「そうなりますかね」

「魔術師同士での諍いはかまいませんが、当列車への危害を加えた と判断された場合、オークション参加の権利は失われます」

今度は、オークショナーのハスキーな声が響く。

「そのあなたと共謀していたイヴェット・L□レーマンも、落札の済んでない泡影の廢眼については同様です」

「えええっ! あたしも?! そんな!」

これは、イヴェットが素っ頓狂な声をあげたところに、びしりと 背後から蛇が巻き付いたのだ。少女得意の魔眼も使わせぬためか、 ご丁寧に目のあたりにも巻き付いた蛇は、たちまち封印の布へと変 じた。

菱理の魔術であった。

法政科の女魔術師は、そのイメージ通りに蛇を使うらしかった。

「おふたりは、法政科として身柄を引き受けさせていただきます」

「やれやれ。やはり、こうなりましたか」

と、ハートレスは肩をすくめた。

こちらも強力な結界の内側で、手にしていたトリシャの首をそっ と足下に置いた。

「……だけど、これじゃ不十分ですよ」

ハートレスがまっすぐに右手を持ち上げたのだ。

その甲に刻まれた奇怪な紋様に、自分の目は食い入った。明らかな魔力を感じさせるそれが、尋常ならざる神秘だと、否応なしに理解させられた。

「君ならよくご存じでしょう、ロード・エルメロイII世。令呪だよ。サーヴァントとの契約の証にして、たった三回の絶対命令権。 ただ命令に従わせるだけでなくて、いくつかの応用法があります」 「ミス化野! いますぐ結界を─~」

師匠が叫んだ。

しかし、それよりも早く、ハートレスは高らかに呼ばわった。

「令呪をもって命ずる! 来たれ一」

白い光の結界が、より強烈な光によって打ち消される。

咄嗟に眼球を『強化』し、コンマ数秒ほどで視力が戻ったとき、 すでに異変は終了していた。跡形もなく砕け散った結界の内側で、 ハートレスの隣にひとりの女性が現れていたのだ。

戦士とは、まさしく彼女のことだ。

ゆるやかにウェーブした髪の中で、編み込んだ一房だけがひどく 長く、踝のあたりまで垂れていた。片方の瞳は海のように青く澄ん で、もう片方の瞳は鴉の羽のごとく黒い。革と金属で作られた鎧 は、あまりにも時代錯誤で、しかしたったひとりで堂々とこの時代 を蹂躙していた。

その勇姿を前に、菱理の呼吸が初めて乱れた。

「英霊……っ」

「マジに、境界記録帯ゴーストライナーを使い魔にしてるのか よぅ!」

ジャンマリオが叫ぶ。こちらの方が、魔術師としては正式な名称なのかもしれない。いずれにせよ、熟練の魔術師にとってすら隔絶 した脅威であることだけは間違いなかった。

はたして、女戦士は悠然とハートレスを振り返る。

「やっと呼んだな、マスター」

「ははは、あまりに君主ロードの話が面白くてね。つい長居してし まった」 「くだらない」

と、ヘファイスティオンは吐き捨てた。

たったそれだけのやりとりなのに、周囲の魔術師たちは凍りついていた。

「なん、だ、これは……」

たたらを踏んだのは、オルガマリーだ。

君主ロードの娘として、幾多の濃い神秘を見てきたからこそ分かるのだろう。

これは桁違いだと。強大で、絶大で、凄絶な、理不尽そのものの 具現なのだと。

自分だって、今も膝が震えて仕方なかった。目の前の相手がどれだけの戦力を保持しているか、前の戦いで嫌と言うほど思い知ってしまっていた。完膚なきまでに打ち負かされた記憶が、自分の手足を縛り付けていた。

「……イッヒヒヒ、来ちまったよ! おいおいグレイ、しっかりしろよ!」

小声で、アッドが叱咤してくる。

それでも、逃げ出さないだけで精一杯だ。とっくに折れている心 を、粘着テープだけで補修したと言い張ってるような状態。

「生きながらえたのか」

と、英霊は師匠を見やった。

冷厳なる瞳は、直接睨まれていなくても、魂まで凍りつくようだった。

「あなたについて、ずっと考えていた」

師匠が、低く言う。

けして恐れてないわけじゃないのだろう。当たり前だ。この列車 で殺されかけたばかりの相手なのだ。傷は癒えぬどころか、車椅子 での行動を余儀なくされるほどに深い。

それでも、師匠は震えを押さえ込みながら、言う。

「あなたが何者かと、そう考えてたんだ。サーヴァント」

「ヘファイスティオンと、名乗ったぞ」

「クラスの、問題だよ」

聖杯戦争では、英霊を特定の面に限定することで、召喚を容易に していたという。

たとえば、剣セのイ英バ霊ーならば聖剣や魔剣を持つ側面を抽出したもの、術の英霊キャスターならば魔術を扱う側面を抽出したものというように。こうしたクラスは、敵対者には明かせない真名の代わりに、一時的な仮称として通用していたという。

だから、真名は明かしてもクラスを明かさないこの英霊を、師匠はずっと不思議に思っていたのだった。

「今なら、その意味が分かる」

と、師匠は懐から一枚の封筒を取り出した。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジの部屋で、金庫に置かれていた招待状だった。

「金庫に招待状を置いてまで、私を魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに呼び出したのは、亜種聖杯を誤認させたかったからだろう」

その招待状を胸元に掲げたまま、言葉を続ける。

「あなたは確かに亜種聖杯をつくったんだ。願望器としては機能しなくても、サーヴァントを呼び出すのに十分なだけの性能も確保していた。その上で、さらに安全性を高めるために、列車に私を呼び込んだ。十年前の第四次聖杯戦争で一度はマスターとして承認された私なら、聖杯の側も誤認しやすい。さらに、万が一にも私の方がマスターとならないよう、そうして令呪も偽装した」

ハートレスの手に刻まれた──いまやその一画を失った令呪を指して、師匠が言う。

「だけど、それでも足りない。なぜなら本物の聖杯戦争で使われる クラスの枠は決まっているからだ。大聖杯と接続することで、なん らかの機能を模倣したとしても、大聖杯自体をハッキングできたわ けじゃあるまい。同じ枠で英霊を呼ぶことができない以上、あなた はまったく新しいクラスを追加エクストラで作らざるを得なくなっ た」

追加エクストラクラス。

本来の聖杯戦争で扱われるという七つのクラスの、外。

「あなたは、それを偽者で通したんじゃないか?」

不意に、オルガマリーが言っていたことを思い出した。

― 『何もかもよ。この列車の旅で触れたものは、何もかもが残像 みたい』

あの言葉に打たれた師匠は、それがふたつめのパーツだと言った。推理を裏付ける、決定的な歯車だと。

「聖杯も偽物。マスターも偽者。令呪も偽物。普通なら、こんなデタラメな術式は通らない。だが、クラスそのものも偽者を象徴するクラスだったなら? ああ、つまるところは言葉遊びみたいなものだ。詐術と言ってもいいだろう。だが、もともと魔術とは言葉遊びや詐術から生まれたものだ。でなければ、世界の象徴などと言ってタロットを操ることすら許されまい」

確かに、それは詐術だろう。

何もかもが偽物なら、偽物であること自体を利用した魔術にすればよいのだと、そんなことを師匠は話しているのだ。根底から滅茶苦茶な理屈なのに、ひどくしっくりくるものも感じていた。師匠の言ってることは正しいと、自分の全神経が訴えていた。

「つまり……この英ひ霊とは……」

「ああ、偽の英霊フェイカーとか、そういう意味合いのクラスだろ

う」

「どうやら名付けの趣味があうみたいですね」

と、ハートレスは苦笑した。

蒼いスーツの胸ポケットのあたりを押さえ、師匠の言葉を肯定する。

「その通り、新しいクラスを、僕はフェイカーと名付けました」 フェイカー。

偽の英霊。

新たなるエクストラクラス。

「英霊の、偽者や影武者としての一面を呼ぶためのクラスだな。あなたはそのことを隠しておきたかった。だから、彼女はクラスを口にせず、ヘファイスティオンとだけ名乗った。宝具の真名を解放しなかったのもそれが理由だろう」

そう言って、師匠は改めて女戦士を見やった。

「……じゃあ、私は誰だと言うんだ?」

厳かに、英霊は問うた。

本来なら、列車のスタッフも魔術師たちも、こんな問答を放置してはおくまい。さきほどまでと違って、ハートレスも女戦士も結界に封じられてはいなかった。しかし、向こうの戦力が大きすぎて、迂闊に手を出すこともかなわないのだ。たったひとりの神秘が、いまや魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンすべてを覆うほどの敵意を漲らせていた。

師匠は奥歯を嚙みしめていた。

どうかすると、歯の根が合わなくなるのを堪えているようだった。車椅子の裏に隠した拳が白くなるほど握りしめ、ようやっと言葉を吐き出した。

「私は、かつて聖杯戦争でイスカンダルを召喚した」

と、師匠は口にした。

「だが、彼の姿は、伝説に残ってるイスカンダルとは似ても似つかぬものだった。なにしろ小柄とか言われた体軀は、二メートルを大きく超えた筋骨隆々たる巨漢だったんだからな。若かりし頃はもっと違ったのかもしれないが、それでも髪の色も目の色も見事な朱色で、伝承とは違い過ぎる。文献通りなら、イスカンダルの髪の色は金か黒。一眼は夜の暗闇を、一眼は空の青を抱くと言われた金銀妖瞳へテロクロミアだというのにな」

「.....それは」

と、思わず自分は呻いた。

だって、今師匠が話した姿はまるで─

「……ああ、この女そのものだ」

師匠の言葉に、女英霊はかすかに震えた。

ひょっとすると、オルガマリーはその可能性に気づいていたのかもしれない。今も子鹿みたいに震えながら、琥珀色の瞳はこちらのやりとりを見つめていた。

「お前はヘファイスティオンじゃない」

と、師匠が断じる。

「召喚としてはイスカンダルが呼ばれたんだろう。そうだ。あの聖遺物を使ったならほかの英霊が呼ばれるわけもない。だが、呼んだクラスのゆえに、本来のイスカンダルとは似て非なる存在が召喚されることとなった。暗殺も戦争も日常だった古代の王族ならば、当然いてしかるべき存在が」

似て非なる存在。

当然いてしかるべき存在。

その意味を、師匠が解き明かす。

「お前は、王の残像―イスカンダルの影武者だ」

「で、でも、おかしくないですか? 本物とまるで似てないのに影 武者なんて」

思わず、自分も口を挟んでしまった。

師匠の言葉がどうしても受け容れられなかったからだ。姿も性別 も何ひとつ一致しないのに影武者だなんて、どうすれば成立するの か。

しかし、師匠は落ち着いた声で、説明を重ねた。

「影武者というのは、何も姿形に対するものだけじゃない。とりわけ写真などのない古代にあってはいい加減なものだ。そもそもイスカンダルの本来の姿が伝わってない時点で、格好が似てる意味なんかないと分かるだろう」

「……それは、そうですけど……」

「それに、彼女の場合は、通常の影武者とは意味が異なるんだろう。おそらく古代メソポタミアにも例のある──」

「……おおよそ、まず八割方は正しい」

師匠の言葉を遮って、女英霊が肯定した。

自分がイスカンダルの影武者であると、認めたのだ。

偽者。替え玉。そうしたものに連なる『フェイカー』なのだと。

「しかし、残りの二割は間違いだ。それがホワイダニットの限界だな。動機からもたらされる推理としては正しい。だけど、事実そのものには至らない。ヘファイスティオンの名は兄のものだが、私が借り受けることもあったんだ」

「兄?」

「これ以上戯れ言を聞く気はない。いいな、マスター」

振り返った女英霊──フェイカーの横顔は、もはや問答を交わす余地はないと訴えていた。

「やれやれ」

ハートレスが赤い髪を掻く。

それから、周囲をゆっくりと見回した。

「ええと、僕としてはここで戦ってもいい」

と、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの車掌に向かって言う。

「しかし、それでは幾多の魔眼が犠牲になるでしょう。時計塔を退いて久しいとはいえ、ひとりの魔術師としてそんな悲劇は耐え難い。どうか、万魔眼球庫パンデモリウムを開けていただけませんか?」

勝手な言い分だ。

七年前の事件を探られるのが嫌だからとトリシャを殺し、サーヴァントを呼び出すためと腑海林アインナッシュの仔を招いて全員を危地にさらした輩だと考えれば、これがどれだけ無法な言葉かは明らかだろう。

しかし、サーヴァントを後ろ盾にすれば、その無法にも逆らいが たい圧力が生まれる。

まして、万魔眼球庫パンデモリウムに蓄えられたる魔眼、魔眼、 魔眼。

そのひとつひとつが、さきほどオークションで証明されただけの 価値を持つのだ。この中で戦うことがどれほど無惨な結果を生むか など、想像したくもなかった。

「.....いいでしょう」

車掌がうなずくと、すぐに動きがあった。

万魔眼球庫パンデモリウムの天井が、大きく開いたのだ。何か大

型の荷物を搬入するための出入り口だったのかもしれない。 夜空の向こう側に、煌めく星がいくつも見えた。

「ありがたい」

と、感謝を告げてから、ハートレスはもうひとりの少女に呼びかける。

「イヴェット。君はどうする気です? 僕と一緒に出て行きます?」

「あたしはここでいいわ」

菱理の魔術に縛られたままのイヴェットは、ピンクのツインテールを横に振った。

「あなたとの契約は、あくまで融資のために協力し合うことだけだったでしょう? これから法政科の裁きを受けさせられるでしょうけれど、それはもう素直に全部吐くわよ。いくら前学部長だからって、逃亡生活に加わるなんてまっぴらだもの」

「おっと振られてしまった」

片眉をあげた男の手を、フェイカーが握って、軽々と屋上へと飛び上がった。

「……行かせるか」

車椅子の肘掛けに、師匠が力を込める。

座っていた師匠が、かろうじて立ち上がったのだ。

無論傷が治ったわけではない。メルヴィンがやっていたように、 魔術回路に神経の代わりをさせているのだろう。メルヴィンなら吐 血しながらでもこなす魔術を、師匠は脂汗を垂れ流すほどの集中で 実現させていた。

「カウレス、グレイ。追うぞ」

「先生、でも.....」

「分かりました」

逡巡したカウレスの代わりに、自分がうなずいた。

それで覚悟を決めたのか、カウレスも前に出てくれた。ふたりで 師匠の腰に手を回してから、『強化』によって飛び上がる。

列車の屋上に、着地した。

すぐ目の前で、呆れたようにハートレスが振り返った。

「やれやれ、ここで別れるのが賢明だと思うんですけど。さっきも話しましたが、この場で君主ロードを殺すつもりはないんですよ」

「こちらが、それでは済まない」

うつむいたまま、師匠が言う。

なるべく衝撃を与えないよう着地したつもりだが、今の師匠にしてみれば、こうして立っているだけでも、身体の負担になるのは間違いなかった。

「あなたの奪った聖遺物を、返してもらってない」

「おお、なるほど。いいでしょう。確かに召喚の終わった今となっては用のないものですからね」

すう、と男が、古びた朱い布きれを取り出す。

そのまま手を離すと、風に乗ってすぐそばまで流れてきて、それを受け取った。

手元に戻ってきた聖遺物を確認して、師匠は唇を引き結んだ。も う一枚ハンカチを取り出して、大切にその内側に折り畳んでから懐 にしまった。

「もうひとつ、言いたいことがある」

「ふむ。ゆっくり話していきたいのはやまやまなんですが.....」

「あなたじゃない」

と、師匠はきっぱりかぶりを振った。

「お前だ、フェイカー」

クラスで、呼んだ。

ヘファイスティオンではなく、フェイカーと。

「戯れ言を聞く気はないと言ったぞ」

敵意を隠しもしない女英霊に対して、しかし師匠はかまわずに続けた。

「二割ほどが間違いだと言ったな。兄から名を借り受けることも あったんだと。──なら、お前は双子だったのか」

Г......

ぴくり、とフェイカーの指が動いた。

その動揺を見落とさず、師匠はさらに言葉を紡ぐ。

「当時の双子なら、片方がまともに育てられ、片方が魔道に預けられるのはけして珍しくない。ましてイスカンダルの母──オリュンピアスは、ディオニュソス教の熱烈な信奉者だったんだから」

― 『もともとは、あれの母にお目付役でつけられたんだ』

洞窟での言葉を思い出した。

それに、メルヴィンも話していた。イスカンダルの母親は、確かマケドニアでの宗教儀式を一手に担っていたと。だったら、その母親によって育てられ、お目付役としてつけられた子供の意味は──

「以前から、ヘファイスティオンという名は奇妙だと思っていた。 ギリシャからの風習で、普通の男ならヘパイストスと名付ける。な のに、わざわざ派生でヘファイスティオンという名前にした途端、 性別も出身も曖昧になる。なにしろ、アマゾネスの女王にも同じ名 前がいるぐらいだ。――説には、ヘファイスティオンという名前に は神に捧げ物をするという意味もあったそうだ」

きっと、長く調べていたのだろう。

イスカンダルという英霊について。かの英霊が生きてきた年月について。かの歴史と向かい合うとき、師匠はいつも遠い眼をする。 遥か彼方に過ぎ去っていった時代に向き合うと同時に、自らの青春 に立ち返っている。

だから、今確信とともに告げる。

「王が権力を振るうには、けして裏切らない部下が必要だ。イスカンダルを無二の王とすべくずっと働きかけていたオリュンピアスなら、幼少の頃から忠臣を育てようとしても、何ら不思議はない。あなたの兄に与えられたのはそういう名だったんじゃないか」

#### 「一黙れ!」

激昂した女英霊が、その剣を抜き放つ。

雷鳴のごとき斬撃を前に、自分の身体が割り込んでいた。

「アッド!」

「ヒヒヒヒヒ! こりゃまた!」

周囲の魔力を吸収して、手元でアッドが展開する。

第一段階応用限定解除。

大盾。

かろうじて師匠を庇った瞬間、凄まじい衝撃が盾を突き抜けた。 英霊の怒りがそのまま載せられたごとき、全身が持って行かれるの ではないかというほどに重い一撃だった。

「......すまない、グレイ」

「大丈夫です」

盾を構えたまま、自分ははっきりと言い切った。

「これぐらい、いくらでも。だから、師匠は師匠の言いたいことを ぶつけてください」

なんとなく、師匠のやろうとしていることが理解できた。

ハートレスは令呪をたった三回の絶対命令権と言った。三回きりなのだ。しかも、その一回をフェイカーを呼び出すために使用した。だったら、可能な限り令呪を使わずともいいように立ち回りたいはずだ。

だからこそ、ここで師匠の挑発に乗るフェイカーも御しきれない。

英霊がただの使い魔ではなく、固有の人格を持つからこその扱い づらさだ。同時に、師匠はそうした英霊の習性をこれ以上なく把握 してるのだった。

「―イスカンダルの影武者だろうと言ったのは、けして姿形についてではない」

改めて、師匠が先の話題を引き戻した。

「当時が、すでに終わりかかっていたとしても、いまだ魔術華やかなりし神代の名残だからだ。魔術はより強大で、その多くは魔法とされた時代だった。有力な王ならば、必ず呪詛から身を守るための神官や魔術師を用意していた時代でもある。ずっとさかのぼれば、古代メソポタミアには身代わり王なんて儀式もあったぐらいでな。いわく、凶兆を逃れるために、まったく関係ない農夫を王に据えて、災いが過ぎ去れば身代わりとなった相手を殺したとかいう残酷な風習だ」

身代わり王。

災いを避けるための、儀式。

「……じゃあ、師匠が言ってたのは」

「ただの替え玉じゃない。魔術的な影武者だ」

と、師匠が断言する。

「余計なことを一!」

フェイカーの動きが、加速する。

こちらの大盾を避けて、いまだ走行し続ける列車の外側ギリギリ から、ぐるんと回り込んだ。卓越した運動能力が、ほとんど物理法 則を無視した機動を可能とする。『強化』されている自分の動体視力でも追い切れないほどの、圧倒的な速度。

### (間に合わ一)

瞬間、雷の網が、その身体を捕らえた。

ر!?c----

「……はは、なんとかなるもんだな」

カウレスが先回りして、列車に罠を張っていたのだ。

その指の間に細い電流が走っていた。列車の屋上にも蜘蛛の巣のように張り巡らされた電流の糸が、たったいま英霊の五体を絡め捕ったのである。

「人体の魔力と、原始電池による電力を融合して、ガルバニズムの 術理によって強化してるんだ。前から先生と練習してたやつだよ」

フランケンシュタインという小説が書かれるきっかけともなった、ガルバーニの電池の実験。それは生体電気という視点から、師匠とカウレスの間でいくつかの魔術を発展させた。ある意味、現代魔術としてふさわしい術理でもあったろう。

緊張と、少年特有の潔癖さと誇りとを滲ませて、カウレスが言う。

「絞首刑の雷クラフテッド・ツリーとでも、名付けようか」

「.....は」

と、フェイカーが息をついた。

にんまりと笑った英霊の唇が、新たに何事かを囁こうとしたの だ。

「グレイ、魔力を喰らえ!」

その声が、自分の背中を押した。

咄嗟に大盾から変形させた死神の鎌グリム・リーパーを、斜めに振るう。

言葉通り、相手への攻撃よりも、周辺の魔力を喰らうことに重点を置いた。必然的にカウレスによる原始電池の魔術もほどけたが、まったく別の一世界から英霊の内側に集中しかけていた魔力も、同様に喰らい尽くし、彼女の掲げた剣と激突したのだ。

激突の余波で、颶ぐ風ふうがまきちらされる。

だが、その威力よりも、たった今喰らった魔力の総量に、自分は 恐怖を覚えていた。

「今の、は……」

「危なかった、な」

と、師匠がこぼす。

「グレイ。カウレス、そいつは魔術師だ」

ぱちぱちと、カウレスが瞬きした。

信じられないという顔だった。英霊と戦うことまで覚悟していた のに、その言葉はまったく予期していなかったと、目を見開く。

「イスカンダルの時代の魔術師……って、先生、それは」

うわずった声で、カウレスが言った。

「神代の、魔術師……っ!」

「魔術的な身代わりになるなら、自らが魔術師であるのが近道だろう。魔術がいまよりずっと万能だった時代の魔術師」

言葉を絶やさず、師匠はフェイカーへと視線をあげる。

「ああ、かねて息子を王にせしめんとしていたオリュンピアスは、 幼い双子を見てこう思ったんじゃないか。この片方を将軍に、片方 を魔術師にすれば、自分の思う通りの忠臣をつくりあげられると。

将軍はもちろんのこと、早くから息子のために信頼できる魔術師を用意しようと考えたのは道理だろう。重用されるのも当たり前だ。彼と彼女こそは、王のために用意され、王のために教育され、王のために仕立て上げられた最適の将軍と魔術師なのだから」

騙されていた。

いや、勘違いさせられたというべきか。先の戦いのせいで、彼女が剣を振るいイスカンダルとともに戦った将軍なのだと、単純に考えてしまっていた。実際、幾万というイスカンダルの部下の中でも、ヘファイスティオンは一際輝く将帥の名だ。しかし、彼女の正体がヘファイスティオンではなく、かの王の影武者であったというのなら—

「一黙れと言ってる!」

「アッド、喰らって!」

息をつかせず、死神の鎌グリム・リーパーで切り込んだ。フェイカーが神代の魔術師だというならば、間違えても魔術を起動させてはならない。それは最初からほとんどない勝ち目を完全にゼロにするのと同じだ。

幸いなことに、魔力さえ吸収し続けるならば、彼女も魔術を行使できないらしかった。

むしろ、こちらの速度はかつてなく上昇していく。

「イッヒヒヒ! こいつは凄い! 量はともかく、こんな質の魔力なんざ現代じゃまずお目にかかれねえぞ!」

師匠の言葉が、彼女を滾たぎらせているのが分かる。

でなければ、一度魔術を無効化された彼女が、二度、三度も同じ 手を使いはしなかっただろう。だが、それとて四度目はない。魔術 を諦めて剣に戻った彼女は、こちらに倍する速度で反撃する。

身体の芯が、ひりひりと熱を持っている。

いつもより過剰に回転する魔術回路が、筋力も敏捷も感覚も段違いに跳ね上げている。いやきっとそれだけじゃない。目の前の英霊が叩き込んでくる戦士の魂が、自分自身の異常になんか怯えていられないと、吹っ切らせてくれた。

その後ろから、師匠の声が聞こえた。

「あなたは呪いを避けるためにも、イスカンダルはこんな姿なのだ

と偽の情報を流し続けたはずだ。いや実際に、イスカンダルの名代 として行動したこともあるんだろう。だから、後世に伝わるイスカ ンダルの姿には、あなたのそれが多く混じった」

黒髪。

金銀妖瞳ヘテロクロミア。

男としては小柄な身体。

それらが、すべて当時の情報工作によるものとしたら?

イスカンダルが数多の戦場に連れ歩くのも当然。遠征にてエジプトの古き魔術に抗する際、はたまたインドで脈々と引き継がれた妖術に立ち向かう際、彼女こそが征服王の守りの切り札だった。

そして、切り札であるがゆえに、その正体を隠蔽された。

フェイカーが死ぬまで、いいや死んだ後も守り通してきた秘密を、たったいま師匠が暴露していく。切開と言ってすらいいだろう。いっそ残酷なまでの言葉があってこそ、かろうじてこの英霊の猛攻に耐えられるのだと、自分も悟っていた。

「.....解体ですね」

見守っているハートレスが、ふと呟いた。

師匠の言葉が、神秘を解体する。その現場を観察し、ハートレスは名付けた。師匠の在り方は解体者であると。

ざっ、とフェイカーが大きく下がった。

追いすがらんとしたが、しかし彼女が紡いだのは呪文ではなく、

「......訂正しておく」

陰鬱な声で、女英霊の側から切り出したのだ。

「印象だけなら、昔は本当に似てたんだ。私があれの代理をさせられるぐらいはね。名代をさせられるようになったのはその延長だ。 ……ダレイオスの母に間違われたのは、兄の方だったがね」

牙にも似て白い歯を剝き出し、フェイカーが言う。

瞳には、強い憎しみがこもっていた。殺意も敵意もないまぜに なった瞳は、あらゆる光を吞み込む黒玉に紛った。

「ああ、もはや意味のないことだ。そんなに聞きたいなら聞かせて やる。もともと、私に名前はなかったんだ」

と、告白した。

「......名前が、ない?」

「王の影武者としてつくられた私には、固有の名前がなかった。なぜなら、固有の名前がなければ、完全なる王の影武者になりきれるからだ。イスカンダルという王をめがけるありとあらゆる呪いに対して、無欠の盾となれるからだ。ははは、オリュンピアスは兄を将軍に育て上げる一方で、幼い私に薬物を使ってまで、無駄な自我が生まれるのを阻んでいたぞ」

魔術において、私的な情報を知られることは禁忌だという。ある種の魔術系統では、名を知られるだけで呪いの精度が何十倍も跳ね上がるとされるほどに。

ならば、名前をつけなければよい。

必要なときだけ、イスカンダルという名前を貸し与えるモノであればよい。

ぞくぞく、と背骨を震えが走っていった。恐怖と似ていて少し違う何か。ひょっとしたら、ずっと昔に死んだアーサー王であればよいと願われた自分にも、近い何か。

「あの王は、それでも何度も私に名前を与えようとしたが、そのたびに私は強く断った。王以外の名前が必要なときは、兄であるへファイスティオンの名を借りた。それだけのことだ。それだけのことなんだ魔術師メイガス」

「だったら、もうひとつ問題が残る」

間髪入れず、師匠が口を差し挟んだ。

「あなたが、『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』に現れなかっ た理由だ」 フェイカーの顔が、憤怒に染まる。

その刃が、煮えたぎる殺気に加速する。

死神の鎌グリム・リーパーでは対処しきれないと見て、アッドを 大盾へと戻した。

大盾と剣の間で、けたたましい轟音が響きわたる。あまりの速度 に一連なりとなった音は、ある種のオーケストラにも紛った。『強 化』されたこちらの身体の芯まで貫く衝撃に奥歯を嚙みしめ、全身 で支える。

「王があなたに名前を与えようとした、と言ったな!」

血を吐くように、師匠が叫ぶ。

庇っているとはいえ、屋上に何度となく炸裂した強烈な余波は、 傷口を開くのに十分だったんだろう。かすかな血の臭いを、自分は 知覚していた。

「だったら、あいつはあなたの境遇を許さなかったはずだ! 名前がないモノ扱いだなんて許すはずもなかった! なのに、あなたがそれを拒んだのは、でなければ身代わりになれないと思ったからだろう。ああ、間違いなくあなたはイスカンダルという王の、希有なる忠臣のひとりだ。そんなあなたが、『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』にいなかったのは、それは一」

## 「黙れえっ!」

ごうん、と特大の鐘でも突き鳴らしたかのごとき轟音とともに、 自分の身体が吹き飛ばされる。

# (ま、ず──落ち──!)

列車から落ちる、と考えた瞬間、背中に圧力がかかった。あらか じめ『強化』していたカウレスが、自分を受け止めてくれたのだっ た。しかし、それは師匠を庇う者がいなくなったことを意味する。

## 「師匠!」

全力で、跳ぶ。

フェイカーの剣が、師匠の脳天へと振り落とされる。

「それは、あなた自身が、『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』 を憎んでいるからだ──!」

多分、その言葉が、一瞬女英霊の剣を鈍らせた。

その刹那にねじ込むように、大盾のアッドを投擲する。雷鳴その ものの衝撃が列車の屋上を蹂躙した。跳ねとんだアッドが魔力に引 き寄せられてこちらの手元へと帰還する。巻き上がった粉塵の向こ うから、師匠の身体が転がって、列車の半ばで停止した。

からからと転がった眼鏡が、列車の外に落ちた。

べっとりと、血が垂れている。水たまりみたいだ。

膝を押さえ、ゆっくりと立ち上がる師匠を、自分はたまらない想いで見つめていた。

そして、

「うまく立ち回りますね、ロード・エルメロイII世」

ハートレスがひどく感心したように呟いた。

「しかし、なるほど。同じ聖杯戦争を知っていても、後から拝見しただけの観客と、実際に経験した生還者ではずいぶん違う。あなたは確かに英霊との付き合い方をよく知っている。現代の常識でははかれない相手と、そのままに直面する手段を心得ているようだ」

「いろいろあったんでね」

痛みをにじませて、師匠が苦笑いした。

身体と心、どちらの痛みだったかは分からない。

うんうんと数回うなずいて、ハートレスは頰を掻く。

「あなたをどうにかしない限り、フェイカーはこの場から離れさせ

てくれないでしょう。さすがにここでもう一画令呪を使うわけには いきませんし、使ってしまえば、僕と彼女の関係は修復が難しくな る。あなたを敵に回すのはなるほど大変だ」

この期に及んですら、赤い髪の男は柔らかく笑っていた。

「だから、仕方ない。これ以上は差し障りますので、僕も抵抗して みましょう」

「あなたも?」

「ええ、こうやって」

ハートレスの手が、そっと左胸のあたりを押さえた。

### 【裏返れ、僕の心臓】

歌うような、旋律。

ぐりん、と何かが裏返ったのを感じた。自分ではなく、その外側。世界の方が肌を裏返させたごとき猛烈な違和感に、一瞬吐き気すら覚えた。

その方向も、自分は感じ取っていた。

夜闇の中、走行する列車の行く手で、何かが生まれたのだ。

「今の、は?」

「虚数属性とは違いますが、僕も似たことができる。この心臓の代わりに」

静かに、ハートレスは囁いた。

失った代わりに、得たものがあるのだと。多分それは通常の魔術とは異なる。呪文や動作をもって申請し、魔力や魔術基盤によって 駆動する、一連の現象とは似て非なる行為なのだろう。

妖精たちに拐かされた代わりに得た、代替の利かない特権。

「ところで、あの腑海林アインナッシュの仔、いささか簡単に消えたように思いませんでしたか? いくら本体には及ばぬ仔といえど、偉大な神秘の徒がああもたやすく消え失せたのでは名折れというものです」

線路の行く手で膨れあがった魔力に、自分は既視感があった。

つい半日前、いやというほど味わったばかりのそれは。

#### 「ハートレス……!」

「傷ついた腑海林アインナッシュの仔の核を、僕は密かに回収して、虚数のポケット同様に封じていました。さきほど、この列車の行く先で解放したところですよ。なにしろもとがタフな死徒ですからね。傷つけば傷つくほど、代替となる相手を求める」

その言葉とともに、ごおと異音がこだました。

線路の向こう側から迫ってくるのは、触手めいた樹木の枝だった。氷に包まれた外側は変わらず、その樹皮からもはっきり見える形で、血のごとき朱色をどくどくと脈動させているのは、傷ついた腑海林アインナッシュの仔が極限状態で新たな形を選んだものか。

「前とは違う。今、腑海林アインナッシュの仔はこれ以上なく餓え ている。さて、近隣で最も魔力に溢れているのはなんでしょう」

そんなのは決まっている。

氷樹の枝に押し包まれて、いまや魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは、腑海林アインナッシュの仔に喰われつつあった。

\*

菱理が、そっと眼鏡をかけなおした。

列車の屋上で繰り広げられている死闘は、こちらにも凄まじい轟音を届かせている。しかし、それとは別に強大な魔力が発生するの を彼女も感じたのだ。 瀟洒な飾りを添えられた窓の近くに寄って、がらりと開く。

はたして、線路の向こう側に、触手にも似た奇怪な枝が動くのを 見た。

「これはこれは」

と呟いて、菱理が呆れたようにかぶりを振る。

「ええ。きっと何かの仕掛けをしてるとは思いましたが、まさか腑 海林アインナッシュの仔を再利用するつもりだったとは。さすがは 元学部長というべきでしょうか」

「って、腑海林アインナッシュの仔……っ?! せっかく脱出したの に?!」

縛られたイヴェットが、その言葉に反応した。

目もぐるぐる巻きに封印されているので、彼女には確認しようがないのだが、先の脱出劇で味わった恐怖は忘れていないらしい。

「──まさか、法政科が無策ってわけじゃないね?」

これは、ライネスが愉しそうにけしかけた。

ロンドンからここまで飛行魔術を行使してきた彼女にはほとんど魔力の貯蔵が残されていない。だからこそ義兄であるエルメロイII 世の助力も諦めていたのだが、それはそれとしてこの状況だからこそお手並み拝見.....という意識も強いようだった。

対する菱理は、すいとひとりの魔術師を振り向いたのだ。

「とりあえず、協力していただきましょう、ジャンマリオ」

「お、俺っ?!」

思い切り両手を振り上げて、ホールドアップさながらにジャンマリオがぶんぶんとかぶりを振る。もっとも表情の方は仕草ほど気楽ではなく、いまにも死んでしまいそうなぐらい、げっそりとしていた。

「あなたの使い魔なら状況を確認するのにもってこいです。という

か、どうせもうやっているのでしょう」

「……まあ、とりあえず八十七匹ほど」

その袖から、小さな漆黒の粒がこぼれていた。

極小の蜘蛛たちが、列車の隙間から外部へと抜け出ているのであった。オークションの前からこの使い魔でいろいろ観察していた彼にしてみれば、こうした準備は当然のものだったろう。

「だったら、まずは可能な限りの結界を列車の外部に展開して─」

「……そんなんじゃ駄目よ、法政科」

と、声が低く絨毯を這ったのだ。

菱理が振り返る。

銀色の髪の少女がうつむいたまま口にしたのだった。

「何か問題がありますか?」

「だって、私、先にこの霊脈レイラインを全部見ていたもの。一番 効果的な術式はそうじゃない。腑海林アインナッシュの仔が相手 だっていうなら、私はもっとうまくやれる」

「なるほど、地の脈は宙ソラにならいますか。お任せしてもかまいませんか」

「.....いいわよ」

と、少女がうなずいた。

その視線は、自らの従者──ハートレスたちがいなくなった後、絨毯に置かれていたままのトリシャ・フェローズの首に注がれていた。生首を拾い、そっと椅子の上に置いてから、オルガマリーはしばらくその首と向かい合っていた。

「......うん。私、きっと、そうしたい」

と、囁いたのだ。

菱理は、さらに車掌へと尋ねた。

「あなた方は、どうなさるつもりです?」

「魔術師同士の諍いは好きになさればよろしい」

と、車掌はいつもの感情の窺えない声音で話した。

「ですが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンをこれ以上貶められるわけにはいきません。とりわけ、私どもと同じ立場にあたる死徒の落とし子ならば。こちらはこちらで対処させていただきます」

きっぱりと答えて、踵を返した。彼らには彼らの考えがあるのだろう。魔術師たちとは違う、しかし同様に彼らなりの信念に基づいた戦い。

それを見送ったところで、

「─ね、菱理さん、司法取引しない?」

と、今度はイヴェットが切り出したのである。

後ろ手に縛られたまま、なんとも軽い口調だった。昨日はあなたのお弁当を勝手に食べちゃったから、今日は私のお弁当を分けてあげると言わんばかりの。

「司法取引、ですか?」

「うん。もともと、あたしはハートレスのサーヴァント召喚には関わってないでしょ? 誘われたときもついていかなかったし、ここで点数を稼いでおけば、時計塔的にはそんなに問題にならないと思うのよね?」

「.....いいでしょう」

菱理が仰ぐように手のひらを動かした。

その風が触れるや、イヴェットを封じていた布はほどけ、彼女の 足下にわだかまったのである。

「ふっふっふ。愚かな魔術師め、よくぞ我が封印を解放してくれたな……って、ちょっと放っておかないでよ! 深刻そうな顔して付き合ってよ! 寂しいでしょ! ああもう、本当にノリの悪い連中なんだから。あ、そうだメルヴィン、あんた腑海林アインナッシュ

の仔で協力してくれたでしょ。あれやってよ」

「仕方ない。協力しよう。ウェイバーにも関わってるようだしね」

無理やり話を振られて、メルヴィンが肩をすくめる。

とはいえ、青年の方もこの状況では無下に断る選択肢はなかったらしい。

ずっと携えていたバイオリンケースを、メルヴィンは開いた。

中身は想像したとおりの、変哲もないバイオリンに見えた。その バイオリンを肩に構えて、純白の青年はいかにも恩着せがましく口 にしたのである。

「ママの頼みでもない限り、私がただで調律器を使うことはまずな いんだよ。是非心して聞いて欲しい」

それぞれに自分の役割を見定めて、魔術師たちは動こうとしてい た。

しかし。

その隙をついて、もうひとりの人影が走り込んだのだ。

それは驚くほどの速度で万魔眼球庫パンデモリウムに駆け込み、 まだ残っていたオークショナーの隣から、壇上に配されたままだっ た透明な筒をもぎとった。

「泡影の、魔眼を……っ!」

悲痛な声が、車内にこだました。

腑海林アインナッシュの仔が迫ってくる光景を、自分は茫然と見つめていた。

まるで、それは地上の津波だった。氷樹の枝がのたくり、這い回り、恐るべき大蛇の群れと化して、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに押し寄せてくる。黒鍵を打って氷雪林から脱出しようとしたときだって、襲ってくる枝の量はこの数十分の一にもならなかった。死に瀕した腑海林アインナッシュの仔は、文字通りに全存在を賭して、列車を食い荒らさんとしていた。

(これじゃあ.....)

喉が干上がっていく。

自分なんかじゃ、どうしようもない。仮にアッドに秘められた宝 具を解放したところで、すべてを焼き払うなど不可能だ。絶望が五 体から力を奪っていくのを感じた。

「もういいでしょう、フェイカー」

と、ハートレスが呼びかける。

この期に及んでも、男の微笑は柔らかかった。

「後はこの腑海林アインナッシュの仔に任せておけばいい。でなければ、魔力の質ではあなたもひけをとらないわけですから、あの氷雪林に狙われてしまいます。いささか苦しいが、腑海林アインナッシュの仔に列車ごと食われたということなら、君主ロードの死も事故ということでしばらく誤魔化せるでしょうし」

「.....いいだろう」

女英霊が、踵を返した。

もはや、こちらに興味など失ったかのように。

「待て、フェイカー」

と、また師匠が言う。

「話が終わってない」

「どれだけ、その舌はべらべら回るんだ。どうせ、もうすぐあの森に吞み込まれるんだ。それまでの時間ぐらい、命を惜しんでいたらいいだろう」

「そうもいかない。あなたが王の軍勢を憎んでいるというならなおさら」

一瞥したフェイカーに、師匠は青ざめた顔で不敵に唇の端をつり あげた。

「なにしろ、私も王の部下だからな」

「まだ言うか!」

女英霊の唇からこぼれる言葉は、そのまま炎のようだった。

ぎり、と歯軋りの音が驚くほど大きく鳴った。妖しい金銀妖瞳へ テロクロミアは、鮫にも似た捕食者の殺意を込めて、師匠の姿を映 していた。

「ああ、私は王の軍勢を憎むとも!」

ヒトガタをした炎が、吼えた。

「王の築き上げたすべてを破壊した愚か者どもを憎む。そんな愚か者どもの列に、新たに加わろうとする者も! 私に魔術を教え、王を操ろうとしたオリュンピアスも! そんな結末を知ってるのに、なおあの愚か者どもと轡くつわを並べようとする兄も!」

「……ああ、それで分かった」

フェイカーの憤怒に、師匠が目を細める。

「お前が『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』に姿を見せなかっ たのは、王の呼びかけを無視したからだ」

ひどく単純な結論だった。

謎でもなんでもなく、当たり前の理由。

「地球は丸くて世界には最才果ケてアのノ海スなんてない。そう 知ったときには結構堪えたとか、あいつも言ってたか。王も部下も 似てるもんだ。現界すれば世界から相応の知識を授けられるんだか ら、その知識によって豹変する部下がいてもおかしくあるまい。後 継者ディアドコイ戦争なんて結末は、誰ひとりとして望んじゃいな かっただろう」

ああ、これは自分だって知っている。

世界史をひもとけば、イスカンダルの最期など明らかだ。

大遠征がついに失敗に終わり、熱病で死去する寸前、かの王はこともあろうに「最も強きものが帝国を治めるように」などと遺言を残したのだ。彼の正確な意図は分からぬが、その後がどうなるかなど火を見るよりも明らかだった。

それが、後継者ディアドコイ戦争。

人類史においてさえ傑出した領土を誇った帝国は瞬く間に分裂し、有力な将軍同士で相争った。その中には母親たるオリュンピアスすら含まれており、何十年となく戦争が続いた。かつて最才果ケてアのノ海スを目指した同士はそんな馬鹿げた絵空事を忘れ去り、血で血を洗う死闘を繰り返したあげく、その子や孫の世代まで醜く刃を交わし続けた。

夢の果てとして、これほど無惨な結果がどこにあろう。

「お前が王の身代わりだったなら、王より先に死んだはずだ。後継者ディアドコイ戦争なんて生前に知ることはなかっただろう。…… そうか。最初に会ったとき、エウメネスやアリストテレスなどと比べてこきおろしてくれたが、何のことはない。お前はそのすべてを憎んでいたんだな」

「そうだとも」

フェイカーが、即言する。

たとえ王が認めても、自分は認めないのだと。

たとえ王が許しても、自分は許さないのだと。

あの異常なまでの怒りは、数万を超える王の部下すべてに燃やされたものなのだと。いいや、ひょっとしたら彼らを許した王自身をも含めるのかもしれない。

ついで、妙な事態が生じた。女英霊の凜とした眉がひそめられた のだ。

と、声がこぼれていた。

あまりの場違いさに、ほんの一瞬ぽかんとした空気が屋上を流れた。傷ついた師匠は、おかしそうに肩を震わせていたのだった。

「何がおかしい」

「いや、らしいなと思っただけだよ。あれだけの大遠征を強いて、 なお数万の兵士と絆を結ぶほどの大王が、自分の影武者にはそっぽ を向かれるほど怒られていたなんてね。ああ、なんだかんだであい つはいつも詰めが甘いんだ。実は才能がないんじゃないか」

こほん、と咳払いする。

それでも痛みが生じるのか、かすかに顔をしかめてから、

「ありがとう」

と、続けたのだ。

その返答に、さしものフェイカーが息を詰めた。

「……っ、何、を」

「ずっと考えていた。この十年思い煩わない日などなかった。あれの背中を追って至るべき場所に進もうと思ったところで、私は何をすればいいか分からなかった。なにしろ私はどうしようもなく非才の身で、英霊なんて器じゃない。育っていくのは弟子ばかりで、飛び立っていくいくつもの才能を、無様に見守っていくことしかできなかった」

積み重ねるように、ゆっくりと師匠は言った。

ひどく重い、圧縮され続けてきた十年。

「でも、これは胸を張って言えるだろう。いつどこで出会ったとしても、間違いなく自慢できる。何度かしつこく繰り返したって許されるはずだ。同じ話をするのを私の理性が許しそうになかったなら、少々酒の力を借りたっていい。ああ、まさかこんな機会が訪れてくれるなんて夢にも思わなかった。厚く礼を言わなくてなんとする」

「何を、言ってる?」

「うん? ああ、つまりこうだよ」

当然とばかりにうなずいて、師匠はこう続けたのだ。

「あなたのお気に入りに──もうひとりのあなたに一矢報いたぞ、なんて言えば、あいつはさぞかし腹を抱えて大笑いするだろうさ」

Г......

誰もが沈黙した。

その大胆な発言に、自分やカウレスはもちろん、ハートレスまで 呼吸を止めた。

フェイカーも、まるで魔眼に魅入られたごとく硬直していた。今 の師匠の言葉は、現代の魔術師にはかなわぬ失われた大魔術であっ たかのように。

やがて、

「私に、勝てるつもりか」

嚙みしめるように、フェイカーが漏らした。

その言葉には直接答えず、師匠はこちらへと水を向けた。

「グレイ、手伝ってくれるか?」

「.....はい!」

つい、感極まってしまった。

なんて強がりだろう。なんて意地っ張りだろう。それでも不屈に 笑って立ち上がろうとするこの人は、どうしてこんなにも......

(こんなにも......綺麗なんだろう)

見せたかった。会わせたかった。この人がこんなにも訴える 『王』という人に──歴史に刻まれた英霊イスカンダルに、今の姿 を。

とっくに燃え尽きたと思っていた自分の身体に、力が湧いた。

「許せ、マスター」

と、フェイカーが剣を構えなおした。

「この現界ではあなたに忠を尽くすつもりだったが、こんな挑発を 見過ごすわけにはいかない」

「あ~あ」

と、赤い髪の魔術師は大げさにため息をつく。

蒼いスーツは屋上の吹きすさぶ風になびき、彼の嘆きも闇に散ら した。

「こうなる気がしていたから、止めたのに。でも仕方ない。だった らさっさと—」

言いかけたところで、その足下に、突然黒い何かが刺さったのだ。

独特なフォルムの刃に、自分は大きく眼を見張った。

「黒鍵─つ!」

屋上に、新たな人影が現れていたのだ。

漆黒のコートを身に纏い、顔に大きな傷跡を残した老人。固く目 を閉じたままの彼は、その両手に三本ずつの黒鍵を手挟んでいた。 「盲目の身で追いすがったか」

「いいや」

と、老人は否定した。

その白髪もまた風にさらわれ、黒鍵を構えた老人の頰をなぶって いた。

「返してもらった。オークションは無効になったのでな」

かっ、とその目が見開かれた。

カラボーの空いた眼窩に、魔眼がねじこまれていたのだ。けして 丁寧な移植ではなく、無理やりねじりこんだ証拠に、眼球はそれぞ れが余所を向いたままだった。

無論、そんなことでは眼球としては機能しない。だが─

「──元来、魔眼の摘出と移植とは、その相手と霊性をつなげるということだ」

低く、師匠が口にした。

「ある種の心霊手術。縁を切り離すのが摘出、つなぎあわせるのが 移植といってもいい。だから、もともとの魔眼の持ち主──まして摘 出されてから、まだ一日と経ってない相手ならば」

眼球として機能せずとも、魔眼としては機能する─!

カラボーの黒鍵が走る。

その戦闘技術は自分には到底真似できない領域。純粋な身体運用 という面では、古代に生きたフェイカーを大きく上回るそれだっ た。

「受け止めるな!」

ハートレスの言葉に、フェイカーは忠実に従った。

確かに、剣は触れなかった。カラボーとフェイカーの身体はほんの一瞬交錯したきりで、また離れた。

なのに、寸瞬遅れて、フェイカーの剣が断ち切れたのだ。

「ああ、そうか。こういう風に見えていたのか」

カラボーが、笑う。

今のは、カラボーの黒鍵が鋭すぎて切断が遅れたとか、そういうことではない。明らかに時間差で剣が真っ二つとなった。そこだけがコマを落としたフィルムみたいに、時間軸を飛び越えて処理されたのである。

「泡だ」

と、老神父の喉が鳴った。

フェイカーに隙を与えず、その身体が滑り寄る。まるで間合いを盗んだかのような、ぬるりとした接近。単純な身体能力では遥かに上回るはずのサーヴァントが対応できぬ歩法をもって、カラボーが両手に携えた黒鍵が唸りをあげた。

その相手は、サーヴァントだけではなかった。

ついに列車に辿り着いた腑海林アインナッシュの仔の妖よう枝し ――そのことごとくが、触れてないはずの刃に斬断されていく。

「ああ、そうだ。そうなんだ。世界は、泡でできていた」

その声と口調は、普段のカラボーのものとは大きく異なってい た。

(.....操られていたときの、カラボーさんの)

おそらく、それは二重人格とは少し違うのだろう。

抑圧されていたカラボーの欲望や情動、おおよそはそういうもの なのだろう。

「あらかじめ、ミス化野に頼んでいた。カラボーにはオークション やその後の経緯を逐一伝えるようにと」

師匠が、口にする。

ならば、拘束が解けたのも同じ理由だろう。事情を知ったカラ

ボーは、七年前からずっとはめられていたことを知り、戦うことを 決意した。自らの魔眼を回収し、この屋上へと現れたのだ。

「なるほど。こんな事例もありうるんですね」

と、ハートレスは笑って言った。

「通常の視力を失ったがゆえに、魔眼になおさら特化した。普段の 人格では視えなかったものも、今なら視えるというわけですか」

「ハートレス―!」

その笑みをめがけて、カラボーの身体が屋上を跳ねた。

\*

『星の形。宙ソラの形。神の形。我の形。

天体は空洞なり。空洞は虚空なり。虚空には神ありき』

少女の詠唱が、列車内に朗々と響く。

魔術とは、結局のところ、世界を書き換える理だ。

小節カウントが長いほど、その深度もあがっていくが、人間という魂のフォーマットが耐えられるのはおおよそ十小節テンカウントが限界とされる。ここを境に、瞬間契約テンカウントなどと呼ばれたりするのは同じ理由からだった。

もちろん、長時間の儀式によって、魔術の規模や安定度を大きく あげることは可能だが、質という意味ではここで頭打ちになる。現 代の魔術の限界と言うこともできるだろう。

普段なら、これとて天体科アニムスフィアの儀式場を使い、数日 をかけてなる大魔術だ。

今は、メルヴィンの調律があって、ようやく形になっている。そ

れだけかの吐血青年の技術が図抜けているという証拠だった。

補佐はイヴェットが買って出てくれた。

ジャンマリオの使い魔たちが伝える概況を手がかりに、彼女の魔 眼によって精査して、魔術の焦点を慎重に合わせていく。魔眼だけ のスペシャリストかと思っていたが、彼女のサポートは微にいり細 をうがっていた。

# (エルメロイ教室だから.....?)

かの君主ロードの薫陶は、生徒の特性を伸ばすのみならず、こうしたチームワークの面にも影響を与えているのだろうか。それでも時計塔の必然として裏切ったり裏切られたりはあって、だけどその教えはどこかしらでつながっていく。

さらに、メルヴィンの音楽の効用もあった。

魔術刻印の働きを、その音律が増強しているのだった。いわく、 とりわけ複数人による魔術に効くタイプの調律だという。

要するに、魔術師といえども魔術刻印や魔術回路の動作は無駄だらけなのだろう。単体でもそうなのだから、複数でひとつの術式を扱えば無駄はより大きくなる。メルヴィンのやっているそれは、一時的であれど各人の波長を整えてくれているらしい。

美しい音楽に身を委ねながら、

「……そうね。そうよね。やっと分かったわ」

他者の詠唱の途中、オルガマリーはふと呟いた。

トリシャの首が椅子に置かれていた。高いレベルの集中を切らさず、眼を閉じたままのそれに、密やかに話しかける。

「私は、怒るべきときには怒っていいのね」

魔力が踊るようだ。

活性化された魔術回路が、小源と大源の双方を受けて、もはや物理的な熱さえ帯びている。未熟な魔術師ならば、神経を焼き切らせかねないほどの熱だった。

「あなたは、いつか私が怒るのを待っていたの? トリシャ」

返事はない。あるはずもない。

たとえば死霊魔術ネクロマンシーで死者に語らせることはできるかもしれないが、それはやはり完結してしまった死者の情報でしかなく、そのときを生きていた彼女の想いとは異なるだろう。今の少女の考えが身勝手なひとりよがりであったとしても、魔法使いでもない限りは検証することができないだろう。

ただ、今は紡ぐ。

彼女の成すべき魔術を。

『スターズ。コスモス。ゴッズ。アニムス。

アントルム。アンバース。アニマ、アニムスフィア──!』

魔術が──結実する。

フェイカーが、たたらを踏んだ。

女英霊の鎧は斜めに断ち切れ、肩口から血を垂れ流していた。

「その魔眼……一級の概念礼装にも匹敵するのか」

フェイカーの呻きもむべなるかな。

もちろん、アッドだって劣るわけではない。宝具を内に蔵した死神の鎌グリム・リーパーは、サーヴァント相手だろうと十分な威力を発揮してのける。ただ、この老人の魔眼は必要とあればただのナイフでも奇跡を起こしてのけるのだ。

ばかりか、老人の狙いはサーヴァントでも腑海林アインナッシュ の仔でもなかった。

「俺を! 俺を操ったな! ハートレス!」

激情とともに振るわれる刃の相手を知って、フェイカーは逃げる こともかなわなかった。

さきほどの、自分と師匠の逆だ。マスターが襲われれば、サーヴァントは庇わねばならない。それも自分とは桁が違う代行者の戦闘技術相手で、振るわれた刃は実体のみならず、過去からも襲ってくる。列車が走行している以上、過去に配置された斬撃はすぐさま後方に置いていかれるのだが、逆にいうと配置された斬撃は次々に場所を変えて、こちらに牙を剝くのだ。

斬ったという事実が過去から浮かび上がってくる以上、一度斬撃の範囲に入ってしまえば、霊体でも物質でも防御不能。いくらフェイカーの戦闘力が人間を遥かに超越してるとはいっても、ある種の二重現象ドッペルゲンガーといえるこの攻撃を、いつまでもかわしきれるものではなかった。

だが、それだけではフェイカーは抑えられても、腑海林アイン

ナッシュの仔はどうにもならない。さきほどカラボーに断ち切られたのを学習してか、今度の妖枝はぐるりと回って、後ろの車両へと 斜めに迫りつつあった。

そのときだった。

『─あなたたち、巻き込まれないでよ!』

おそらくは使い魔を通して伝えてきたと思しい叫びは、オルガマリーのそれだった。

途端、夜空に星が輝いた。

列車の走る線路からの魔力と相応して、天と地はそれぞれが引き合うように、魔力を通じ合わせる。もしも、その様子を視られる詩人がいたならば、引き裂かれた神々が口づけをかわすように、とでも形容したかもしれない。

そこから何十という光の槍が降り落ちるとは。

まさに、星光の魔弾。

輪舞のごとく群れ集った光が、一斉に叩きつけられる。さしもの 腑海林アインナッシュの仔の繰り出した妖枝が、たちまち拉げ、砕 け、泣き喚くような音とともに破壊されたのだ。

「……ははは、これは大魔術だ」

師匠が、苦笑を嚙み殺す。

天体科アニムスフィアの次期君主ロードたる彼女の大魔術が、腑 海林アインナッシュの仔さえも吹き散らしたのだ。

同時に、戦局の変化も訪れた。

大量の粉塵がまき散らされ、つかのま夜空も覆った中で、飛び離れていたフェイカーが唇から何事かを口ずさんでいたのである。

「我は祈願する。我は祈禱する」

流れた一節に、自分の全神経が強烈な危機を訴えた。

[ nereide ]

### 「―っ、させない!」

こちらも、カラボーの横合いから突進する。

変形させた死神の鎌グリム・リーパーに、ありったけの魔力を吸わせて魔術を無効化する。

いや。

無効化、させられた。

神代の魔術さえも囮。すでに何度か死神の鎌グリム・リーパーに無効化されていた魔術の愚を、フェイカーはもう一度繰り返そうとはしなかった。ひょっとすると、ムキになったように見せて、何度か繰り返していたことさえ、最後の罠に嵌めるための下準備だったのやもしれぬ。

突撃した自分とカラボーの双方を手玉にとって、彼女は会心の笑 みを浮かべたのだ。

「見るがいい!」

女英霊の瞳が、妖光を放ったのだ。

金銀妖瞳へテロクロミア。『強制』のノウブルカラー。あまりに も致命的なタイミングであった。自分はもちろん、師匠もさきほど 吹き飛ばされた際に、魔眼殺しの眼鏡を弾かれていたからだ。熟練 の戦士たるフェイカーには、当然そのことも計算に入っていたのだ ろう。

たちまち、カラボーの動きがぎこちなく停止した。ノウブルカラーの魔眼となれば、通常の視覚を失っている程度では、効果は大きく減退しない。その隙に放たれた蹴りが、老神父の胸を抉り、その身体を屋上の後方に数メートルも吹き飛ばした。

何度か屋上に激突し、弾んだ老人の身体は、水切り石のようだった。

そのまま、フェイカーの魔眼がこちらを捉える。

(駄、目.....っ!)

美しい魔眼の侵食に、細胞という細胞が陵辱されるのを感じなが ら、自分の身体が死神の鎌グリム・リーパーを振り落とした。

\*

いまだ、腑海林アインナッシュの仔の襲来は尽きる様子がなかった。

カラボーが切り払った程度はもちろん、オルガマリーの大魔術を 受けても、第一波が焼き尽くされた程度のこと。核となる樹は先に 控えており、それが健在である以上は襲撃も続くのだった。

もちろん、それは魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン側も認識していた。互いに上級死徒が残したモノである以上、互いの事情もある程度は知っている。よもやこうして争いあうことになるとは想像せずとも、手の内は読めていた。

しかし、運転室で車掌・ロダンは硬直していた。

そこに白い女が佇んでいたからだ。

「支配人代行……」

と、声は虚ろだった。

あの心霊手術を行った以上、すぐさままた現れるとは思わなかったからだ。それだけ、彼女は儚い存在なのだ。かつての支配人が置いていった幻。この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでだけ存在を許された影。実際、想像以上の無理を通している証拠に、半透明の女の姿は、今にもふっと消えてしまいそうだった。

ばかりか、

### 『一魔眼大投射を許可します』

と、白い女は発したのだ。

「お言葉ですが、その措置は」

『この列車をこれ以上傷つけられるのは、ロズィーアンの恥、ひい ては我らの支配人の恥です』

きっぱりとした思念に、車掌のロダンはしばし瞑目した。

やがて覚悟を決めて、その瞼が開いた。

「了解いたしました。支配人代行の指示に従います。レアンドラ、 戻ってきたな」

## 「一分かりました」

万魔眼球庫パンデモリウムから戻ってきて、オークショナーがうなずいたのだ。

こちらは、強奪した泡影の魔眼を自らの眼窩にねじこむという、カラボーの暴挙を見届けた後だった。まさか支配人代行が再び姿を現すとは思わなかったが、心霊手術による再移植が可能なほど回復したわけでもないのだろう。もし、そうだったら、あの場に彼女も現れていたはずだし、それを承知していたからこそ、カラボーも有無を言わさず、自らの魔眼を取り返していったのだろう。

一秒足らずで、オークショナーの指は壁に流れた。

そこに並んだ、新たな魔眼の入った筒のひとつを選び、運転席の 凹部へと差し込む。挿入された筒はみるみる内側へ飲み込まれ、完 全に姿を消した。

## 「魔眼装塡完了」

と、車掌は呟いた。

手元の計器で、その魔眼と列車の機器との反応を見守る。いくつもの計器で針が揺れ動き、その意味を読みとりながら、車掌の指が繊細に動いた。彼にしたところで、実際に扱うことはまずない機器ばかりだった。支配人が姿を消した今、扱わぬまま滅びるだろうと考えていた。

「魔眼大投射シーケンス開始します。基幹車両リルカペロー、魔眼との接続終了。解析まで後三……二……一……終了。接続された魔眼の特性の延伸性を確保。霊質回帰型レンズ・ローズアイ展開」

言葉とともに、運転室の機関が奇怪な音をたてた。

歯車の擦れあう響き……というよりは、むしろ悲鳴に近かった。 人の皮と肉を剝ぎ、骨だけを擦りあわせれば、こんな絶叫をあげる のではと思われた。

「魔眼大投射!」

ぐい、とレバーを引いた。

列車が、瞼を開いた。

### ──列車が、瞼を開いた。

そうとしか形容しようのない光景だった。内実はともあれ、その 姿は古典的クラシックにまとまっていたはずの魔眼蒐集列車レー ル・ツェッペリンの先頭部に、巨大な瞳が現れたのだ。

いいや、魔眼が。

オークショナーが選んだ魔眼は、『炎焼』のノウブルカラー。

その魔眼に百倍する威力を発し、巨大な瞳から発せられた神秘は、襲い来る氷樹の枝を見渡す限りに焼き払ったのだ。

あの氷雪林でイヴェットが使った『炎焼』の魔眼と比べれば、その桁外れぶりは明らかだ。その恐るべき火力も範囲も、ノウブルカラーに匹敵するはずのイヴェットの偽造魔眼を、ふざけた差をつけて超えている。まるで花火とミサイルだ。比べるのも愚かしいほどの、絶大な神秘を、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは有していた。

そして、もうひとつの異常が、屋上では起きていた。

## 「あ.....あ.....」

目の前で、低く呻きがこぼれている。

自分にも、信じられなかった。フェイカーの魔眼──『強制』のノウブルカラーが、再び自分を制圧したかと思われた。実際、半ばはそれを覚悟して、刹那でも早く切り込もうとしていた。

## 「今の、は」

吹き飛ばされた先で、カラボーもかぶりを振る。今のは確実に魔 眼に囚われるタイミングだった。戦士として、フェイカーは間違い なくふたりの上を行っていた。

ならば、この結果は。

女英霊の身体が、おびただしい血を流しているのは何故なのか。

「.....お前は.....」

鎧の裂け目を押さえ、フェイカーの唇の端が血泡を噴く。

やったのは自分の死神の鎌グリム・リーパーである。渾身の手応えはこの腕に残っている。身体を斜めに裂いた一撃は、いかにサーヴァントとはいえ重体を免れないはずで、なのにこの女英霊は片膝さえつかずに厳しく師匠を睨んでいた。

「この機を、待ってたのか。私が魔眼に頼るときを」

「一ああ、きっと魔そ眼れに頼ると思っていた」

背後で囁いた師匠が、あの礼装を手にしていたのである。

ナザール・ボンジュウ。

眼球をモチーフとした、邪視より身を守るための護符。

視られる力と、師匠は言っていた。七年前と今回の事件でカラボーを操ったのは、視られる力を利用した催眠術メスメリズムであり、魔眼の力が強ければ強いほど抗いがたいのだと。今、師匠はそれを逆用して、フェイカーをつかのま無力化したのだ。

「もちろん、私の魔術じゃなくてミス化野のものだよ」

砕けたナザール・ボンジュウを手に、師匠が言った。

込められた魔力の強度に耐えられなかったものか、眼球を模した お守りはさらさらと崩れ去っていった。

ハートレスは動かない。

先の蹴りで胸骨を折られたのか、カラボーもうずくまったままだ。

魔眼大投射によって腑海林アインナッシュの仔が一時退けられ、

静まりかえった屋上で、師匠は語りかけた。

「ひとつ、訊いておきたい。......私をこきおろしてくれたやつだが、ひょっとして、生前のあなたもやってたんじゃないか」

「.....つ」

ふと、思い出す。

あのとき、フェイカーは、師匠を呼びだしたのは自分の興味を優先して貰ったからだと言っていた。列車の最後尾に師匠を呼びだした──初めての戦いのとき。

「あなたの思考を追っていけば、生前のイスカンダルの腹心すべてにああいう絡みをしてたとしても、何ら不思議はない。むしろ、慣れた物言いからすればその方が自然だ。お前なんかがイスカンダルの部下になるつもりかと、全員にふっかけるぐらいは十分考えられる。……もしも、あいつがいたら、私とあなたを、ヘファイスティオンの名を持つあなたたち兄弟を会わせたがったかもしれないな」

「.....ふざ、けるな」

淡く微苦笑した師匠に、嗄れた声で、女が言う。

「たかが半月ばかり阿った雑兵ごときが、失われた我が王を語る な!」

「失われなどしない」

師匠の声は、ひどく切実だった。

「失われたりはしないんだ。王の影よ。たとえ、偉大なる王が築き上げた国が砕かれ、将軍同士が殺し合い、ありとあらゆる者から忘れられ─歴史から抹消されたとしても、その意味が失われたりはしないんだ。だからこそ、私は今ここにいるんだ!」

「詭弁だ!」

フェイカーが叫ぶ。

その折れた剣が、ごうと唸った。

十分に警戒して、受け止めたはずなのに、自分の身体は大きくず りさがった。

恐るべき耐久力だった。英霊とはこれほどのものか。人間ならずとも絶命してしかるべき傷を受けて、なおもフェイカーは健在だった。かの大英雄とともに、世界を一度は征服しかけた者の底力。

「そこの魔眼使いが私の剣を封じた。お前の弟子は私の魔術を封じた。そしてお前は私の魔眼を封じた。ああ認めよう。そのひとつひとつが、お前の行為ではないにせよ、人を率いる者として何かしらの才はあるんだろう」

ひとつひとつ、区切るように、女が言う。

「ならば、これからも生き延びてみるがいい」

折れた剣を振るうと、虚空が引き裂けた。

その内側から黒雲とともに現れたる偉容は、あの神威の車輪ゴルディアス・ホイール。

ついに、女英霊はかの宝具を呼び出したのだ。虚空を撃つ、稲妻 の蹄ひづめ。戦車を牽く骨の竜は、いかなる怨敵も滅ぼし尽くさん と猛っていた。

「その竜種も、ディオニュソス信仰の蛇崇拝からか」

「王から戦車を預かったとき、王がゼウスの神威によりて戦車を操るように、私は魔術によりて戦車を操った」

後から、師匠に聞いた。

たとえばコルキスの魔女メディアが、裏切り者であるイアソンを 殺した後、竜の戦車に乗って消え去ったように、神代のギリシャ文 化圏内では比較的ポピュラーな伝承らしい。だからこそ、師匠はこ の英霊が魔術師であると見極めていたのだろう。

「いいな、マスター」

「はは、君のお好きにどうぞ」

無邪気に笑って、ハートレスが戦車に乗り込んだ。

フェイカーが手綱を振るうや、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと併走しながら、戦車は大きく弧を描いた。一旦距離を取ったが、その間合いこそは必殺。自分たちはおろか、列車ごとすべてを砕きかねない、英霊の真価。

「あれを……どうやって」

と、見上げた自分は呻いてしまった。

カラボーの黒鍵も、あんな場所には届かない。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの側面上方に位置する以上、さきほどの魔眼大投射も範囲外だろうし、ましてやオルガマリーの大魔術が連発できるとも思えない。

「一グレイ、お前に任せる」

師匠は短く言って、こともあろうにそのまま屋上に座り込んだ。

「師匠?!」

「今ので、こちらも打ち止めだ。私の命は預けよう」

そんなことを平然と言って、師匠は小さくうなずいたのである。

\*

魔眼大投射は、腑海林アインナッシュの仔に確かな打撃を与えた。

だが、見守るスタッフには、一矢報いたという優越感など微塵もない。

それも当然か。

「消費魔眼排出」

がこん、と音を立てて、さきほどの透明な筒が排出された。その 内側では、神秘を成したばかりの魔眼が、無惨に黒く変じていたの である。 Г......

車掌もオークショナーも、一言も漏らさない。だが、その意味は 明らかだ。

たった一度で、魔眼は焼き切れていた。

その光景を見れば、どれほどの魔術師が悲鳴をあげるだろう。卒倒する者がいてもおかしくない。そこらの貴石などまとめて袋詰めにしたところで足下にも及ばぬ希少な魔眼を、この魔眼大投射はたった一度で使い切るのだ。

ぎり、と車掌が奥歯を嚙み、冷え切った赤い血が顎元まで滴った。

支配人代行の指示に、さしもの彼が逡巡したのも当然だ。かつての主人の列車を守るためとはいえ、主人の蒐集したコレクションを欠けさせねばならないというこの矛盾。たった今死ねたものならば、全員がその結末を選ぶのに。

だが、使命はそれを許さない。

この列車を守ることこそは、彼らへ最後に託された使命であった。たとえかつての支配人が何も言い残さなかったとしても。

「続けて、魔眼装塡します」

オークショナーが囁き、凹部へと新たな魔眼の筒を差し込んだ。

車掌も、もはや呻きひとつ漏らさなかった。

焼き払った先から、新たな死の枝が雪崩れこんでくるのが見えた。腑海林アインナッシュの仔はいまだ諦めていない。自分たちが諦めていないように。だったらやるべきことは決まっている。

「魔眼装塡完了確認。第二投射シーケンス始めます。魔眼との接続終了。解析まで後三……二……一……」

声に悲壮さを滲ませないのは、プロとしての矜持。

再び、彼は禁忌のレバーを引く。

#### 「魔眼大投射!」

怪しく光る大魔眼は、今度は押し寄せる氷樹の枝をたちまち枯死 せしめたのである。

\*

再度放たれる列車の魔眼とともに、夜空を駆ける戦車は美しい弧 を描いた。

虹のようだと思った。もしも魔力が目に見えるならば、きっと鮮やかな光が網膜に映ったのだろう。限界以上まで『強化』された自分の耳は、そんな戦車での囁きまで聞き取ってしまった。

「私が……私たちがあんなところで死ななければ……あんな分裂は 起きなかった……!」

それは、悲鳴だった。

それは、慟哭だった。

英霊たるほどの魂に刻まれた、どうしようもない烙印だった。

ふと、昨日見た夢を思い出した。

- ――『お前はどうしてこんなものを求めた。どうしてこんなものを 手放さなかった。夢だと知っていただろうに、どうして夢だと割り 切らなかった』
  - ─ 『答えろ、イスカンダル─!』

あれは、どちらのイスカンダルへの叫びだったのだろう。

本物のイスカンダルか、それとも偽者であるフェイカー自身に だったろうか。どちらでもあり、どちらでもない気がした。 そして、そんなベクトルを吹っ切るように、形の良い唇が口上を 紡ぐ。

「我が忠誠は王のもとに! この一時、雷の御名を貸し与えたまえ!」

真名解放。これまでの戦いでは、ついにフェイカーが使わなかった宝具の真骨頂。

だとすれば、対抗できるものなどひとつしかない。

「……突破します」

と、自分は口にした。

心を冷やす。不要な機能を停止させる。自分はただ大いなる神秘のための歯車。機構しんぴのための部品となりはてて、ひたすらに 精度を研ぎ澄ませる。恐れとも迷いとも遠いどこかに、自分の意識 をトランス状態に浮上させる。

ああ、だったら、これは稼働音なのだろう。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……Crave望んで……Deprave堕落 させて……」

こぼれる呪文。自己暗示はさらに深く。

大マ源ナは十分だ。ただでさえ霊脈レイライン上にあり、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンも、無尽に押し寄せる腑海林アインナッシュの仔も、自分が喰いきれないほどの魔力を蔵している。この環境ならば、間違いなく自分の宝具は展開できるだろう。

(でも.....届く?)

自分が、あの戦車に打ち勝てるのか。

いくら最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドをもってしても、かのフェイカーは真正のサーヴァントだ。たとえ偽者を意味するクラスであろうと、その真価が変わるはずはない。そんな怪物に、自分が打ち勝てるのか。

疑念をよそに、自動的になった自分の唇は、定められた言葉を呟

いていく。

「Grave刻んで.....me私に.....」

「落ち着きたまえ」

と、声がかかったのだ。

カウレスに支えられて、血まみれの老人が歩み寄ってきたのだ。 フェイカーに喰らった一撃は、思った以上に重体だったらしく、蹴 破られた傷跡は内側で砕けた胸骨の白さまでも露わにしていた。

(カラボー.....さん)

声は出せない。

すでに自分はトランス状態に入っているし、展開途中のアッドは 死神の鎌グリム・リーパーから分解して、光の柱のごとき姿になっ ている。対してカラボーの瞳は白く濁りはて、それでも眩しそうに 目を細めていた。

「......ああ、驚いた。それは宝具だな。人の身で扱えるだなんて」

フェイカーと戦っていたときの衝動的な人格はもう失せたのか、 それとも以前の催眠術で操られていた状態をそのままに受け容れら れたのか、カラボーの口ぶりは自分が知る柔らかなものに戻ってい た。

そのカラボーが、ひどく静かに諭してくるのだ。

「どうやら、この槍には祈りが詰まっている。十三のカタチに凝縮 された祈りだ」

それも、魔眼の視せる光景か。

自分には分からない。

なのに、老人は優しく笑って、言ってくるのだ。

「耳を澄ませたまえ。槍の声に。古く、誰かが祈った在り方に。君 は、そういうことに長けているはずだよ」

(祈った在り方.....)

なんだろう。それは。

なんだろう。だけど。

どうして、ほとんど光の柱となった中から、アッドの声が聞こえるのだろう。

「イッヒヒヒ! 在り方と来たぞ! なあグレイ! お前はずっと膝を抱えて部屋の隅でうつむいてたろうが! そんなお前が、自分がどういう風に在りたいとか考えるはずもなかったってのにな!」

#### (アッド.....)

けたたましい声音に、何度かカラボーが瞬きする。

かまわず、アッドは続けた。

「でもなあ、お前も自分に訊くべきときだぞ! お前がどうしたいのかってな! ああ、お前がどうにかなりたいってんなら、そりゃあ口に出すべきだ! なんとか守りたいものがあって、それを誰かに手伝ってほしいなら、言わなきゃ誰にも分からないだろ!」

### (アッド.....あなたは.....)

ひどく饒舌な相手に、なぜだか胸が苦しくなった。

故郷にいた頃、たったひとりの友達であってくれた礼装が、問いかけてくる。そういえば、幼い頃はしょっちゅう愚図グレイとかなんだとか呼ばれては泣かされていた。長ずるに従ってその呼び名も減っていたのだが……ああ、師匠についてロンドンに行くことを決めてから、完全になくなったのだ。

「拙、は.....」

声が、こぼれた。

トランス状態だから、ひどくぎこちない。自分の意思の在処が不確かだ。

それでも、これだけは頑張って、言葉にする。

「拙、は、師匠を、みんなを、守り、たい。守れる、自分で、いた い」

「ヒヒヒヒヒ、確かに聞いたぞ愚図グレイ―」

「──疑似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。第二段階限定解 除を開始」

アッドの声が、いつもの自動音声に切り替わる。

続けて、自動音声は自分が初めて聞く内容へと移った。

「 十三拘束解放シール・サーティーン──円卓議決開始デシジョン・ スタート! 」

ر د----

その言葉が、昔聞かされた伝説を思い出させた。

本来、聖槍は武器ではないという。

人類が霊長の座についたとき、本来の神秘は終わりを迎えたのだとも。その代わりに惑星は人間に最適化された『物理法則』という敷物テクスチャで覆われ、この薄皮一枚の敷物テクスチャを維持するために、いくつかの錨が大地へ突き立てられたのだという。

最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドは、その一振り。

世界を維持するためにつくられた錨は、騎士王の手に渡り、いつしか王とその騎士たちになぞらえられた封印を施されることとなった。

すなわち、聖槍の『力』を制限する枷。十三拘束。

複数の誇りと使命を成し遂げられるであろう事態でのみ、本来の

### 聖槍は解放される。

完全解放のために必要な議決数は七つ。

今、聖槍の内側で、円卓議決が宣言される。

「是は、生きるための戦いである」 ──承認、ケイ。

「是は、己よりも強大な者との戦いである」 ──承認、ベディヴィエール。

「是は、人道に背かぬ戦いである」 ──承認、ガヘリス。

「是は、真実のための戦いである」 ──承認、アグラヴェイン。

「是は、精霊との戦いではない」 ──承認、ランスロット。

けして、すべてではない。



半数にも届かない、たったの五つ。

だけど、たった今解ゆ放るされた五拘束が、自分が今までに見たことのない光を、槍から迸らせていた。何よりも、それだけの祈りが認め、後押ししてくれている事実が自分の心を支えてくれた。

( ─これ、なら )

決意を、固める。

「第三段階限定解除を開始」

新たな自動音声とともに、トランス状態にある自分も、最後の文句へと移っていた。

「Grave墓を掘ろう……for youあなたに……」

歌う。謳う。詠う。

古き神秘ミステルよ、死に絶えよ。

甘き謎よ、ことごとく無と帰せ。

彼方で、フェイカーが手綱を振るうのが見えた。

「いざ駆けよ、魔天の車輪へカティック・ホイール!」

いまや戦車は月を背として翻り、一筋の流星となった。

地上を征ゆく星の、なんと激しく麗しいことか。迸る魔力の膨大 さなど今更語るまでもない。あの対軍宝具の突撃が地表を抉ったな らば、クレーターのひとつぐらいはたやすくできあがるだろう。

稲妻を纏う、獰猛なる一条の星。

こちらも、ゆっくりと槍を掲げた。

「聖槍、抜ばつ錨びょう」

自らの槍を見上げながら、ふと思った。

なんと、この光は眩いのか。

なんと、この胸は滾るのか。

古い時代の騎士たちは、誰もがこんな心を燃やしていたのか。

もはや戦車はすぐ目の前まで迫っていた。発する稲妻の熾烈さゆえに、眼球を焼かれたかとさえ錯覚した。応ずるように、自分の手の中の聖槍は、より純度の高い光に収束する。極限まで収束されすぎた光が脈打って、今にも暴れ出してしまいそうだ。

さあ、叫べ。

咆哮のままに、解き放て。

「最果てにてロンゴ、輝ける槍ミニアド──!」

捻れる光が、疾駆する。

灼熱も稲妻もこれに比べれば生温い。ありとあらゆる物質を消滅させながら、光の奔流は魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの屋上から夜空へと一直線に放たれる。いずこなりや天の国。いずこなりとも、我が光芒が撃ち落とさん。

その内側に、魔天の車輪へカティック・ホイールもまた消えていった。

星とて撃ち落とす光が、やがて宿命だったかのように、夜の腕かいなへ吸い込まれていく。

\*

「......どう.......?」

すべてを解きはなって、自分は茫然と呟いた。

普段なら、昏倒しているところだ。実際数秒ほどは意識を失っていたように思う。ひょっとすると、自分が気づいてないだけで数十分とか数時間とかかもしれない。できることなら、このまま倒れ込んで泥のように眠っていたかった。悲鳴を訴えているのは身体だけじゃなくて、過剰に稼働させた魔術回路も同様だった。脳にも神経にも疲労が沈殿していて、頭のてっぺんまで泥に沈み込んでいる気分であった。

でも、今だけは倒れられなかった。

ここで倒れてしまえば、数日は立ち上がれないだろうと確信していた。それまでにすまさねばならないことがいくつもあった。

### 【裏返れ】

宝具を放つ直前、そんな声を聞いた気がしたからだ。

だから、周囲の無事を確認するまでは、どうしても倒れることなんてできなかった。

ひたすらに、身体を動かす。さっきまで羽毛より軽かった五体は、血管と言う血管を鉛にでも置き換えたみたいだった。ただ振り返るだけで一時間もかかったように思えて、それでもぎこちなく、みっともなく屋上を這いずった。

# 「グレイさん!」

その向こう側で、カウレスが待っていてくれた。

眼鏡をかけた少年の腕の中で、ぐったりと老人が力を失っていた。

### 「……カラボー、さんが」

少年の震えた声の続きを聞くまでもなかった。 いくら代行者の鍛えられた肉体とはいえ、この老体で胸骨を砕かれて生きながらえら

れるはずもない。いや、ひょっとすると魔眼を眼窩に戻したときから、脳と肉体の限界を超えたのかもしれない。はたして、最果てに て輝ける槍ロンゴミニアドの発動する姿も、見られたかどうか。

最後に彼が視た景色は、過去だったのだろうか現在だったのだろうか。

隣から、声がかかった。

「最後まで、助けてもらったな。……私には、この人を助けられなかったのに」

「......師匠」

どうしよう、と思った。

いままでこんなことはなかったのに、熱いものが頰を流れて止まらなかった。とても大切なものをもらったのに、贈ってくれた誰かにはもう会えないという事実。そんな事実と向き合うのが初めてで、どうしたらいいのか分からない。師匠の側を振り向きたいのに、どうしてもできなかった。

どうやら、列車は腑海林アインナッシュの仔の範囲を抜けたらしかった。

新たな魔眼を列車が開くこともなく、代わりに地平線が徐々に色づきつつあった。

師匠が、小さく息をつく。

「オークション開始までも、ずいぶん引っ張ったからな。もうそん な時間か」

「あ、あ.....」

きっと。

自分は、この色を生涯忘れない。

これからの一生で似た色を見るたびに、あのとき大切なものをもらったという記憶を思い出すのだろう。泡のように過去が浮かび上がってくるたび、その苦さと温かさを嚙みしめるのだろう。

まるで、それは儚い夢のような。

いまだ陽の姿も見せぬまま、しかし朝焼けの朧な緋色が、線路の向こうに淡く淡く滲んでいたのであった。



それからのことは、いくつかのエピソードに分かれる。

まず話すべきは、やはりカウレス・フォルヴェッジについてだろう。

帰ってきて、自分も師匠も一週間ほど時計塔が運営してる病院に 入院することとなった。現代医学と魔術による治療を併用してる場 所で、ほとんどは魔術師のみで利用しているらしい。秘匿の問題も あるが、副作用を抑えるために専門的な知識を必要としたりするこ とから、どのみち一般人には利用不能だそうだった。

そのおかげかどうかは分からないが、自分も数日ほどでずいぶん 回復した。

清潔で近代的な病院と、大釜で緑に煮えたぎる薬液を直接カップに盛ってくる手法とは実に相反した印象だったが、効果は覿てき面めんと言えただろう。

その見舞いで、カウレスが姿を現したのだ。

かぐわしいフルーツを持ってきてくれていて、林檎をペティナイフで剝きながら、あの事件が死徒同士の内紛として処理されたこととか、魔眼オークションの常連たちも肝心なところで使い魔たちを封印されていたせいで、無駄な情報の流布は避けられたこととか、教えてくれた。それでも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと腑海林アインナッシュの仔が激突したというニュースはあちこちで観測されたらしく、今後も魔術界の一部を騒がすだろうとのことだった。

時々、会話の苦手なこちらが言葉を探してると、何気なく花や景色を見て気まずくならないようにしてくれて、こんな自分でもひどく過ごしやすかった。こんな魔術師もいるというのが、なんとなく不思議だった。

その途中で、ふとこんな風に切り出された。

「え、と、ドクター・ハートレスから、俺の姉さんの話を聞いたん だって?」

白い病室で、恥ずかしそうに、カウレスが鼻の頭を搔いたのだ。

「あ、そ、その、ごめんなさい」

「いや、いいよいいよ。別に隠してるわけじゃないし」

笑って、少年は眼鏡をかけなおして、なんとなく遠い目になった。

「姉さんはさ、俺よりずっと魔術師の才能があった。フォルヴェッジ家を知る誰もがそれを認めていた。俺でも先生に会ったら、少しはマシになれたんだから、もしも姉さんが先生に会ってたら……なんて思うことはそりゃあるよ」

少年の言葉は、ハートレスが化けていたときと似ている。

師匠は憑依経験と言っていた。極まった変身術はある種本人が乗り移るようなものなのだと。だけど、自分はそれでも何かは違うように思った。違っていてほしいという願望かもしれない。

「でも、俺はスラーが好きだよ」

と、彼は言った。

スラー。現ノ代ー魔リ術ッ科ジの運営する街。

実際は街というにはいささか誇張のある、ツギハギめいた通りストリートなのだけど、それでも名前を口にするカウレスは嬉しそうだった。

「偽者が現れるなんて思わなかったけれど、それでもここに来て良かった。先生に会えて良かったし、みんなに会えて良かったと思ってる。ほかの誰かじゃなくて、この俺が」

ぽん、と自らの胸を叩く。

ベッドに横たわったこちらを優しい目で見つめて、言う。

「フラットもライネスも、みんな君と先生の帰りを待ってる。とりわけスヴィンは君が傷を負ったって聞いて、第一科ミスティールでの特別講義の残りを放棄しそうなぐらいに興奮しちゃってさ。半ば獣化してこの病院に走り込もうとするのを、みんなで必死に止める羽目になったんだから」

「......拙に、とどめでも刺そうとしたんじゃないでしょうか」

「ははは」

陽気に、少年は笑った。

自分で切った林檎を一切れつまんで、こんな風に言い残した。

「だから、早く良くなって」

\*

もう数日したころ、退院になった。

まだあちこち痛むところはあるが、とりあえず病院でできる治療は終わったから、さっさとベッドを空けろということらしい。世知辛い気もするが、こちらとしても動けるのにベッドで寝ているのは性に合わなかったので、都合は良かった。

手続きを済ませると、病院の出入り口に見慣れたコート姿が立っていた。

「師匠」

「君に比べれば、軽傷のつもりだったが、同日の退院とはね」

「全然そんなことないですよ」

かぶりを振って、隣に添った。

車椅子は必要ないようだったが、まだ片手に杖をついていたからだ。ひょこひょこと歩きにくそうにしているけれど、こちらから支えることはしない。きっと、そういうのは好まないだろうから。

嗅ぎ慣れた薬の、青苦い香りがまだかすかに漂っていた。

「スラーに戻るぞ」

「はい」

言った師匠に、つい弾むようにうなずいてしまう。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジの都市スラーへは、近くまでバスを使った。

魔眼殺しの眼鏡が高くついたし、節約せねばならないとは、師匠の言葉だ。それもしばらくぶりに触れる師匠らしさな気はしたので、素直についていった。ただうっかりハミングしないように堪えるのは苦労してしまった。

いくつか通りを曲がり、例の一般人よけの結界をくぐりぬけると、パッチワークみたいな街並みが視界に開けた。

ただ、今は懐かしさより、別のことで立ち止まった。

通りの一角に、極東の民族衣装が翻っていたからだ。

振り袖と言われるその衣装に、今は鶴が描かれている。確か日本では、その声が遥か彼方まで届くことから天の使いとも言われているのだと、師匠の講義で聴いたことがあった。あのときの講義は、対してヨーロッパでは『目覚め』を意味する鳥であり、いくつかの寓意譚や紋章に白い石を握る鶴が描かれているのだとか、そんな風に続いた気がする。

化野菱理であった。

「ああ、今日退院だと聞いていたけれど、会えて良かったわ」

「そらっとぼけるな。偶然のはずがあるか」

「あら、まだ杖はいるのね?」

返しは無視して、菱理が指摘する。

師匠も十分予想していたものか、軽く鼻を鳴らしたきりで、かつんと地面をついた。

「もう一週間ばかりは必要だそうだ」

「そう。お大事に。......今日は、預かっていた証拠品を返しに来たのよ」

と、菱理は小さな箱を差し出した。

ほんの少しだけ開けて師匠が確認したその中身に、また泣きそうになってしまった。

師匠があれほどの犠牲を払っても回収せんとしていた聖遺物──古ぼけた、朱い布切れが入っていたからだ。

蓋を戻して、大切そうに師匠はスーツの懐にいれた。

「感謝する」

「七年前の事件は、結局不問になりました」

と、菱理が続けた。

「聖堂教会も、いまさらあの事件を蒸し返して、自分が出した担当者が犯人に操られていたなんて証言するのは面子が立ちませんから」

それはそうだろう。魔術協会に責を問うにも、ハートレスは元学 部長であり、現在時計塔に籍を置いてないのが大きかったらしい。 ましてや一般の警察では、それだけ複雑に魔術側が介入した事件を 調査できまい。

闇から闇へ。

また、ひとつそうした事件が増えたということ。

「ひととおりの検証が終わりましたので、イヴェット・L□レーマンも解放ということになったそうです」

煉瓦とコンクリートの混じった古くて新しい通りを、菱理はそっと見回した。

それから、

「ひとつ、あなたにお訊きしたかったのですが」

と、師匠に持ちかけた。

「なんだね?」

「事件についてです。ご自身の推理の穴は、ご自身が一番お分かり でしょう?」

「どうして、サーヴァントを召喚したか」

即座に返した師匠に、菱理は微笑んだ。

「そう。確かに境界記録帯ゴーストライナーは貴重な資料です。魔術師であれば、命にかえても呼びだしてみたいと思っても不思議はない。ですが、同じように貴重な資料がないわけじゃない。魔眼だってそのひとつです。言ってしまえば、リターンに対してリスクが大きすぎる。

それに、あなたの推理通りなら、事件の際ハートレスはカラボーを操っていたことになります。だったら、イスカンダルの聖遺物を使ってフェイカーを召喚すれば、名もなき影武者が現れることは十中八九読めていたはず」

自分にも、その理屈は納得できた。

だって、カラボーは最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドから十三 拘束だって読みとったのだ。だったら、イスカンダルの聖遺物から 過去の影武者が見えないとは思えない。あれだけ巧妙に計画を練っ ていたハートレスならば、当然それぐらいは確認するだろう。

「事件に、続きがあるんだろう」

と、師匠も小さくうなずいた。

「私を必死に助けたのは、この段階で君主ロードが死ねば支障があるからだと言っていた。つまりは今後の計画も用意してることになる。ああ、いずれ、また会うことになる。きっと」

やはり、師匠もハートレスとフェイカーが生存していることを確信していた。あそこで引き下がった以上何らかの傷は負っているかもしれないが、最後に聞こえたあの呪文は、彼らを生き残らせただろうと。

そこまで言ってから、師匠はふと訊き返した。

「こちらも、ひとつ質問したかった」

「どうぞ。あなただけ答えさせるのは失礼ですものね」

菱理が促すと、こほんと咳払いしてから、師匠はこう続けたの だ。

「あなたが、ナザール・ボンジュウの意味を見落とすとは思えない。推理を盤石にするため、わざとやったにしても、それなら押収してからそんなものはなかったとやる方がよほど安全だ。最初は、あなたが誰かに正しい推理を促してるのかとも考えたが、それにしては婉曲すぎる。あなたが目をつけそうな私にしても、当時は昏睡状態だった」

「……なるほど。ですが、あなたならすでに仮説も持っておられるのでは?」

### 「一応は」

と、スラーの街並みを見上げて、師匠が囁く。

今日は気持ちよく晴れた空だった。もう冬だというのに、ほんのつかのま、太陽の差しこんでぽかぽかと暖かな時間。ふたりの魔術師にも話の内容にも相応しからざるが、いずれ失われる一時の温度と思えば、案外近しいのかもしれなかった。

「最初、あなたは魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗ったのを、私用だと言っていた。あれが……少なくとも半分は嘘でなかったとしたら? わざと間違った推理を開帳することで、特定の誰かを泳がせ、おびきよせたかったのだとしたら?」

「私にとっても、今回の事件は予想外ばかりでしたよ」

念のため、というように、法政科の女魔術師は言った。

「もっとも、おおよそはあなたの仮説通りですけどね。だから、あなたが協力を申し出たときにもすぐ受けましたし、トリシャ様の首やナザール・ボンジュウにも、素直に魔術をかけたでしょう?」

「ああ。感謝してるとも。でなければ、だいぶ苦労することになっただろう。場合によっては命を落としたかもしれない」

「命の恩人じゃないですか」

#### 「結果論だ」

無愛想に、師匠が唇を歪める。

その表情がおかしかったのか、くすくすと笑い声を零してから、

「質問の答えですが、あなたとライネス嬢と似たようなものです よ」

と、菱理は口にした。

冬のロンドンで、鮮やかな振り袖を翻して、いつものように彼女 は微笑んだ。

「……ドクター・ハートレスは、私の義理の兄にあたります。ふたりともノーリッジの養子だったんですよ」

\*

「一おや。兄と内弟子ならさっき退院したところだぞ」

ライネスは、きょとんと視線をあげた。

かすかに消毒液の香りが漂う、リノリウムの廊下である。

愉しげに目が赤く輝いていた。この病院は魔術師御用達なので目薬も使っていない。医者にしる看護師にしろ、その程度でおたつく者はいないのだ。

「君、間が悪いとか言われたことはないかな」

「べ、別にあのふたりに会いに来たわけじゃありません!」

「それは失礼。自分が事後処理で来たものだから、勝手な思い違いをしてしまったな。なにしろ貴重な秘薬を追加提供してくれた方がいたものだから、残った分を病院で接収されるところだった」

くつくつと、少女が肩を震わせる。

「事件についても、口添えしてくれたようで」

「アニムスフィアが借りをつくるわけにいかないからよ」

十一歳ほどの少女──オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィアは、なめらかな銀髪を指でくしけずりつつ、答えた。

それから、これは向き直って、すっと頭を下げた。

「トリシャのことは感謝してます。少なくとも彼女が伝えようとしたことを、ロード・エルメロイは代弁してくれました」

「兄ならII世をつけてくれ、と言うところだな」

片目をつむって、ライネスが感想を口にする。

そんな相手を数秒見つめてから、オルガマリーは話を切り替えた。

「本当は、七年前のことも訊こうと思ったのだけど、お父様は会ってもくれなかったわ」

「おや」

意外な話題転換に瞬きしていると、天体科アニムスフィアの少女 はこう続けたのだ。

「お父様は、一度聖杯戦争に期待して、諦めた。それは本当だと思う。もしもあの聖杯戦争が期待通りの代物だったら、まるで違う結果になってたのかもしれないけれど……それは私の知らない時間で、私の知らない世界ね」

「案外詩人だな」

かあっとオルガマリーは頰を染めた。

視線をそらし、窓の外を見やったところで、意外なものが硝子に 映っていた。

「気に入った。つまり、公平フェアな情報提供をってことだろう?」

ライネスが、まっすぐ手を伸ばしていたのだ。

「なにしろ、お互い君主ロードの次期後継者だ。貴族主義同士なんだし、この機会に交流を深めておくのは悪いことじゃないと思うが」

「あなたは、ずいぶんあの兄と違うのね」

「それはまあ、血もつながってないからな」

愉快そうに唇を歪めた年上の少女に、オルガマリーは小さく息を ついた。

それから、伸ばされた手を握った。

「そうね。あの兄はともかく、あなたとは仲良くできそう」

「どうぞ、互いに利用価値のある間はよろしく」

その言葉に、オルガマリーもまた自信のこもった笑みを浮かべた のであった。

\*

それきりで化野菱理と別れた後、現ノ代ー魔リ術ッ科ジ本部の学 術棟は結構な騒ぎになった。

師匠の姿を見つけたエルメロイ教室の生徒たちが、大盛り上がりで迎えたからだ。師匠の人気がはっきりと伝わるのは、自分も嬉しかった。ただ、今は身体に差し障るということで、心を鬼にしてほかの生徒たちを退けていった。

わいわいとした騒ぎは、ホールから階段をあがり、ついに私室に 入るまで続いた。

こちらが背中で強引に扉を閉め切ったのを確認すると、師匠は杖を近くに置いて、椅子に深く座った。ついで、無理やり窓や天井から突破してくるような生徒がいないかもチェックしていると、大きく師匠が呻くのが聞こえた。

### 「ライネスのヤツ.....」

どうやら、飛行魔術やら入院中の仕事の弁済という名目で、書類 仕事をたっぷりと押しつけていったらしい。師匠の顔が苦み走って いるのは、傷が悪化しない程度のギリギリを、彼女が狙い澄まして いるからでもあるだろう。

「あの、手伝えることがあれば」

「いや、いい。君主ロードの仕事だ。ひとつずつ片付けていく」

硬い顔で言って、鷲獅子グリフォンの意匠が入った万年筆を手に 取った。

しばらく、筆先が紙をひっかく音が続いた。自分も少し間があいたので、ひさしぶりに部屋の掃除をすることにした。アパートと違って基本的にはよく整頓されている部屋なのだが、一週間以上も留守にすれば埃がたまる。

羽はたきであちこちを軽く叩きながら、ふと尋ねた。

「一ノーリッジの養子ってどういうことなんですか?」

無論、菱理のことである。

しばらくぶりの机で、さらさらとサインをしたためつつ、師匠は口を開いた。

「もともと、ノーリッジは才能ある子弟を支援する、いわゆる足長おじさんの家として知られていてね。たいていは、単に学費を送るだけなんだが、いっそ養子にしてしまうというパターンもそれなりにある。時計塔にはやたらノーリッジ姓の人間が多いんだが、まあたいていはこの理由からだ」

視線を落としたまま、続きを話す。

「現代魔術科の設立を強力に推進してきたのもノーリッジさ。だから、現代魔術科の二つ名はノーリッジになっている」

「あ.....」

それで、分かってしまった。

「だから、ハートレスが前の現代魔術科の学部長……」

「おそらくはね。で、ミス化野は法政科に籍を置く段になって、 ノーリッジとの関係を解消したクチだろう。時計塔内での派閥闘争 もあるから、そういうのもよく聞く話だ。ノーリッジはたいてい去 る者は追わないしな」

万年筆を置いて、師匠はうんと手を首の上で組んだ。

ストレッチ気味に伸ばしてから、さきほど菱理から渡された小さな箱を取り出す。机の引き出しに入れて、かちりと鍵をかけてから、短く呪文を唱えた。

「まったく頼りにならない施錠だが、盗人のつくった鍵よりはマシ だろう。これならいつも通り第一科ミスティールの私室で保管した 方がマシだったな」

苦笑を含んだ言葉に、ちゃんとできてたら最初から事件にならなかったろうに、という師匠の嘆きも混じって聞こえた。

それから、今度はシガーケースを取り出す。

「師匠。まだ葉巻は……」

「今日はこの一本だけだ。なにしろ、さすがに病院では吸わせてく れなかったからな」

と、片目をつむった。

「約束ですよ」

「ああ、約束は守るとも」

今日はシガーカッターを使って断ち切り、マッチを使ってゆっくりと先端を炙って火をつけた。やっぱりそのやり方が師匠には似合ってるなと思った。

時間をかけて吸い込み、十分に煙を楽しみつつ、くゆらす。

一本だけと言ったためか、いつもより時間をかけて味わいつつ、 改めて切り出した。 「入院中に手続きしたんだがね。第五次聖杯戦争の参加枠を正式に 辞退したよ」

ついに、その言葉を聞いてしまった。ずっと避けたかった言葉 だった。

だから、つい余計なことを言ってしまった。

「どうして……! 」

「もともと、私のけじめだった」

と、師匠が答える。

「イスカンダルは聖杯戦争で勝利すべきサーヴァントだったんだと、証明したかった。第四次聖杯戦争で敗退したのはただマスターが劣っていたからだと、証明したかった」

葉巻の煙が、ひどく苦く感じた。

師匠の言葉は、あの列車で聞いたものと同じだった。きっと、とても長く思い続けてきたこと。この十年、ロード・エルメロイII世という存在の下地になってきた想い。

「だが、もういいだろう。それは私だけのけじめであって、英霊イスカンダルのけじめじゃない。未練はあるが、固執すべきものじゃない。彼と触れた者としても、また時計塔の君主ロードとしても、決着をつけなければならない相手はこちらだ。──それに」

それに、と師匠は付け加えた。

「もうひとりのあいつに一矢報いるなんて──この先、ずっと自慢できることを、ひとつもらったんだから」

いつもの、困ったような微笑じゃなかった。

怯えながらも敵に向ける、不敵なそれでもなくて。

晴れ晴れと、あまりにも清々しい、嬉しそうな笑みを師匠は浮かべていた。

あまりにも、その言葉と笑顔が眩しかった。もっともっとこの人

は報われていいって思うのに、その笑顔を見ると何も言えなくて。

「グレイ」

と、改めて、師匠が言った。

「すまないが、きっと私の力だけでは足りない。一緒に戦ってほしい。

すぐ、返事ができなかった。

ごしごしと顔を擦った。この一瞬だけでも、思った通りの表情をしたかった。自分の身体はちっとも自分の思い通りにならなくて、 それでも一生懸命に唇の端をつりあげた。

「……拙で、よければ」

結局泣き笑いみたいな顔で、言ったのだ。

そのとき、鍵をかけていたはずの扉が開き、ばたばたと小柄な人 影ふたつが倒れ込んだ。

「はーい! 俺も俺も!」

「ふ、フラット! 先駆けするな!」

もつれあったふたりの生徒が誰かなど、言うまでもない。

「フラット、スヴィン」

「故郷モナコでのあれこれ終わりました! いやあフェムの船宴 カーサのディーラーさんたちは強敵でしたね!」

「第一科ミスティールの特別講義終わりました! あああ、グレイたんもおかえり! この胸にズキズキ刺さる、甘くて灰色のスパイシーな香り!」

どちらも勢い込んで、敬礼みたいにぴしりと起立する。

師匠の側もおおよそ気がついていたのか、改めて咎めることはなく、代わりに同じことを持ちかけたのだ。

「ふたりにも、頼んでいいかな?」

「お任せ教授!」

「もちろんです先生!」

フラットとスヴィンが、我先にと言い募る。

それから、扉の向こうの、もうひとりに視線を移す。

「......イヴェット」

「あはは。もう聞いたかもしれませんが、法政科から解放されまして、恥ずかしながら帰ってまいりましたっ! いやそしたら、重要そうな話をしてるから、スパイとしても愛人志望としても聞かなきゃいけないかなって? なんだか重要な話みたいですし? いやわたしがオークションで射止めたはずだった掠取の魔眼は、魔眼大投射に使っちゃったとかでお流れになったんですけどね?」

しれっと出てきた少女が、ピンクのツインテールを指でいじくる。

普通なら総掛かりで弾劾されるところな気もするが、どうせメルアステア派のスパイと言ってたわけだから、師匠にしてみれば大して変わらないのかもしれない。フラットやスヴィンもおおよその事情は聞いてるはずだが、何ら糾弾する素振りは見せなかった。

これもまた、時計塔の日常ということかもしれない。

「イッヒヒヒヒ、まだまだ騒がしくなりそうだなこれは!」

アッドの声が、こちらの耳朶を叩く。

それから、

「ああ、そうだ」

と、師匠が生徒の方を振り向いた。

「フラットは、カウレスの原始電池にこっそり盗聴機能を仕掛けて いたことについて、反省文を書いてもらう。それから帰省中の宿題 を三倍にしておくので、次の授業までに終わらせるように」

「鬼ですか教授?! むしろ鬼神っていうと格好いいですね! あ、

今度の英雄史大戦は日本の鬼デッキとかどうですか茨木童子酒吞童子星熊童子風鬼水鬼隠形鬼よりどりみどりですよ! 今度俺、日本の友達から最新カード輸入してもらいますから──」

「─そうだな。お前の反省ぶりはよく分かった。少し黙れ」

「きょ、教授! 駄目ですって! 指をワキワキさせながら近寄らないで!」

早速、アッドの予想的中。

実に騒がしく、『強化』された師匠の右手が、フラットの顔面を ぎりぎりと持ち上げたのだった。

\*

─もう少しだけ、話は続く。

さらに一週間ほど経った、夜のことだ。

十二月も中旬。街は早くもクリスマス気分で、いつもどこかから ジングルベルの曲が聞こえてくるようになった。初めてロンドンに 来た頃は多くの人がごった返した景色を、自分はひどく不気味に 思ったものだった。灰色のビルに毎日定時に乗り込んでいく人の群 れは、まるで墓場へと向かう死者の列にも見えたからだ。

今は……少なくとも、嫌な気はしない。

ぬいぐるみのバルーンが浮かび、陽気な音楽がかかり、道行く人 もいつもより少しだけ幸せそう。そんな風に受け止められるように なっていた。自分は多分一生完全には馴染めないだろうけれど、だ からといって馴染めない光景を拒絶する必要はないのだと、その程 度には落ち着いて見られるようになっていた。

ふと、とりわけ賑やかな曲が耳をついた。

クリスマス前のロンドンでも、とりわけ鮮やかな光景であった。

どうやら、パレードのようだ。着ぐるみや仮装をした人々が行列を成し、オーケストラばりの楽団を背景に、見事なダンスを披露する。ゆっくりと行進するその後ろでは、たびたび美しい花火も打ち上がり、観客たちが喝采をあげていた。

(.....新しい百貨店?)

盛大なパレードは百貨店のオープン記念らしい。

結構前から工事していた空間に、今は白亜の優美な建物が露わになっていた。ロンドンの名所がまたひとつというムードで、これはオープンとしては大成功なのだろうなと、ぼんやり思っていた。

ただ、立ち止まったのは、そのパレードだけが理由ではなかった。

百貨店の入り口で、バイオリンケースを持った人影が手を振っていたからだ。

「.....メルヴィンさん」

「や」

と、真っ白な髪の青年が笑った。

とにかく目立つ相手なので、公道にいるだけで周囲の人々が振り返る。隠匿を美徳とする魔術師にはよくないのではないかと、無駄な心配をしてしまう。

「あの、どうして」

「ははは。ここがママの経営なんでね」

背後の建物に、メルヴィンが顎をしゃくった。

「百貨店が、ですか?」

「そうそう。今夜が落成パーティで、出かけられるぐらいには体調 も良かったから一応挨拶してたわけ。魔術師ったって表の世界での 顔は必要だからね」 魔術師のそれとはまた違ったスケール感で、びっくりして唾を飲み込んでしまう。魔眼オークションでも十分知っていたはずなのだが、自分の生活圏の出来事となると、また違った驚きがあった。

「もう終わったところなんだけど、よかったら、お茶でもどうか な」

「いえ……今日は師匠の部屋の大掃除をする予定なので」

手に持っているのは、そのための道具だった。

とりわけ、靴磨き用の刷毛や布はバイト代から奮発したものである。

自分で選んで買ったのは初めてなので、やたらと緊張して、購入時には舌を嚙んでしまった。まあ、これは自分のブーツにも使うつもりだからいいのだ。師匠も一昨日にようやっと杖を手放せたみたいなので、少しぐらいは手伝ってもらおうとも思っていた。

「だったら、歩きながらでも」

「……わ、分かりました」

その強引さに押し流されて、うなずかされてしまう。

さっと横に入ったメルヴィンは、クリスマスの賑々しい通りをしばらく歩いてから、鼻歌でも始めるような調子で、こう切り出したのだ。

「うん。少し君と話したかったんだ」

「拙と、ですか? 面白いとは思えませんが」

正直なところを言う。

すると、青年はくっくと喉を鳴らして、そういうところがいいんだよなんて歯の浮く台詞を言ってのけた。容姿からしても、魔術師なんかより俳優になった方が良かったんじゃなかろうか。演技が少々へっぽこだろうが、整った顔とミステリアスな経歴に惹かれる者はごまんといるだろう。

「ところで」

と、青年が口にした。

なぜだか、その表情が絵本で読んだ悪魔みたいに思えた。

「君は、うちとエルメロイ派の関係について聞いたことがあるのかな?」

「いいえ。そういう話はしないので」

借金ならいくらもあるだろうけれど、細かな中身は聞いたことが なかった。

「そうか。じゃあちょうど良かった。もともと、うちはエルメロイ派の破損した源流刻印を五十年計画ほどで調律してるんだよ。あ、言っておくけど、五十年計画で再生見込みってのはうち以外じゃちょっと難しいハイペースだからね? ただ、それとは別に、ウェイバー・ベルベットの担保──ベルベット家の魔術刻印も、私が預かってるんだ」

魔術刻印。

かつての事件でも大いに関わった、魔術師に欠かせざる要素。

「どうして、あなたがそんなものを?」

「そりゃあ簡単さ。ライネス嬢の手で、彼がエルメロイの君主ロードにされたとき、担保として奪われたのが魔術刻印なのさ。預かるなら調律師の私が一番適任だろう?」

あ、と声をあげそうになった。

いままでも何度か、それに近い話は聞いていた。ライネスが師匠から大切な担保を取っているというところまでは、会話に出たことがあったからだ。

しかし、その内容は初耳だった。

「それは……師匠の刻印は、貴重なものなんですか?」

「いいや? ぶっちゃけてしまえば、魔術刻印としての価値はほぼ 皆無だ。ベルベット家は三代しか経ってない上に、もとが大したこ とがない。副作用もさほどない代わりに、大した魔術も刻まれてな いタイプだね。ただ、この世界でウェイバー・ベルベットに対応する魔術刻印はこれしかない。魔術師を裏切らせないという意味では、最高の担保だよ。最初から生き甲斐を奪っておくようなものなんだから」

魔術刻印の性質からすればそうだろう。

先祖から代々受け継がれる、魔術師の象徴。もうひとつの臓器。 彼らが血統にこだわるのはこの魔術刻印を受け継がせられるのが、 自らの子孫のみだからである。師匠が正道の魔術師たらんとするな らば、魔術刻印はどうやっても欠かせない要素だった。

そして、あの人はどれほど自分の才能に絶望していても、諦めたわけではないのだ。

ライネスが、兄に絶対の信頼を寄せるはずだ。

彼女の立場からすれば、師匠がけして裏切れないと知っているの だから。

(.....多分)

多分、と思う。

始まりはそうだったのだろう。

۲.....

不思議と、胸はざわつかなかった。

始まりがそうだとしても、今自分が知ってる師匠とライネスや、 その関係が変わるわけじゃないと、それも自然に思えたからだ。

「ふうん。あまりショックじゃない?」

「みたいです」

と、なんだか他人事みたいに、自分は言っていた。

ふうん、とこちらを覗き込んでいた青年は、もう一度声を発した。とてもつまらなそうなのと、とても面白そうなのが、同じくらいに混じって聞こえた。

黙ったまま、少し歩く。

いつしか、通りの人々は減っていた。スラーに近づいているからだった。もうすぐ魔術師の街になる。緩衝域というか、現実と魔術のあわいみたいな場所。

どこか寂しげな、コーラの自動販売機。

古めかしいアパートの窓に並べられた、鉢植えの花々。

夜の闇に溶けた生活の臭いと、神殿めいた静謐さは、矛盾するようで溶け合っている。

ふと、今度はこちらから質問してみた。

「―メルヴィンさんは、どうしてウェイバーって呼ぶんですか」

「うん? そんなの決まってるだろう」

むしろ、訊かれた方が不思議だというように、メルヴィンは首を 傾げた。

「いつか、彼はロード・エルメロイの名を他人に譲るんだ。II世だとか、ましてやIII世なんてことじゃなくて、今度こそ真正のロード・エルメロイとしてね。だったら、そのときウェイバーの名前を呼ぶ相手がいないと寂しいじゃないか」

至極真面目に言ってのけた彼に、自分はつい瞬きしてしまった。

そんなこちらに、青年は足し算でも教えるみたいな丁寧さで話し かける。

「確かに第四次聖杯戦争とやらは、ウェイバーに大きな影響をもたらしたかもしれない。私が目を付けたのだってそれが理由だ」

冬の夜空の下で、情熱的にメルヴィンが言う。

「だけど、それまでの十九年間だって、ウェイバーにとっては重要な時間だったはずだ。その時間がなければ、彼が変わることだってなかったはずなんだから。同様に、もしも君主ロードを降りることになったとしても、その後は君主ロードであったときと同じく大切な時間だろう。少なくとも、私はそう思っているし、それだけで十

分じゃないかな」

第四次聖杯戦争までの、時間。

そして、君主ロードでなくなった後のこと。

ああ、そうだ。

その通りだ。

聖杯戦争の影響があまりにも大きすぎて、見失っていたもの。君 主ロードであることが当然すぎて、忘れていたもの。この自称人で なしは、人でなしなのに─人でなしだからか、誰もが見落とすよう な当たり前のところに、平然と辿り着くらしい。

ちょっとだけ、悔しかった。

だけど、自分にだって言えることはある。

ひとつ息を吸って、

「そうなっても、拙にとって、師匠は師匠です」

と、答えたのだ。

「フラットさんにとっては教授だし、カウレスさんやルヴィアさんやスヴィンさんにとっては先生です。ほかの生徒にだってそうだと思います。きっと、それはこれからも変わりません」

少しぐらいは、やり返せただろうか。

メルヴィンは、神妙な顔つきでこちらを見つめていた。

「……その通りだね。うん、やっぱり君は彼について、私とはちょっと違う角度で見てくれている。多分どっちも同じことなんだろう」

「それって、矛盾しないんですか?」

「しないとも。人の顔なんてのは、誰かが見てくれる数だけ増えるものだろう? 逆に誰も見てくれなければ、顔なんてないのと一緒だよ」

独特な論理は、嫌いじゃなかった。

「会えて愉しかった。じゃあここで」

と、それきりで手を振って、メルヴィンはくるりとターンする。すぐにその背中が闇に吞まれて、自分の眼でも分からなくなった。

ふと、夜空を見上げた。

いつのまにか、雪が降りはじめていた。

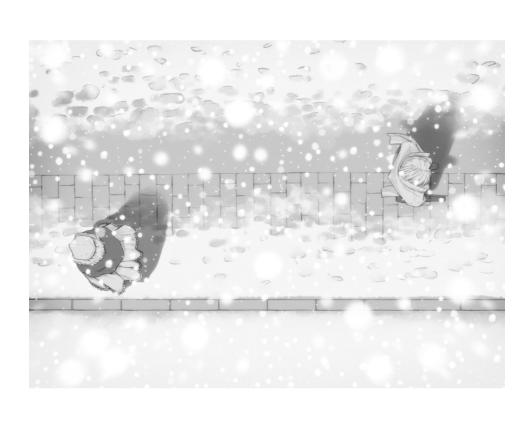
徐々に勢いを増す白い結晶は、朝には相当積もるんじゃないかと 予想させた。

早く、師匠に会いたいと思った。

ほろほろと舞い降りる雪片に──雲の合間でしらじらと輝いている 月に、つい祈らずにいられなかった。少し早足で歩いていた足は、 やがて小走りになって、まっすぐスラーの街へと向かっていった。

どうか。

どうか、あの人に少しでも報われる未来がありますように、と ---。



"深海のような"世界に溺れよう

東出祐一郎

※本巻のネタバレがあるので、未読の方は速やかに最後まで読むべし。

.....この本を読んで感嘆の一息をつき、解説を読んでいるあなた。あるいは、ともかく解説から読んでいる方に、今更説明するまでもないことであるが。

ロード・エルメロイII世ことウェイバー・ベルベットは「Fate」 世界 ( つまりTYPE-MOONの世界であり、海外風に言えばNasu verse ) の住人である。

初出はTYPE-MOONから発売された書籍「Character material」。 何人かのまだ見ぬキャラクターと共に掲載された、おおよそ我々の 誰一人として知らない、首を傾げる他ない謎の魔術師であった。

そしてそれから数ヶ月の後、彼は小生意気な若僧、ウェイバー・ベルベットとして「Fate/Zero」に出演を果たしたのだ。

表の経歴だけならば、「Fate/Zero」を読めば簡単であろう。しかし、この「ロード・エルメロイII世の事件簿」では彼のキャラクターを追うだけでは、首を捻る箇所が幾つも出てくるはずだ。

そもそも、魔術師とは何なのか。魔術とは何なのか。何が魔術 で、何が魔術でないのか。

彼らはぞっとするまでに人でなしだが、それを他ならぬエルメロイII世が許容しているのは何故なのか。

それは、この世界に流れる大河(藤村さんでなく)、根幹とでも呼ぶべき部分がTYPE-MOONの世界だからだ。

サーヴァントらしいサーヴァントはほとんど登場せず。戦闘そのものすら、さして重要視されない。

重要視されるのは、「魔術」と「謎」。

もしも「分からない」と首を捻る読者がいたのなら、たとえば「魔法使いの夜」(PCゲーム)をプレイしてみるといい、あるいは「空の境界」を読んでみるのもいいだろう。それでも足りないとなれば、「Fate」作品における様々な魔術関係の描写を思い出し、友達に尋ね、首を捻ってみよう。

もちろん、手っ取り早く目の前のスマホなりパソコンなりで検索をかけてみるのもいいだろう。無限のような与太話が、ファンの間で(含む俺)語られているのを知ることができるはずだ。

そこまでいったら、既にあなたは深海に没したも同然だ。

何気なくやり過ごした「Fate/Grand Order」のテキストが、あるいは雑誌等のインタビューで語られていたちょっとした一言が、しっかりとTYPE-MOON世界に繋がっている様が理解できているはずだ。

無論、それを見なくても知らなくても「Fate」シリーズのほとんどは楽しめる。神話の英雄たちが織り成すダイナミックなアクション、丁々発止のやりとり、魅力的なキャラクターたちを思う存分楽しめるはずだ。

しかし、だがしかし、だ。

誤解を恐れず喩えるならば、それは海で泳いでいる状態に似ている。少し潜れば、色鮮やかな魚たちが悠々と泳ぐ様、美しい珊瑚礁を目撃することができるだろう。

だが、光が届かない深海にも闇の美しさが存在する。

「ロード・エルメロイII世の事件簿」とは、闇の美しさを覗き込むような快楽を持つ作品である。

出てくる登場人物たちのほとんどはどうしようもなくひとでなしで、どうしようもなく狂っていて、時には目的のために裏切りや殺人さえしでかす癖に――そこには狂おしいまでの魔術に対する真摯さがある。

そして、TYPE-MOON世界がいかなる時も魔術と無縁の作品ではない以上、本作をしっかりと読んでさえいれば、この先も出続ける

であろう作品を他人より七割増しで楽しめるという訳だ。

ところで本巻で××であった「Fate/Apocrypha」のキャラクターであるカウレス・フォルヴェッジ君……は○○で■■のカウレス君が満を持して登場しておまけに大活躍した(本人的には)訳ですが、当然ながらこちらの世界では「Fate/Apocrypha」で勃発した聖杯大戦が起きている訳ではありません。

しかしながら、「まあもし似たようなことが起きれば、大体似たような結末を迎えるよね」という提案と共に、我らがカウレス君も 無事に教室に入った訳であります。

......ええと、ここまではカウレス君というキャラクターを作った際にある程度予測していた出来事ではあったのじゃが。

わし、まさかあの「カンパ、そしてキーノ。無敵の男たちだ」(by「デスペラード」)的な扱いである赤のマスターたち――の親戚や子供まで教室に入ってくるとはさすがに予測しておりませんでした.....。

そこまでならまだしもコミック版「Fake/strange Fake」(原作: 成田良悟 / TYPE-MOON 漫画:森井しづき)で顔まで拝めるとは 思いませんでした......。

まあ三田さんなら大丈夫だろう。きっと間違いなく有効活用して くれるさ!

(TYPE-MOON名物「困ったときは三田先生に頼れ」)

あとがき

三田 誠

―列車の旅は幕を下ろす。

魔眼は眠りにつき、一度その瞼を閉じる。

されど、これは終わりにあらず。

再び眼を開き、新たな謎に眼を凝らすまでの、ただ一時の休息なり。

お待たせしました。第五巻、『魔眼蒐集列車(下)』をお届けし ます。

何しろ上巻の内容が内容だったもので、今回は絶対冬の間にお渡ししなければならないと、プレッシャーがかかったのを覚えています。しかも上巻でちりばめた伏線は、僕の予想以上に膨れあがり、上下巻に分けたにもかかわらず、下巻だけで一巻を超えるテキスト量になってしまいました。エルメロイII世にとってそうだったように、僕にとっても総力戦だった一冊です。

とりわけ、エルメロイII世を古くから愛してくださったファンの方には長い四ヶ月だったかと思います。どうか、楽しんでいただけますように。

\*

さて、ここからは少し内容について。

表題にもあるように、今回はTYPE-MOON世界でも重要なガジェットである魔眼を中心に配しながら、死徒やサーヴァント、代行者と魔術師の入り組んだ話となっています。

一般人からは超人である魔術師からしても、サーヴァントや死徒がどれほどのものか、はたまた人間の魔眼や魔術、体術はどこまで抗し得るのか、是非描いてみたいと考えたからです。結果として、大量の要素を盛り込んだケースになりましたが、『ロード・エルメロイII世の事件簿』を読むと、Fateに限らず、ほかのTYPE-MOON作品がより面白くなるよと思ってもらえたら嬉しいです(もちろん逆も嬉しいです!)。

また、上巻で、「ここより先はシリーズ全体の後半戦」と書きました。読了された方には、おおよその意味が伝わっているかと思います。エルメロイII世が挑まなければならない謎、そして彼と深く関わってしまっている相手は、そのヴェールを脱ぎました。露わとなったのはまだ一部にせよ、かの謎が彼の前に再び立ちはだかることは明白です。

だからこそ、この下巻は後半戦開幕にふさわしい激戦となりました。

ホワイダニットという言葉は、ミステリの要素であると同時に、 登場人物全員につきつけられた刃でもあります。一度その刃を向け られれば、誰もが傷つき、葛藤し、誰もが自らの価値観について考 えざるを得ない。そういう言葉です。

多分、そのありようには、僕の価値観も反映されてるのでしょう。

どのようなとき、人が最も美しいか。

少なくとも、そのひとつについて、僕はこう思うのです。──傷ついて倒れ伏し、泥にまみれ、それでも立ち上がるとき、人は最も美しいと。

では、今回本当に倒れ伏したのは誰だったか。

泥にまみれたのは誰だったか。

それでも立ち上がったのは、誰だったのか。

読了したあなたが、そんなことをふと考えてくださったなら、作者としてこれ以上の幸せはありません。

最後になりますが、いつもながら美麗なイラストを描きおろしてくださった坂本みねぢさん(とりわけ幼いオルガマリーがお気に入りなのです)、作中の骨子となる考証を担当してくださった三輪清宗さん、カウレスのチェックや図々しくも解説までお願いしてしまった東出祐一郎さん、設定面の整合など協力いただいた桜井光さん、成田良悟さん、また奈須きのこさんやOKSGさんをはじめとしたTYPE-MOONのスタッフに感謝を。

次は、また夏頃にお会いできるかと思います。

二〇一六年十一月

スーザン・グリーンウッドの『魔術の人類史』を読みながら

三田 誠

## MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

## イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

5「case.魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン(下)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2017年10月18日 発行

ver.004

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 5 「case.魔眼蒐集列車(下)」』

2016年12月29日 初版発行

2017年8月25日 第五版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

**%Japanese** text only

